
居候日記

narrow

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

居候日記

【Nコード】

N3362S

【作者名】

narrow

【あらすじ】

子供の姿をした彼の正体は悪魔。

不慮の事故によって主従契約を交わしてしまった、主人の部屋に住み着いている。

主人は若い女性であり、本来の姿であった時の悪魔に恋をしていた。悪魔の方も、一緒に暮らすうちに彼女に惹かれ始めていた。

妨害する兄、見守る天使…

悪魔と人間の恋は実るのか？

ドタバタしたりバツたりシリウスに悩んでみたりなオカルティッ
クラブコメ！

1 八つ当たり。(前書き)

使い魔日記の続編にあたりますが、こっちから読んでもたぶん大丈夫です。

1 八つ当たり。

ウチには、もうずいぶん前から子供の姿をした自称“悪魔”が、住みついている。

最初、バーでべろんべろんに酔っ払って出会った当時、彼はびっくりするほど背の高い、大人の男だった。

その彼に、あたしは恋をした。

ほとんど、見た目に一目惚れしたようなカタチだった。

それが、いろいろあって、あたしの方から誘ってこの家で一緒に住むようになり、いろいろあって彼は子供の姿に変わってしまった。姿がかわったのは、“悪魔”としての力を失ったせいらしく、あちこちにちらばったその力を、見つけては回収している。

そんな彼とついこの間まで、あたし達はこの狭いワンルームで、うまくいつているのかいないのか、なんとも言いがたい共同生活を送っていた。

ついこの間まで、というのも、今のあたし達はたぶん、結構うまくやれていると思うから。

俺はお前のイチバンになりたい。

この言葉をきっかけにして、時に他人よりも冷たかった彼は、ほんの少しだけ優しくなった。

たぶん。

だけど、前みたいに意地悪されたり、振り回されるのは全然かわらなくて、なんだかあたしの反応を楽しんでるだけなんじゃないかって気もする。

だから、イチバンになりたい、なんて言っても、むこうがあたしをどう思ってるのかはちよつと謎。

だけど、あたしは信じたい。

だって、好きなんだもん。

一緒にいて、嫌な思いもたくさんしたけど、あまり笑わなくて、

どこか悲しそうな瞳をしたあの人を、どうしても嫌いになれなかった。

それどころか、時間がたつほど、あの瞳が気になっていった。

こっちのことをどう思ってるのか、よくわからない態度に心を引っかかり回されて、どんどん後戻りができなくなつて。

一緒にいるのに、あの人のことは、意地悪だつてことと、食べ物の好み以外、ほとんどなにもわからない。

それでも、いつかあの瞳の理由がわかったら、その悲しみをなくしてあげられたら、その時、本当のあの人に会える気がする。

そうしたら、きつともっと好きになる。

だから、彼がイチバンになりたい、って本当に思ってくれたなら、もしかしたら、いつかは。

でも今は、きつとまだまだそんな日は遠いみたい。

そんなあたしたちの日常は、たとえばこんなふう。

(続)

続き

『桃源』駅から、歩いて20分くらい。

便利でもなければ、特に不便でもない場所に立つ、小さいアパートがあった。

入り口には、金のプレートでできた鐘の絵を添えて、飾り文字で“Happy Bell Heights”とある。

そのハッピーベルハイツ、303号室にはイソウロウ（居候）がいた。

今日も留守を任されている彼は、まだ小学生くらいの幼い少年だ。その彼は、イライラした口調で電話をしていた。

「だから、どうして断れない？ 兄貴と俺とどっちが大事なんだ？ も・ち・ろ・ん、お前があいつを取るなら俺にも考えが・・・何？ 選べないだとお？ いいだろう、覚悟しろ。・・・やだって、お前・・・仲良く？ 無理だ。・・・しつこいな、わかったわかった、わーかーった！ 少しは合わせる！ それでいいな？」

結局、相手の言うとおりにするハメになったようだ。

『やった、ありがと零さん！』

電話の向こうではしゃいだ若い女は、この部屋の主、あるじレイこと鳴なる神鈴。かみれい神鈴。

話の内容は、彼女の兄が今日これから泊まりに来るということ。部屋の主であるハズの彼女が、わざわざ居候にその許可を求めているのだ。

そんな事をするのも、居候の態度がヤケにでかいのも、彼女が居候に惚れてしまっているせいだ。

とはいえ、決して彼女は危ないお姉さんではない。

今は小さなカラダで、女の子みたいにキレイな顔をして、欠点といえは少々顔色が悪いくらいのこの子供は、元からこうだったワケ

ではない。

そもそも人間ですらない。

自称“悪魔”。

自称とはいえ、それらしい翼や芸当を過去にレイも目の当たりに
していて、ウソとはいいきれない。

レイと初めて出会ったとき、彼は異様にひよる長いカラダと、長
い黒髪とを持つ、黒ずくめの服を着た不気味な男だった。

青年というには落ち着きすぎていて、中年というには若く見える、
その陰気な男にレイは何故か強くひかれた。

それからしばらくして、レイの方から押し切るようにして始まっ
たこの同居生活を、初めのうち彼は受け入れていなかった。

ただ、逆らえなかったのだ。

レイに会うまで、名もないただの“悪魔”だった彼は、彼女の聞
き違いで“零”という名をつけられていた。

二人はそのとき気づかなかったがそれは、つまり名前を与えるこ
とは“悪魔”にとって主従契約を意味していたらしく、それ以降
零はレイに逆らえなくなった。

交渉の余地はあっても、相手の言うことがまるでもう一人の自分
の意思のように感じられるため、長い抵抗はできない。

あまりハッキリと彼女に逆らえば、体が動かなくなったり、ひど
い時にはその力、魔力であり生命力を奪われた。

今まで零は、願いを叶える契約を通し、人間をエサにして生きて
きた。

その自分が、人間の言いなりになる状況は、彼にとって受け入れ
がたかった。

よって彼は、ある時レイの使い魔という境遇から抜け出そうとす
る。

どれだけ自分が恐ろしいかをレイにわからせ、向こうから関係を
断ち切ろうとするようしむけたのだ。

結果は失敗で、主人に逆らい、死を意識するほどの恐怖を与えた

使い魔は、その力のほとんどを失い、小さな子供の姿に変わってしまった。

生きてはいられたが、悪魔らしいことは何一つできない。

そうなってしまつては、すさまじく無欲な主人の下で、ただの家政夫として生きるのもやむをえなかった。

そうこうするうちに、主人のささやかな協力もあり、零はほんのわずかずつ回復していく。

一方、彼から抜き取られた力は、空気にとけてみたり、あちこちで小さく固まつてそれぞれ別の魔物となつたりしていた。

零を本体とするなら、彼より生まれ、時に彼の姿を借りるそれらは“影”に似ているかもしれない。

その“影”たちは、時に自主的に零を探して戻ってきたり、己が本体だとばかりに敵対したりしながら、結局は零の元へ大なり小なり帰ってきた。

ある程度力が戻ると、それは零の外見にも反映した。

少し成長した今の彼なら、一時的になら元の（大人の）姿に戻ることも、人間を惑わせたり、魔物、たとえば“天使”や他の“悪魔”などと派手なバトルを繰り広げることでもできた。

が、家政夫の日常生活にそんなものは必要なく、他の魔物や“影”にでも出会わない限り零はただただひたすらめちやくちや態度の悪い家政夫に徹していた。

それというのも、だんだんと、この生活もそんなにイヤじゃない、と思い始めたせいだ。

（続）

続き 2

確かにはじめはイヤイヤだった。

しかし、彼はやがて気づいた。

この生活、この部屋の居心地のよさに。

レイという時間の中、ゆるやかにただよう安らぎに。

それを、いつしか気に入っていたことに。

なら、この生活も、あの女も俺のもの。

そう決めた彼はずうずうしくも主人であるレイに、彼女の“イチバン”になりたいと要求をし、自分の意思でここを居場所と決めたのだった。

一方、レイにしてみれば、願ったり叶ったりというか、どんと来い、である。

何と言っても好きな相手であるし、イチバンになりたい、と言っている、いまいち“好き”とは違う感じのする彼の気持ちを、もつと自分に向かせるためには一緒に過ごす時間は多いほうがいい。

ましてや、それを彼が望んでくれるならばいいことなしだ。

好かれない、そう思うがゆえに彼にあまり逆らえず、また、その想いゆえの努力を毎日おこなわないレイだったが、それが正解かどうかは誰にもわからない。

さて、レイのいままでの努力が実ったのか、そうでもないのか、彼女に対しては少しだけ気を許している零が、なぜ彼女そっくりのその兄をイヤがるのか。

まず、レイの兄、鳴神御雷は趣味ではないだろうが、時々女装をする。

過去に零がまだ大人の姿だったとき、レイの彼氏と間違えられ、女装姿の御雷に迫られたことがある。

妹命の兄が、二人を引き裂こうと画策したものだが、原因はそれではない。

女装はよく似合っていたから、零は特に気持ち悪いとも感じなかったし、気になるほどの事はされていない。

次に、御雷はドSの上に重度のシスコンで、それはそれは入院治療が望ましいほどの患いつぶりだが、それも理由にはなかった。悪魔というのは、心に闇を作りがちな病んだ（毎回女装で妹の彼氏を撃退するのだから、病んでいるのはまちがいない）人間と相性がいいのである。

ただし、当初気にならなかったそのシスコンも、レイに対して独占欲が芽生え始めてからの零にとっては、少々ジャマと言えるようになってきた。

とはいえ、それは毛嫌いの理由ではない。

そのうえさらに御雷は、性格がねじまがった気分屋だったが、それも悪魔の零にとっては、親しみすら覚えるような要素でしかない。では何がいけないかというと、欠点は妹と同じだった。

うざいのである。

今の零は、見た目が可愛らしいとはいえ、10歳くらい（に見える）の男の子である。

その零に、べたべたまわりについてはヒザに座らせてみたり、抱きついて寝たりと、ヘンタイじみた可愛がり方を繰り返すのだ。

おまけに大抵酔っていて、飲んだ帰りに寄ったり、レイの家で飲み始めたりと、パターンは違っても、零の知る御雷はいつも飲んでいた。

ピポーン ピポーン ピポピポピポooooooooーん！

そのウザい兄のおでましらしい。

さきほどの電話から一時間ほどたっただろうか、ドアチャイムのこの鳴り方は間違いなく御雷だった。

頭のおかしい人間が、この部屋の住人にイヤガラセをしにきた可能性も、限りなく低いが考えられる。

零としては、後者のほうがまだマシだ。

主人の兄に危害を加えるのは零にとって危険なことだが、他人な

らばどうしても始末できる。

そう、始末してしまえばいい。

御雷もそうできたらどんなにいいか、と思いながら、それが不可能であることを知っている零は、小さく舌打ちする。

どっころしょ、のリズムで重い重い腰を上げ、零はドアを開けに行く。

ドアが開ききる前に、飛び込む勢いで御雷が入ってくると、零を抱きしめた。

「お待たせっ！俺だよ！！」

「・・・」

「ごめん、零さん。」

ハートつきのセリフを吐く男に、零はウンザリと黙ったまま、後ろにいたレイは苦笑。

そのレイに向かって、零が訂正する。

「な・ゆ・た」

ハッとして、レイが言いなおす。

「あ、そだ なゆくんだよね！」

ややこしい事だが、大人の状態の零に会ったことがある御雷の前では、コドモの零は、なゆたと名乗っていた。

レイに零だけでもややこしいのに、三人目の“れい”が現れては混乱してしまう。

そして、零としては大人とコドモの零が同じ存在で、かつその姿を自由に切り替えられるなどとは知られたくない。

なぜなら、めんどくさい。

(続)

続き 3

レイの相手だけでも たびたびウザいののに、悪魔の零を御雷に受け入れさせる手間なんて、考えたくない零だった。

レイ以外の人間とは、深くかわる気もない。

だから、彼は外でもその偽名を使い続けた。

彼にとって、主人以外の人間は、名を教えるほどの価値もない。というより、コドモの状態を楽しんでいるのかもしれない。どちらなのかは、彼にしかわからない。

とにかく、大きくても小さくても、彼を零と認識できるのはレイと、今この場にはいない零の古い知りあいだけだった。

所で、なゆた、とは那由多であり、数の単位の一つだ。

零という名にちなんで、数がらみで本人がとっさに名づけたものだったが、興味の無い人間には知られていなかったりもする。

現に御雷は彼を「なゆ太」だと思っていた。

「なゆ」がどういう字なのか、とか、苗字はなんなのか、とかは、あまり気にならないらしい。

“ なゆ太 ” を御雷は なゆたん と呼ぶ。

御雷は、相手の気持ちもあり気にしない人格だ。

「なゆたん、もうカワイイなーチューしちゃうチューう。」

「お兄ちゃん！ れ、つなゆくんイヤがつてる！！ ダメやーめてー
ー！！」

暴走する御雷を必死で止めるレイだが、止まりきるものでもなかった。

互いの力才が近すぎる。

「あゝー！！」

レイの悲鳴。

柔らかな子供の頬に、男にしては しなやかな線で描かれた唇が押し付けられた。

軽く吸い付かれる感触に、零の無表情な瞳から、さらに生気が失せていく。

それでも。

「いいんだ、レイ。俺はもう・・・慣れた。」

御雷が来ると決まったときから、零は、このくらいの覚悟などとうに決めていた。

すでに儀式化された洗礼だ。

「ううう・・・」

やや口をとがらせ、悔しそうになるレイの表情には、あたしは良くない、と思っているのがありありと浮かんでいた。

しかし、誰もそれを見ていない。

「もー、おにちゃん早く入ってよ！いつまで玄関にいんの？」

“儀式”の事は零が受け入れてしまっていて怒れない為、レイは違う理由で兄を叱ることで、とりあえずは気をまぎらわせたようだと、そんなこんなで騒がしく夜は更けていき、次の朝が来た。

「待てよレイ。」

ベッドから零の声がする。

「むり。もう行かないと。」

レイは声のする方を見ようとしなない。

「またコレを置いていくつもりか？おいっ！」

「それ以上いわないでっ！お兄ちゃん起きちゃうし、あとよろしくつごめんねっ！」

耳をふさぎ、レイはそそくさと出かけていった。

「クソッ」

あいつ、だんだんずうずうしくなりやがる、と思いながら零は姿を霧のように変えた。

そうしておいて、わからないように御雷の腕の中から抜け出す。御雷に捕まっても、彼が寝ていれば、こうして抜け出すのはカンタンだったが、あえてレイの前では同情を引いて、彼女になんとかさせようとしたのだ。

アテは、はずれてしまった。

毎度のことともいえたが、零としてはヘンタイの兄よりも自分をかばうべきだろう、といつも思っていた。

魔物であり、ヒトを操ることなどたやすい零だったが、御雷にはそうできない理由があった。

それができればさつさとお引取り願うことも可能なのだが、禁止されているのである。

主人であるレイの不在中も逆らえないくらいに、嚴重に。

以前、御雷のウザさに殺意を覚えた零が、彼にその力を使ったことがあった。

さすがに、主人の兄を殺してしまうわけにもいかないの、自分の幻を見せたのだ。

幻覚は、本人にしか見えていない。

誰も居ない空間に向かってパントマイムを始めた御雷のようすは、零にとってはオモシロかったが、レイにとってはかなりのショッキング映像だったようで、半泣きで止められた。

もう二度と兄におかしな事はしないでくれ、と涙をいっばいにためた瞳で何度も頼まれた。

以後、零は御雷のなすがままだ。

自分でこの状況に追い込んでおきながら、時々御雷に嫉妬しているらしいレイは、気づいてないだけで相当のMなんじゃないか、と零はひそかに思っている。

なるほど、Sの御雷と仲良しなワケだ、と一人で納得していたりした。

そんな零は、SだのMだのという分類上において、自分が見下している存在の御雷と同じ場所に位置することを、今のところわかっていなかったりもする。

が、とにかく心の中でいくらバカにしていようが、御雷の横暴に逆らえない零の今の状況は変わらなかった。

逆らえないから、余計に腹が立つ。

表情は何一つ動かさないうまま、零は胸の内では一人グチった。
だいたい、自分の話に耳も貸さなかったあいつ（レイ）の態度も
気に入らない。

前はもう少しちゃんと謝るとか、すまなそうにしてみせるとか、
このカス（御雷）の相手をするよう頼み込むとかしてきていた。

それが何だ、さっきのアレは。

もしかして、俺がこのクズ（御雷）の相手をするのが当然だとも
思ってるんじゃないか？

俺よりもこのゴミ（御雷）の方があいつの中では順位が上なのか？
だとしたら。

ここで零は、見たくもないから目をそむけていた御雷の寝顔をに
らみつけた。

油断しきった寝顔は、よりいっそう妹に似ていて少し憎めない感
じがした。

無意識にふたたび目をそむけた彼は、自分はそのことに気づかな
かった、と思うことにした。

コイツは敵なのだ。

ムカつく寝顔だ、と心の中で毒づいてみる。

とにかく、このクソ（御雷）のせいで気分はサイアクだ。

零は、なんとか彼に復讐する方法がないか、気晴らしになること
はないかと、まだ今のところ静かな部屋で考えはじめた。

しばらくして、御雷が気持ちよく目覚めるころには、零の考えも
すっかりまとまっていた。

「なあ御雷」

目覚めた御雷は、冷蔵庫の中から勝手に出したジュースを飲んで
いたが、零の声に軽く吹いた。

「っ…、え？」

零が、自分から御雷に話しかけることなどほとんどない。

おまけに、呼び捨てだ。

しかし、聞き間違いではないらしく、薄い灰色に見える瞳はまっ

すぐ御雷を見ている。

「何だよ、なゆ太。」

手で口元をぬぐいながら御雷が答えた。

「最近、レイがな・・・」

わざとらしく表情をくもらせた零の話に、御雷は身を乗り出してきた。

（続）

続き 4

「あたしとしてはあ、お兄ちゃんと零さん、仲良くしてほしいんですけどねー、あ、この皿さげちゃいますね。」

レイの仕事場は、アルバイトとして働くケーキ店”Rencon^{ランコン}tree”だ。

親しげに話しかけている相手の客は、長い金髪をした、外人と見える青年。

「でも、零くんベタベタされるのキライそうだしねえ、難しいんじゃない？」

ふにやふにやとした話し方ながら、スラスラ流れる言葉遣いだけを聞くと日本人とは思えない。

「スズキさんも、そう思いますう？」

「残念だけど。まあ、とりあえずは彼の不満がバクハツしないよう、お兄さんが来たあとはゴキゲンとってあげるとかしたほうがいいんじゃない？ 会わせないようにするのが、一番だとは思うけどね。」

スズキと呼ばれた、どう見ても外人ふうの彼は、やはりふにやつとしたしゃべり方で答える。

「うーん、ゴキゲンっていつでもお、甘いものも毎回きくワケじゃないしなあ。」

「食べたくないわけじゃないだろうけど、零くん、基本的に人間キライだから“人間らしく”なっちゃうのがイヤなんですよ。あ、でもホメてあげるのとか地味にキくんじゃない？ いっがーいと調子乗りなんだよね、彼。」

零がどんな姿であっても彼を認識できる、古い知り合いとは、この男だった。

レイよりは零に詳しい彼は、かといって決して多くはない零情報

を駆使してレイにアドバイスをする。

二人にうまくいつてほしい、というのが彼、スズキのスタンスだ。

「あ、たあしかにい。・・・てか、もちよつと作戦会議したいなあ、なんて。」

そんな彼を第二の兄のように頼るレイは、つついオネガイする声になってしまふ。

「あはは、まあ、ここじゃ話すつていつてもきみ仕事だもんね。なら、後で僕のバイト先のほうくる？夕方にはあがつちゃうでしょ？」

王子様のようにさわやかなスズキの微笑みは、レイ以外の多くの女性を魅了した。

「え、仕事場じゃ、あたしジャマですよね？」

あくまで、レイ以外だ。

「あ、へーキへーキ。ぜんぜん気にしないよ、みんな優しいから。」

優しかろうがそうであるまいが、全然まわりを気にしないのはスズキのほうで、責任感ある仕事仲間にとっては本当に迷惑だったが、レイにそれがわかるわけもなかった。

「じゃ、お邪魔しちゃいますね！」

「おっけ」

笑顔をかわして、作戦会議の約束が成立した。

「じゃ、あとで。」

「はあい！」

数時間後に会うことにして、二人は別れた。

(続)

続き 5

中古ゲーム・マンガ・CDのブレイブ、と書かれたカンバンをか
がけた店の前に立つのは、全身黒い服に身を包んだ男の子と、キレ
イなお姉さん。

「ここにいるワケね？その不審人物は。」
決して低くはなく、聞きようによって中性的にも聞こえる声は、
女装した御雷のものだ。

「ああ。けっこうレイにまわりついて、ウゼえんだよな。」
何か思い当たることでもあるように、見た目に合わない低く不機
嫌な声を出したのは零。

レイと仲のいいスズキに御雷をけしかけて、適当なところで男と
バラして笑ってやろう、という計画なのだった。

もちろん、その目的は御雷にも秘密だが。

御雷に直接、復讐するのは難しい。

でもウサは晴らしたい、というワケだ。

やつあたり、とも言う。

「じゃ、いきましようか。」

ふあさつ、つと髪をかきあげて、過剰に女らしく御雷が言った。

答えることなく、零はニヤリと笑った。

数歩あるくと、自動ドアが開く。

「っしやあせー」

うわの空なのに、なぜか感じ良く響く男の声が出迎えた。

「いらっしやいまっせー」

元気のいい女の子の声がおいかけ。

カッカツと小気味よい靴音を立てて、御雷がカウンターに近づい
ていく。

「あっのーう。」

ありもしない胸を意識させるような、見えそうで見えない絶妙な角度でカラダを傾けつつ、ねちゃあつとした甘い声で御雷がカウンターの中にいる男を呼ぶ。

「はい・・・」

ボンヤリした返事をしながらも、長い金髪の向こうの彼の目は、ゲーム画面に集中している。

動作チェック用の機械で、ゲームを楽しんでいるのだ。

後ろでは、運動不足そうな、これも長髪の青年がそのプレイを応援していた。

店員らしいのにまったく働いていないカウンター内の二人の代わりに、名札も何も、店員らしいアイテムを身につけていない少女が前に出てきた。

「いらつしやいませ！なんか探してんスカ？」

明るい髪色がよく似合う元気そうな女の子で、言葉づかいはなつちやいないが、アイソよくニコニコと話しかけてくる。

零と御雷は彼女を無視した。

「スズキ、おいスズキ！」

零がイライラと呼びかける。

「待つて今大事！」

スズキはうるさそうに止める。

「あのう、ダメ・・・ですか？」

どこかで聞いたことがある話し方。

レイに似ている、と認識する前にスズキはそちらを向いていた。

そこに立っている、レイそっくりな女性の姿に彼の手が止まった。
デレレツデデデデンツ

ゲームオーバーらしい音がして、後ろで見ていた男が、ありえねええ、と言いながら奥へ引っ込んだ。

「レイちゃん？・・・じゃ、ないよね」

声が全く違う。

なのに話し方も見た目もそっくりだ。

「レイの姉のお、ミライっていいますう。」

「あ、・・・そっくり、ですね、僕は・・・」

スズキが名乗ろうとすると、先にミライのほうから彼の名を口にした。

「スズキさん、ですよ？ 妹から聞いてます。とっつても、仲良しだつて。」

とつても、というあたりに妙に力がこもっていて、少し違和感があったが、レイにそっくりなミライの笑顔に、釘付けになっているスズキは気づく余裕などなさそうだった。

その笑顔が妹に比べるといくらか邪悪なことにも。

なぜなら零とレイを応援してはいるものの、本当はスズキもレイが好きなのだから。

そのことはレイも零も知っているが、レイは別に気にしていない。スズキが、割り込む気はないと宣言しているからだ。

零は、そんなスズキとレイがちよくちよく二人だけでいるのが（バイト先で少し話す程度でも）気に入らない。

それなりに整った顔立ちとスタイルで、誰にでも優しくいつも笑顔でいるスズキと、見た目こそ美少年とはいえまだコドモで、態度はデカいわ意地は悪いわの零では、いつ逆転されるかわかったもんじゃないのである。

それでも反省することなく、ただスズキを邪魔者だと思っているあたり、救いようがない。

「ところで、どこかでお会いしませんでしたっけ？」

御雷が少し顔を近づけてスズキをのぞきこむ。

以前、女装でないときにチラッと会っているのだが、お互い名乗ってもおらず、御雷にいたってはヒドい二日酔いで、よく覚えていないのだった。

もちろん、スズキはそのヨッパライと、目の前にいるレイそっくりな女性（？）が同一人物だとは思ってもよらない。

不意打ちに頬を赤らめながら、スズキはかすかに首を横に振った。

(続)

続き 6

「・・・スズキさんの目ってえ、すごくキレイですねぇ!。」

カウンターに身を乗り出して、さらにスズキに顔を近づけ、うつとりとした目をしてみせる御雷。

キスを誘っている、ように見えるのはきっちり計算ずみ。

レイの口真似も忘れない。

その性質は小悪魔なんてカワイラシイものではなく、悪魔そのものだが、残念ながら今のところ御雷は真正正銘、人間だ。

さつきから邪魔をしないように背景と化している零は、何の表情も浮かべてはいないのだが、良くやるよ、とても思っているふうに見える。

実際、たしかにそう思っていた彼は、その光景に軽くタメイキをつく。

自分がしかけた事とはいえ、あんなにハマるスズキがあまりにも情けないのだ。

面白い光景ではあるし、予想通りでもあるのだが、長い長い腐れ縁の中で、多少相手を認めていた。

それが、オカマ相手にあのザマでは少々あきれてしまう。

と、ここで状況にちよつとした変化がおきた。

「ちよつとアンタ! スズキさんに何してくれてんだよ!。」

さつき無視された女の子だ。

せいっぱいドスをきかせた声を出し、御雷をにらみつけている。

「きやつ、ご、ごめんなさい・・・」

これっぽっちも気にしちやいないくせに、縮こまって見せる御雷の演技は、やはりなかなかのものだった。

このまま三角関係めいた寸劇を見物するのも面白いが、当初の目的からはそれしてしまう。

軌道修正すべきか零が考えていると、おだやかでない声をききつ

け、奥からもう一人の青年が出てきた。

「そーこちゃん、どした？お客さんにそんなクチきいちゃダメっしょ？」

「うつさいなー、あっちいけよヒサシ！あの女スズキさんにヘンなことしようとしたんだよ！」

ヒサシと呼ばれた、オタクっぽいさっきの長髪青年は、女の子、そーこちゃんをなだめようとしている。

が、青年のほうがいぶ年上に見えるのに、全く相手にされていない。

それどころか、そーこの剣幕に押されてしまい、口をつぐんでしまった。

「ちよつと、ケンカしないで、僕は大丈夫だから、ね？ほら、そーこちゃん、怖いカオしないで、ね？」

「だってだって、スズキさんあの女あ！」

「ミライさん、でしょ？ちよつと失礼だよ。」

やはり少々手を貸すべきか、と零は後からわりこんだ二人を排除しようとしたが、ふと妙におとなしい御雷が気になった。

見れば彼は、真剣なまなざしで、スズキを見つめていた。

おだやかな笑みを絶やさず、不満を訴える そーこ をやんわりとなだめ続けているスズキを、しばらくながめたあと、突然御雷は言った。

「なゆ太、帰っぞ。」

「何だと？」

低くつぶやいた御雷の声は、男丸出だったが、幸いスズキはそーこ をなだめていて聞いていなかったようだった。

お取り込み中でこちらの様子に気づいていないスズキたちに、さつさと背をむけて御雷は出て行こうとする。

後を追いながら、零は問いただした。

「おい、御雷、どうした？こんなアツサリ引き下がるなんてお前らしくないだろ。」

いつもしつこいと思っているのが遠まわしににじんでいるが、御雷には伝わらない。

「なゆ太はさ、オコチャマだからわかんねーかしんねーけど、お兄ちゃん、アイツは大丈夫だと思う。」

零を見下ろして、すこしゆがんだ力才で笑った御雷は、なんだか泣きそうに見えた。

その表情は、彼には珍しく邪気のない、妹のために自分の痛みをこらえている、優しい兄そのものだった。

「・・・キメえ顔。もういい、この役立たず。」

そのキメえ顔を見て、御雷の気が変わらないことを悟った零は、冷たい言葉を吐き捨て、先に出て行こうとした。

「はは、なゆたんキビシー・・・」

力なく笑う御雷をおいて。

そんな零の目の前で、彼に反応したわけでもなく店のドアが開く。

「あ。」

と、声をだしたのはレイだった。

ちょうど店に入ってくる所で、はちあわせた。

「う。」

失敗したとはいえ、スズキに御雷をけしかけた現場で、レイと遭遇してしまった零。

ちよつと、ピンチだ。

零の後ろの大問題に、レイが気づく。

「あつ、ああーっ！！お兄ちゃん！！！！」

「よー、レイ。」

「あ、レイちゃ、お兄ちゃあーん？！！」

上から、レイ、御雷、スズキ。

ほとんど同時に飛び交ったこれらの声で、さらに自分に不利に傾いた状況を感じ、零は文字通りその場から姿を消した。

御雷の腕から逃げたときのように、姿かたちを変えてこの場から逃げ出したのだ。

軽い混乱に乗じて。
(続)

続き 7

直後、今まで そーこ をなだめていたスズキは、今度は御雷に詰め寄るレイをなだめなければいけなくなった。

その様子と、完璧な御雷の女装を、さっきまで怒っていた そーこ は興味深そうにながめ、当の御雷は全く反省もせず面倒くさそうにレイのお説教をきいている。

一応なだめながらもオロオロしているスズキに、立場もわきまえず御雷が言う。

「なー、アンタ優しいのもーけど、そんだけじゃダメよ？ビシっていくときゃいかなーと、さ。」

「あ、ハイ。」

レイの兄ということで、一応の敬意を払っているのか、納得したのか、スズキは素直な返事を返した。

だが、これにはレイがヒートアップ。

「おーにーいーちゃあああん！今怒られてるところでしょー！」

怒鳴るレイに、なぜかスズキが首をすくめて目をつぶり、御雷はやはり動じない。

「あー、ハイハイ、わり、で何だっけ？」

「こらあー！」

「うーけーるー！きゃはははは！」

見ていた そーこ が笑い始めた。

スズキが、笑う そーこ をたしなめ、御雷は聞いちゃいなくて、レイがさらに怒り、しまいには半泣きになり、そーこ は笑うのをやめず、なんとなく少し時間がたったところで、全くまとまらないままレイのお説教は終わってしまった。

「もー、いい。もーおにいちゃんと話すのイヤ。疲れた。とにかく、しばらく来ちゃダメだからね！」

「んー、じゃ来週またってことで。」

答える気にもなれないレイは、スズキにだけ、作戦会議はまた今度ー、と告げ、力ない足取りで去っていった。

「じゃ、俺も自分ち帰るわ。またな、スズキちゃん。」

「あ、はい、また・・・また?!」

また来ちゃうのか、とさすがに思ったスズキだった。

「まったねー、ミライさん!」

この騒ぎを一人だけ楽しんだ　そーこ　は、笑顔で元気にぶんぶん手を振った。

後ろ姿の御雷が、片手だけをあげてそれにこたえた。

「もー、おにいちゃんたら、全然話きいてなくて、ほんとムカつく!」

自分の家に帰ってくると、何も知らないレイは騒ぎをおこした張本人にそうグチった。

「そうか、俺はただ、仲よくしてくれていると言っただけなんだが、勘違いさせたようだな。」

御雷が零のせいにしなかったのは、さすがに子供のなゆ太に責任を押し付けるのは気が引けたのか、それとも言い出せなかっただけかわからない。

ともかく、レイには零が黒幕だとはバレていないようで、それをいいことに零は今回のことを全て御雷の独断、単独犯ということにした。

当然それがわかるわけもなく、零が彼らしくもなく反省するような口ぶりなのに気づいたレイは、疑うことなく否定した。

「零さんは悪くないよー!　いっつもおにいちゃんああなんだから!」

悲しいかな、日ごろの行いが悪い兄はすべての責任をおしつけられ、悪者にされていた。

それを気にする人格でないのが、人としてどうかは別として、このさい幸いといえよう。

「まあ、そんなに責めるなよ。」

さらに零が、零らしくもないことを言う。

それは、うまく責任をのがれたことと、ガツカリするほど情けないスズキの姿を見られたという収穫が、どちらも御雷のおかげだったからだ。

思ったほどには動いてくれなかったが、これはこれで結果オーライといってよかった。

「うん、零さんがそーいうなら、もういいや。」

零の言葉に、少し嬉しそうに笑ったレイには、彼の考えなど全く想像もつかないのだろう。

やっぱり、最近少しずつ優しくなってるみたい、などと勘違いをしているのは明白だった。

お互いに全く通じ合っていないものの、とりあえず関係は良好なまま、何事もなかったように今日もまた、一日が終わっていくのだった。

2 幼き恋の影

年の頃は、小学校にあがるかあがらぬか、というくらいの子供たちが数人、公園で遊んでいる。

一人だけ、離れたところにポツンと立っている女の子がいた。

遊ぶでもなく、ただ立っている姿は、誰かに見つけてもらいたがっている、誰かを待っているように見えた。

集まって遊んでいた子供たちのうちの、一人が声をかける。

「ねー、一緒にあそぼ？」

だが、女の子の答えは、つれない。

「いい、ユウちゃんカレシいるから。」

どうみても一人、仲間に入れないように見えるだけの彼女に、優しい男の子はさらに声をかける。

「じゃーカレシ来るまで一緒にあそぼ？」

自分のことをユウちゃんと呼んだ女の子は、少し考えてから、言った。

「ちよつとだけなら、

いーよ？」

よく晴れた空の下、公園の遊具を中心にして、小鳥のさえずりのように、はしゃいだ高い声がいくつも重なり合う。

やがて、日は傾き、その色を変え始めた。

じゃあ、帰る、と一人が言っていると、あたしも、ぼくも、とみんなが解散する雰囲気になる。

「ユウちゃんも、かーえろ。」

女の子がそう言うと、最初に声をかけてきた男の子が、思い出したように話し始める。

「あー、ぼく、コワイ話、思い出した。」

まだ本題には入っていないのにこれだけで他の子供たちはキヤーキヤーと悲鳴をあげ始めた。

「この公園、夜になるとオバケでるんだってー！」
キヤ - - - ! ! ! !

耳に突き刺さる悲鳴をあげ、みんな散り散りに走っていく。
残ったのはユウちゃんと、話をした本人、それからもう一人、女の子。

「まだ夜じゃないからセーフなのにー。」

オバケの話をした男の子は、一気に人数が減って寂しそうにして
いたが、気を取り直すと、残った女の子二人に向かって言った。

「コワかったら送ってあげる！手えつないでかえる？」

女の子たちは、安心して彼の手をとる。

男の子の将来はナンパ師かもしれない・・・。

そんな彼らの遊んでいた公園も、段々と暗くなり、薄闇につつま
れようとしていた。

その一角に造られた”みんなの森”は、そこからさらに濃い闇を
はきだしているかのように、まわりよりもいっそう暗く、木々がそ
の影を落としていた。

重なる影が生み出す闇にまぎれて立っていた、主を持たぬ影に、
子供たちは気づかなかった。

その影が、遊ぶ子供たちを見ていたことに。

深夜。

町は静まり返り、時折、風向きの加減が、少し離れた大きな道路
を通る車の音が聞こえてくるくらいだ。

ぼつんぼつんと間隔をあけて立つ街燈が照らすだけの、薄暗い道
を、男が歩いている。

ほろ酔い加減のその男は、自宅へと帰る途中だった。

歩いたせいか、酔いが回ってきた気がして、ふう、とタメイキを
つき、立ち止まる。

体がほてってダルく、どこかで休んでいきたい気がした。
タイミングよく、ちょうど公園の前にさしかかっている。

ここでいいか。

公園の少し奥、ベンチに腰掛けるといくらか体がラクになった。それにしてもいい酒だった、と、彼は楽しかった今日の出来事を思い出す。

知らず、にやにやと表情に出してしまっていた。

「楽しそうだね。」

子供の声でした。

「うわっ！」

ベンチの空いたスペース、自分の隣に青白い顔をした子供が座って、自分をのぞきこんでいる。

黒い服は、夜の景色の中では保護色のように周りに溶けてしまい、まるで生首に話しかけられたように思えた。

その生首のような顔がぼんやり光って見えるのは、肌の異様な白さのせいだ。

けれど、目が光っているのは、

「なんだ・・・」

お前、あっちいけ！」

人間じゃない！

「どうしたの？」

おじさん・・・笑ってよ。

楽しいんでしょ？」

ぐっと顔を近づける子供に、男は恐ろしさから動くことはもちろん目をそらすこともできない。

「・・・ふふ。」

いいよ、

怖がるキモチはオイシイ。

もつと、もつとちょうだい。」

言っている意味がわからない。

光る瞳から目をそらすことも、まぶたを閉じることもできない。紫色の、光、ひかり、ヒカリが頭の中を焼きつくす・・・。

うわぁ
あぁあぁあ
あっ

（続）

続き

今日も公園に、女の子はいた。

カレシを待っていた。

急に会えなくなってしまった、大好きな人。

「なゆ、なんで公園こなくなっちゃったのかな。」

きれいな顔をして、体の弱そうな彼は、なゆた と名乗った。

一度だけ、彼の家に遊びにいったことがあった。

けれど、そこへ向かう間も彼と話すのに夢中だった彼女は、その詳しい場所を覚えていなかった。

もしも彼女がそれを覚えていたとして、訪ねれば彼は喜ぶでもなく、ただ彼女の記憶を消してしまっただけだろう。

彼女、ユウちゃんは、自分の待っている相手が魔物であることを知らない。

けれど、来ない人を待ち続ける日々よりは、忘れてしまったほうが幸せかもしれない。

「ユ・・・ちゃん」

不意に聞こえてきた遠い声は、男の子。

「なゆ?!」

ユウちゃんは、大好きな人の姿を探す。

けれど、そこにやってきたのは昨日一緒に遊んだ男の子だった。

「はあ、はっ・・・」

何してんの？」

公園の外から走ってきた彼は、やや息を弾ませながら言った。

「カレシ待ってるっていったじゃん！」

がっかりした彼女は、ついキツイ言い方になる。

「ダメだよ、ここ、ホントにオバケでるんだよ！ぼくたちと一緒に違うところであそぼ？」

「なにそれ。明るいかへーキだよ！」

ユウちゃんは男の子の誘いをつっぱねる。

「だって、オバケみておかしくなっちゃった男の人が入院したんだってよ？」

「男の人ってだれ？」

「知らないひとだけど、

ホントだよ！」

学校の先生がいったもん。」

学校の先生が、生徒にそんな話をするわけではない。

が、彼は忘れ物を取りにいった時に、先生同士の立ち話をたまたま耳にしてしまった。

先生がウソをいうはずはない。

じゃあ今日はほかの場所で遊ぼうよ、という話になり、みんなで歩いていたところユウちゃんを見かけ、声をかけたのである。

公園の外では、彼のトモダチが怖々公園の中をうかがっている。

「やだ。」

ユウちゃんいかない。」

言ったあと、彼女はどんなに男の子が説得しても、首をタテに動かすことはなく、男の子は他の友達に呼ばれるまま、なごりおしそくに去っていった。

ずっと、ずっと彼女は待っていた。

友達の誘いも断って、たった一人、来る日も来る日も。

オバケのウワサのせいで、誰もいなくなつた公園にたった一人ぽつんと立つ姿は、まるでとり付かれたように。

公園の幽霊を見ると発狂する

光る子供の生首が飛んでくる

公園の前を歩いていたサラリーマンが幽霊に襲われた

発狂・・・入院・・・廃人に・・・

死にはしないものの、日常生活すらままならないほどに精神を破壊されてしまった犠牲者が、数日おきに一人、二人と増えるたび、ウワサは町全体へと広がっていく。

（続）

続き 2

ユウちゃんの母親も、当然自分の娘が心配になった。

まさかあの公園で遊んでいやしないか、と。

「ううん、行ってないよ。」

ユウちゃんはウソをついたが、彼女の母親は自分の望んだ答えに疑問を持つことをしなかった。

「そう、暗くなくても

そんな危ないところに

行っちゃダメだからね？」

「うん！」

そうして彼女は、今日も公園にいる。

オバケが怖くない

わけではない。

けれど、昼間の明るいうちならきっと大丈夫だと思っていた。

どうしてもどうしても、また、なゆた に会いたかった。

ただ立っているのもタイクツになり、ブランコに座って、少しゆらしてみる。

ゆらゆら、ゆらゆら。

とん。

背中に何かがあたり、ブランコが大きく揺れる。

「え？」

自分以外いなかったハズの公園で、何が背中を押したのだろう、と振り返る。

影が立っている、ように見えたのは一瞬。

「なゆ！」

上下とも黒い服に身をつつみ、太陽の似合わない青白い顔をして、ずっと会いたかった彼は、唐突にそこにいた。

「これ、

ゆらすと楽しいんでしょ？

もつとゆらさなきゃ。」

ずさつ。

彼の言葉に逆らおうとしたわけではないが、ユウちゃんは地面に足をつき、ブランコを止めた。

もちろん、彼の顔を見て話すため。

「なゆ、あのねっ、

ユウちゃんねっ・・・！」

嬉しくてたまらないユウちゃんに、なゆたが優しく笑いかけた。何か言うでもなく、鎖に手をかけると、ユウちゃんの乗っているブランコのあいたところに片足をのせ、もう片方の足で地面を蹴った。

止めようとするユウちゃんなどまるで無視して、二人をのせたブランコは空へ向かって飛ぼうとするように動いた。

「きゃーああ…あははは！」

急に速く、大きく動いたブランコに一瞬悲鳴をあげたあと、体全体に感じる風や、流れては戻る景色に、ユウちゃんは楽しくなって笑い出す。

なゆた も、楽しそうな声を出す。

「あつははは！」

ああ、気持ちいいな！

…ほら、もつと高く、いくよ！」

「キモチいいーねーえ、

あははははー！」

風、景色、スピード感、ユウちゃんの”キモチいい”はブランコで遊ぶことを言っていた。

なゆた の“気持ちいい”は、別の理由。

彼はユウちゃんがあふれさせる”楽しい”、という気持ちを喰って快感を得ていた。

「ねえ、なゆ次はオニゴツコ！それで、その次は、んと、かくれ

んぼしよう!」

「ん。」

低く、けれど機嫌よく答えた彼の声をユウちゃんの笑い声がかき消していく。

「きゃあはははつきゃーっ!」

「ふふふ・・・あははは」

軽やかな笑い声がまったく彼らしくないことに、小さなユウちゃんには気づかない。

ただ、大好きな彼と再会できた喜び、そしてその彼と思い切り遊ぶ楽しさに心を奪われていた。

(続)

続き 3

「・・・ってことらしくてえ。あの公園の前は、通らなくても帰ってこれるんだけど、やつぱ暗くなると怖いし。あの、おむかえ、とか」

「パス」

レイの部屋で、零とレイが話している。

公園にオバケが出て怖いから、迎えに来て欲しい、というハナシだ。

「やつぱり・・・うう。」

レイのオネガイを、零が即

却下し、彼女はしょんぼりうなだれる。

零が小さくなってからというものの、いろんなところに散らばった彼の一部分、“影”が起こす怪異のせいで、怖い事件やウワサが、レイのまわりには絶えない。

そのせいで、もう何度もレイは零に”おむかえ”をオネガイしていた。

原因は彼自身であるのに、彼はその責任をとることなく平然と彼女の要求を却下してしまう。

それはいつも命令のカタチをなしておらず、よって却下も簡単だった。

彼女は彼女で、元をたどれば零が悪いのだ、という事実気づいていない。

だから、却下されるとおとなしく引き下がり、また何かが起こればダメもとで泣きつく、ということを繰り返していた。

はーあ、

とタメ息について雑誌をめくり始めたレイの隣で、零は幽霊のウワサについて考えていた。

発狂・・・前に俺の一部がひとり歩きした時も、犠牲者は恐怖に支配された心そのものを喰われて、狂ったとか廃人になったとか言われていた。

なら、今度も。

「ユウちゃん、ユウちゃんが笑うとボクも楽しい。だから、もつと笑って？ね、遊ぼう？」

なゆた が楽しそうに、綺麗な顔で笑う。

「でも・・・ユウちゃんもう

暗いから、帰らないと・・・。」

暗くなるまでに帰ってきなさい
というのが

彼女の母親のいいつけで、

今現在、日は沈みかけていた。

「暗いから？」

何で帰らないといけないの？

夜のほうが楽しいよ！

真っ暗で、涼しくて、

昼間なんてダルいし、

明るくてつままないよ。」

「ママに、怒られるから。」

「なにそれ。」

不思議そうな顔で、なゆた がたずねる。

「怒られると、どうなるの？」

「こわいの・・・」

泣いちゃうかも。」

ユウちゃんの顔が暗くなり、

うなだれる。

「ヤなの？」

「うん、そう。」

「怒られるのイヤだから、帰りたいの？」

怒られる、ということがこの なゆた には解らないようで、本気でそれをきいていた。

「そーだよー、あたりまえ！」

「・・・じゃあ、

いいよ、帰って。バイバイ。」

寂しそうに なゆた がそう言って、胸のあたりで手を小さく振る。

「あしたね、なゆ。」

そんな顔をされると、ユウちゃんも悲しくなって、元気にバイバイとは言えない。

せめて明日の約束を、と口に出すと、なゆた が表情を輝かせた。

「明日、また来てくれるの？絶対？」

「うん、ぜったい。」

ぜったいね。」

ゆびきり、といって小指を差し出すと、なゆた は指切りを知らないようだった。

小指と小指をつないで、約束をして、次の日には手をつないで公園の外を走り回って遊んだ。

「なゆ、手えつないでこ！」

ユウちゃんが差し出した手を、なゆた は握る。

「つめたいねー、さむいの？」

ふるふると、なゆた は首をふる。

やわらかそうな黒髪が、その動きにあわせて揺れた。

冷たい彼の手を、ユウちゃんはもう片方の手で、軽くなでた。

「さむかったら、ユウちゃんがあったかくしてあげるね！」

「別に、平気。」

寒い、とか暑いとか、そんなことは彼にとってなんの障害にもならなかったし、感覚として感じはするものの、気にしてなどいなかった。

暑くても寒くても、

どうでもいい。

ただ、握った手の小ささ、
やわらかさと、同時に感じるこの温か
さは、ひどく大切に思えた。

(続)

続き 4

「走るとあつたかくなるって、学校の先生が言ってた、走ろ！」
「うん。」

言いながら走り出したユウちゃんに手を引かれ、彼も走った。
きやあきやあと、すぐ前を走るユウちゃんが笑っている。

彼女から流れ出してくる“楽しい”という感情と、自分に対する
好意を、なゆた は植物が日光をあびるように、吸収する。
満足感と、幸福としかいいようのない感覚が彼を満たす。

とても、心地がいい。

「ねえ、ユウちゃん。」

「きやはは、あははっ

なに？アハハハ！」

手をつないで走るだけでも楽しいのか、彼女は笑うのをやめない
ままふりむく。

「大好き」

子供にしては、落ち着いた笑顔をうかべながらおだやかに、なゆ
た は言った。

「ユウちゃんもー、

なゆダイスキー！

きやーあははははは！！」

照れて、大声をあげながらも、

いつそう楽しそうに

彼女が笑った。

これが欲しかった。

ずっと、独り占めしたかったんだ。

なゆ、と呼ばれる彼は思う。

彼は、なゆた 本人ではない。

なゆた 本人、零かかつて失った力の一部、“影”だ。

彼が、彼としての意識をもつ前から、ユウちゃんの声は聞こえていた。

なゆ、なゆ、もう一度、会いたいよ。

くり返し心の中で、つぶやき、訴え、叫ぶ声。

会いたいという切なさは、彼女からあふれ出し、彼はそれを食った。

そうして育ってきた彼は、いつしかハッキリとした意識を持って彼女を見つめるようになる。

呼ばれているのは、自分であるような気がして。

あのこはボクを呼んでる。

ボクを必要としてる。

ボクも、

あのこのそばにいたい。

けれど、日の光の下に出ようとすると、強い光が、淡い影でしかない彼を打ち消してしまおうとする。

逆に、夜は動きやすく、たまたま彼が動き回るところに出くわした人間がもらしていく恐怖感彼の存在を濃く、強くするためのいい養分になった。

彼がみずから人間に近づくと、さらにたくさんの恐怖が生まれては、彼の中に流れ込み、そのうちに彼は人間のような体を保てるようになった。

入り込んでくるだけの恐怖を、今度はしだいに彼のほうから吸い込むようになった。

吸えるだけ吸ってしまうと、対象はまるでダシガラのようにスカスカになり、そこにはただ生きているだけの意志すらない物体が残された。

放っておいて、日が昇り明るくなると、誰かが来て、時には何人もの人間が大騒ぎをしながらそれを片付ける。

白いうるさい車が、赤い光をチ力チ力させながら来ることもあった。

何度かそんなことをするうち、彼の体は日光に耐えるほど強くな
った。

最初のうちは、けれどあまり動き回ることとはできなかった。

彼は、夜の狩りを続けた。

他の子供たちのように、彼女に声をかけるために。

見知らぬ男児がしたように、彼女と手をつなぐために。

彼以外と、彼女が手をつなぐことがなくなるように、と。

そして今、ながめるだけだった笑顔は、彼だけのものだった。

とりあえず、彼女が外で遊んでいるあいだは。

彼女の笑顔、彼女の“楽しい”気持ち、夜の狩りで得る恐怖の
感情よりもずっと彼にとって質のよい養分になった。

彼女のくれるものは何もかも、一番で、特別だった。

だから、ずっと一緒にいたい。

なのに、夕方になると彼女は言うのだ。

「帰らなきゃ。」

「行かないでよ。」

「ごめんね、またあしたね。」

そんなやりとりの何回目かに、彼女は約束を破ることになる。

その日、ユウちゃんは学校の友人と遊んでいた。

本当は公園にいきたかったが、友人たちがちつとも一緒に遊ばな
くなったユウちゃんを仲間はずれにする、と言い出したのである。

ただし、今日一緒に来るなら許す、と。

友達がいないのはイヤだし、最近の優しい なゆた なら、きつ
と次の日にあやまれば許してくれるだろう、と彼女は思っていた。

(続)

続き 5

「零さん・・・何ソレ・・・」

レイが呆けた声でたずねた。

「大盛り。」

「や・・・にしても

ちよつと盛りすぎ

じゃ、ないかな・・・それ」

キッチンから零が運んできた2人前のハズのスパゲティ。

それは片方だけ異様な量が盛られており、少しでも振動を感知しようものなら、ただちに大崩壊を起こしそうに見えた。

その異様なスパゲティを絶妙なバランス感覚で運んでくると、零はそれを自分のほうへ置いた。

成長期ってことなのかな、と

レイは思ったが、怒られそうなので言わない。

がつがつ、がつがつ。

いつもと同じ無表情、無言で零がスパゲティをほおぼる。

その動きはイライラとせわしなく、あわただしい。

「何か、急いでるの？」

零さん。」

「・・・別に。」

せかせか、がつがつ、せかせかがつがつ・・・。

子供の体には多すぎる量のスパゲティが、みるみるうちに減っていく。

「ヤケ食いみたい。」

イライラと大量の食事をたいらげる彼を見ての、素直な感想に意外な反応が返ってくる。

「正解。」

「え……。」

一言だけで答えると、零はまた続きを口に運び出す。

とても人間くさい行動が意外

すぎて、レイはポカンとして

しまう。

そうなりながらも、もりもり

食べている彼を見てみると、

なんだかすごくおながすいて

いる気がしてきて、自分の分に

手をつけた。

零の作る食事は、特別うまくもマズくもなく、実はレイ自身が作るもののほうがおいしい。

それでも、彼が作ってくれたというだけでレイにとってはゴチソウだ。

だから、彼女はその本当は大しておいしくもない食事を、おいしい、と思いながら食べる。

「ん、今日のもおいしいー。ねえ零さん、なんでヤケ食いなんかしてんの？」

「イライラしてるから。」

それはそうだろうが、こういう場合はそのイライラの原因を答えるべきだろう。

零は、答えをはぐらかしていた。

なぜなら、説明が面倒だから。

だが、レイのウザさはそんなことではごまかせない。

「なんで？」

きょとんとした顔で、彼女はつつこんでくる。

答えずに零は、残り少なくなってきたスパゲティを口につめこむ。無視されて、やっと、レイはきいちゃいけない事だったのかな、などと考え始めた。

彼女がまだ三分の一も食べないうちに零は食器を片付け始め、冷

蔵庫からなにか出してくる。

「チョコレートプリン・・・。」

可愛い！という言葉のみこんで、レイは彼が出してきたものの名前をつぶやく。

確かに子供がプリンを食べる姿は可愛らしいのかもしれないが、とんでもない量のスパゲティを一気食いしたあとにプリン、というのはそれにあてはまるのだろうか。

その後、彼はさらにミルクプリンにイチゴプリンにマンゴープリンを、冷蔵庫から出しては食べ続けた。

ただ、最後のマンゴープリンは失敗だったようで、一口食べるとスプーンがとまった。

「あれ？どしたの？おいしくない、とか？」

レイの言葉に、やや渋い表情をして無言でうなずく彼。

「あの、いらないんだたら・・・それ、ほしーなー・・・。」

やはり無言のまま、彼がプリンをレイのほうへ押しやった。

「やったあ！」

レイはマンゴープリンがキライではなかったし、零の食べかけというのも実はちょっと魅力だった。

子供のように、たかがそのくらいのことではしゃぐ彼女を、ホンモノの子供にしか見えない零は少しあきれた目で見える。

「ところで、なんで普通のプリンは買わなかったの？売り切れ？」

「好きじゃないんだ。」

じゃあなんでわざわざプリン買ったのかなー、と思うが、機嫌をそこねたくないでツツコまないでおいたレイだった。

（続）

続き 6

食後、落ち着きを取り戻した零は、イライラの原因について考えていた。

あの公園にはユウがいる。

ユウがいること自体は、なんの問題もない。

顔をあわせたなら、ついでに自分に関する記憶を消してしまえばいい。

問題なのは、零の記憶のほうだった。

自分を好きになったユウを、零はもてあそばうとして、その行動がレイを悲しませた。

少し見せ付けて、からかうだけのつもりが、本当に気まづくなっていた。

冷たくしても、すぐに笑顔を取り戻すから、突き放していられたのに。

彼女はいつも、元気でいなければならない。

零は、知らず知らずそれを望んでいる。

元氣のないレイは、零の気持ちを暗くさせる。

その反応は、願望は、無意識。

自分のことをいつも全て正確に把握できる存在など、人であれ魔物であれ、居はしない。

いつも元氣なレイを、そうでなくさせてしまった、失敗の記憶にまつわる場所が、あの公園だった。

当然、ユウの顔もいまさら見たくはない。

あの時のことは、あまり思い出したくない。

それでも、影を回収するにはいくしかない。

気が重いのをまぎらわせるためのヤケ食いで、一応の気持ちの整理はついた。

そこでなぜヤケ食いを選んだのかは、零自身にもちょっとわからないが。

テレビドラマをみながら、もによもによとマンゴープリンをぱくついているレイにチラリと目をやる。

零が影を回収してしまえば、もう帰り道で彼女がおびえることもない。

これで、うるさく迎えをせがむことも、しばらくはなくなるだろう。

零の目に気づいたレイが、微笑みかけてきた。

当然の態度に、いちいち反応する必要はない。

零はただ視線をはずした。

次の日、ユウちゃんの思っていた通り、なゆたは公園で待っていてくれた。

「なゆー！」

手を振りながら、駆け寄るユウちゃん。

いつもなら、むこうからも近づいてきてくれるのに なゆたは動こうともしない。

ただ暗い顔をして立っている彼に、ユウちゃんはとにかく謝った。

「ごめんね、なゆ、ユウちゃんほんとに昨日もなゆと・・・」

「ウソツキ。」

今まで聞いたこともないくらいつめたい なゆた の声に、周りの空気が凍るのを、ユウちゃんは感じた。

身動きも、イイワケもできない、そんな気がする。

絶対的な絶望が、この場を支配していた。

これまではずっと、優しく自分にそそがれていたハズの視線が、今はただ怖い。

嫌いだとか、怒ってるとか、そんなものではない。

いふなれば、殺気。

何をされるかわからない恐怖で、ユウちゃんは身動きができずに

いた。

「あう・・・あ・・・」

ほとんど声にならない声をしばらくだすのがやっとで、何もいえなくなっているユウちゃんに、なゆた　が自分の方からさらに近づいてきた。

くつついてしまうくらい体を近づけて、なゆた　はユウちゃんの頭を両手でおさえた。

顔が近すぎて、目と目が合ったまま、そらすこともできない。

「ウソツキ、ウソツキ、ボクずっと待ってた、ずっとずっと待ってたのに、ユウちゃんウソついた。」

怖い、のに、悲しそうなその声に、ユウちゃんはあわれみを覚えた。

彼のが、ダイスキだったから。

「ごめんね、なゆ」

恐怖を一瞬だけおしのけて、彼への謝罪がもれる。

「だめ。約束しても、守ってくれないなら、もうどこにもいかないで。」

恐怖と、裏切った後悔、彼の悲しみを思う気持ち、涙となってユウちゃんの目にあふれる。

「ごめ・・・いるよ？ユウちゃんいるよ、なゆといっしょに」

「ずっと一緒に、いて？」

威圧しながらも、哀願する響きと共に　なゆた　の瞳に、昼間の明るさの中でもわかるほど、強い光がはじけた。

（続）

続き 7

「きゃあっ」

ユウちゃんの小さな悲鳴。

「大丈夫、大丈夫だよ、ユウちゃん、もうずっと、ボクがそばにいるから。」

かくん、とヒザからくずれおちたユウちゃんを抱きとめ、まるで感情など感じられない声で なゆた が言った。

ユウちゃんは答えない。

かといって、死んでしまったというのでもない。

ただ、何も言わず、虚空に視線をなげかける彼女は、もうどこにも行ったりはしない。

行こうと思うことが、できないからだ。

彼女には意思が、心がなくなっていた。

「ユウちゃん、ボクのユウちゃん。ボクだけのユウちゃん！」

欲しかったオモチャを手に入れた、キラキラした子供の顔で笑いながら、なゆた

はユウちゃんのカラダを抱きしめる。

もうどこにも行かない彼女を。

ウソを言うこともない彼女を。

笑うことのない、彼女を。

「・・・そうだ、遊ぼう？またブランコ乗ろうよ！」

ユウちゃんは何も答えない。

手をつないで、連れて行こうとすると、自ら動くことのできない彼女はひきずられる形になる。

ずざざあ・・・

「あれ・・・？そうか、歩けなくなっちゃったのか。じゃあ、だっこ。あはは、赤ちゃんみたいだよ？あはは・・・」

コドモにはありえない腕力で、ユウちゃんのカラダを楽々と抱き

上げ、はしゃぎながら なゆた はブランコのほうへ駆け出す。

ブランコに彼女をのせ、鎖を握らせると、一緒にのってゆらした。
グラ・・・どさっ

すぐに、彼女の体は地面に投げ出された。

「ユウちゃん?! ダメだよつかまらないと、ほら、ね?」

もう一度、なゆた は彼女をブランコに座らせる。

「じゃあいくよ?」

どさっ。

同じことの繰り返しだった。

今の彼女は人形と同じで、自分で何かをするということができない。

当然ブランコから落ちないように、姿勢を維持することもできなかった。

そして、投げ出されたからといって、受身をとることもない。

「あ・・・ケガしちゃった・・・ごめんね、ごめんねユウちゃん
!」

人間でない なゆた には、こういうときどうしたらいいのかはわからない。

けれど、ケガが痛いのはなんとなくわかる。

倒れたまま起き上がるうともしないユウちゃんが、うつすら顔を
ゆがめた。

痛いのだろう。

「ごめんね、ごめん・・・」

抱き起こし、そのままユウちゃんを抱えて、なゆた は痛みをま
ぎらわそうとするように、そのカラダを前後に揺らす。

すりむいたヒザから、血が垂れて赤い線を描く。

「ごめんね、ユウちゃん、もうブランコやめようね。次なにがし
たい?」

聞かなくても、いつも次に何をするかきめてくれるのがユウちゃ
んだった。

今は、何もいわない。

「ユウちゃん、どうしたい？ねえこっち見て？」

手で彼女の顔を、自分のほうにむける。

目は合っているのに、こっちを見てくれているとは思えない。

どこも見ていない瞳。

「ユウちゃん？ボクだよ？なゆ。ねえ、こっち見て？」

「・・・」

そろそろ、笑っているのも限界だった。

苛立ちに眉を寄せ、なゆたの語気が荒くなる。

「なんだよ！何でこっち見ないんだよ！笑えよ！つまんないよう

！ユウちゃん、ねえユウちゃん！キライになるぞ！いいの？ユウちゃん！！」

おどしても、なだめてもユウちゃんは何も言わない。

怒っていたなゆたの表情は、もう泣く寸前だ。

何を訴えても、この場で彼が泣いたとしても、心を失くしたユウちゃんには何も伝わらない。

彼女の心は、それを誰にも渡したくないと望んだ彼が、彼自身が喰らい、奪ってしまったのだから。

なゆたは、自分のした事、その意味を理解していなかった。

何も言わない、眉一つ動かすことのない彼女のヌケガラ。

「いいよ・・・それでも。もう、どこにも・・・行かないんだよね？」

静かにつぶやいて、そつとなゆたはユウちゃんをだきしめた。ずつとそうするうちに暗くなり、夜になると公園には何度か大人がやってきて、ユウちゃんを見つけて連れて行こうとした。

そのたびに、なゆたは人間の心を操るその力を使って、大人たちを追ひ払い、ユウちゃんの事を忘れさせた。

ただ親切で探しにきただけの近所の住人と違い、両親の記憶をゆがめるのにはかなりの力が必要だったが、ユウちゃんを渡すくらいなら、なゆたは自分が消えてしまってもいいと思っていた。

自分は、彼女のためだけに存在するのだから。
(続)

続き 8

「あっちいこう、ユウちゃん。ボクのいた森。ジャマな大人が来ても見つかりにくいし、居心地もいいんだよ。」

そう言つてユウちゃんを抱き、公園の奥の森へつれていこうとしたなゆたに、声をかけるものがあつた。

「みーつけた、ってな。」

光る目で、なゆたが振り向く。

「ム、ダ、だ。」

動じることもなくそこに立っているのは、彼と同じ姿をした少年、零。

「お前は・・・ボク？」

「俺がホンモノ。」

言つたと同時に、すごい速さで何かが自分の方へ伸びてくるのを感じとり、ホンモノではない方の、いわばニセなゆたはユウちゃんごと身をかわす。

コウモリのそれと似たカタチをした黒い翼が、今まで彼の居た場所を突き刺していた。

「なにっ？」

「大人しく俺の体に戻るか、惨殺されるか。選ばせてやるよ。」

余裕たつぷりに、零が言つた。

選ばれるのは、できれば大人しく戻つて欲しいからだ。

そのほうが、無駄なく相手をエネルギーとして吸収できるからである。

自分と同じ姿に動揺するほど、零の感覚は人間的ではない。

「やだ・・・ボクは、ユウちゃんというんだ。」

零をにらむニセなゆたの目が光り、彼はそつとユウちゃんを地面にねかせる。

「・・・俺のクセにあんまり頭の悪い事を言うな。もともとユウが好きなのは本体の俺だぞ？だから大人しく戻」

呆れた声を出す零に、叫びながら二セなゆた が飛び掛る。

「ちがーうつ！ユウちゃんはボクを！ボクは、ボクのほうがユウちゃんを好きだ！」

二セなゆた が零に馬乗りになり、零は背中を地面に打ちつけながらも二ヤ、と笑う。

零の背から伸びた黒い翼が、いつのまにか左右から交差し、二セなゆた の首にあてがわれていた。

カタチも、大きさも、硬度でさえも自在な零の翼は、このまま、彼の首をギロチンのようにはねることなど造作もない。

もちろん、何の感情もなく。

「じゃ、このまま死ぬか？」

ただ相手の表情を楽しむために、零はそう聞いた。

怒りか、死への恐怖か、はたまた敗北への悔しさか。

ゆがんだ顔は、そのどれでもなさそうでいて、けれど零を喜ばせた。

「くくつどうした？いい顔じゃないか・・・怖いのか？喜べ、とっても・・・痛くしてやる。」

下品なくらいに興奮を隠さない表情で笑い、声音にも愉悦の色がありありと出ている。

久々に悪魔らしく相手を殺せることに、少々酔っているのかもしれない。

「怖いんじゃない・・・わかんないのか？ボクのくせに。」

零にはわからない何かの感情でゆがんでいる、二セなゆた の表情に、さらにくやしさがにじむ。

涙が、彼の目から零の頬に落ちた。

「何だよ・・・」

その感触のせいか、上がっていた零のテンションは落ちてしまい、二セなゆた の言葉のその先を待つ。

「悲しいんだ、・・・ユウちゃんと、・・・バイバイなのが。」
「はあ？」

零の目の前にいるのは、もつただの泣いている子供だった。

「うつ・・・うえええんっ、えっ、ええーん！」

自分がもし泣いたら、こんなみつともない顔になるのかと冷静に観察する零。

ウルサイし面倒だから、話すのはこのへんにして、さっさと殺してしまおう、と思う。

ニセなゆたの細い首に、あらためて左右から翼が襲い掛かろうとした瞬間、彼が泣き声の間から最後の一言をつぶやいた。

「ユウちゃんごめんね、だいす・・・」

言い終わらないうちに、首と胸がはなれ、人間めいた血しぶきを出すこともなく、そのカラダは一瞬黒い影絵を描き、あとかたも無く消えた。

すべて空気に散っていく前に急いでそれを取り込んだ零だったが、エネルギーは期待したほど多くは残っていなかった。

それでも、ユウちゃんへの強い想いは、零にも充分感じられた。

彼の記憶も。

それは、消えてしまったあのニセなゆたが、ホンモノの零に、ユウちゃんが本当に好きだった彼にそれを伝えたいと願ったからなのかもしれない。

「ちっ・・・いらないモンばかり残していきやがって・・・」

その場には、ユウちゃんも残されていた。

ニセなゆたがヌケガラにしまった、心のない体。

もう記憶を処理する必要もないな、と零は思った。

急に、レイの顔が見たくなる。

なぜそう思うのかは、彼自身にもよくわからない。

この場にユウちゃんを置いていくのが少しためらわれるのは、ニセなゆたのせいだと見当がついたけれど。

だから零はユウちゃんをおいて、レイの待つ部屋へ帰る。

自分の意思是、自分のもので、零にとってはユウちゃんなどなんの価値もない。

帰ってきた零を、おかえりなさい、と迎えたレイには、今日何があったか詳しい事情が話されることはない。

何も話さなくても、彼女はだいたいいつでも笑顔で零をむかえてくれる。

その笑顔に、自分でも知らないうちに安心してゐる零は、必要のないこと、自分に不都合なことを絶対彼女に話さない。

一緒に遊んだことのある女の子を、夜の公園に放置してきた、なんてレイが怒るに違いないような事を、彼が話すはずもなかった。

翌日、零が公園を訪れてみるとそこにユウちゃんの姿はなく、かといって警察や救急車がきている様子もないところを見ると、彼女は無事に家に戻ったのかも知れなかった。

記憶を操作したニセなゆた がいなくなったことで、ユウちゃんのことを思い出した両親が彼女を探して連れ戻したとも考えられた。そうだとすると、一度食われてしまった彼女の心までは戻らないだろう。

ちくりと胸をさしたのは、ニセなゆた の想いだろうか。

まだ自分に同化しきっていないのか、と零はうつとうしさだけを感じた。

その後、公園で犠牲者がでることはなくなり、飽きっぽい子供たちの興味も他に移ってしまった。

“幽霊”のウワサはすぐに忘れ去られ、しばらくして公園には子供たちが戻ってきた。

けれどその中に、ユウちゃんの姿はない。

3 コ・ア・ク・マ

零から出て行ってしまった彼の力は、たとえ一度別の存在として独立しようとも、また取り込んでしまえばキレイに彼に溶け込み、自己主張することはなかった。

今までは。

今回だけは、違うようだ。

夜の公園にたたずむ零は、思った。

彼の“影”、二セのなゆたと、ユウちゃんこと田中優奈が出会った場所だ。

優奈に執着していたのは影のほうだけで、零にとってみれば彼女が生きようが死のうが、どうだっていい。

しかし今、彼は公園にいる。

零の中の二セなゆたが、優奈を恋しがっているに違いなかった。その力が、零のものにならなかったわけでも、別の意思としてはつきり残っているわけでもない。

ただ、ついこの間まで存在しなかった優奈の居場所が、零の心に急に生まれた。

零が、自分の意思でない何かを感じたのは、今日だけではない。眠りにおちる瞬間、優奈の声がきこえた気がしたり、気づくと彼女を思い出していたり。

このところずっと、一日に一度は彼女を思う瞬間があった。

この前再会するまで、優奈のことをほとんど忘れかけていた零だ。そんなに彼女が気になるわけがなかった。

その、優奈を気にする部分、彼女の居場所、それこそが零ではない、彼になじまないモノなのだ。

それは、彼の中のほんのわずかな部分でしかなく、意識すれば難なくおさえこめる程度だ。

今日はすっかり流されてしまったが、こんな抵抗はそう長く続か

ないだろう。

ここに用などない、と帰ろうとして零は、誰もいなかったハズの公園に気配を認めた。

それが、なんでもない普通の人間のものであれば、見つからぬよう姿を消していた。

しかし、その気配は、狂おしく何かを求めている。

探って感じた気配ではないから、何を求めているかまではわからなかったが、心当たりはある。

これは、田中優奈の親だろう。

この公園で、精神に何らかの異常をきたした（ほとんどは自我を失った）状態で見つかった人間は、何人もいた。

その中でも、田中優奈は一番新しい被害者であり、また、唯一おさない子供だった。

彼女が変わり果てた姿で発見された現場に、強い感情を持って訪れるとすれば、一番可能性が高いのはその親だ。

理不尽な悲劇に対するその感情は、怒りか、悲しみか、その両方か。

人が何かを思うとき、そこにはその思いの強さに応じて力が生まれる。

その思いの“力”を扱うすべを、多くの人間は知らない。

放っておけば、ただ空気に溶けていってしまうだけのその力が、何かのきっかけで特定の場所に濃くよどんだり、死者の強い思いを核として寄り集まったとき、零たちのような魔物が生まれる。

彼らは、人の思いを力とし、時にその命をも糧とする。

そして零は今、優奈の親の命は取らないまでも、会ったついでにその感情を吸い取ってやろうと考えた。

相手が持っているであろう、明るいはずのない感情は、零たち“悪魔”と呼ばれる種類の魔物には良い養分であり、五感を通さず味わう美酒だ。

癒しとなり、活力となり、高揚感を生み、時に何ともいえない快

感を持って彼らを酔わせることができる。

心が壊れない程度に、吸い取れるだけ優奈への感情を吸い取ったら、娘が生きているだけでも良かった、と思うようにあきらめの暗示をかけ、帰らせるつもりだった。

零は。

幽霊さわぎに巻き込まれては、この町にも住みづらくなる。

これで、おしまいだ。

簡単にそう考えていただけの彼は、自分の中の“まつるわぬモノ”を忘れていた。

忘れていた、というより、軽視するあまり意識すらしていなかったと言うほうが正確だ。

すぐに、それを後悔したが。

カラダを気体に変え、獲物を包み込みながら感情をあり、より多く引き出して喰ってやろうと思ったのだが、形態を変える前にカラダが勝手に動き出した。

「ん」

自分の体の思わぬ動作に、小さな声がもれる。

三十代前半くらいと思われる女が、そこにいた。

優奈の面影がある、母親だ。

近づいていこうとするカラダを、もう見つかってしまっていたが、とりあえず意識して止める。

たいした抵抗もなく、主導権はすぐ戻ってきた。

夜の、誰もいないはずの公園をうろつく顔色の悪い子供が、どう見えるか。

相手が誰でも、この場所にそういうウワサがもともたなかったとしても、答えは同じだろう。

優奈の母は、零を幽霊と思ったようだった。

心持ち、目を見開き、顔をひきつらせて凍り付いている。

幽霊と思ったなら、それでもいいか、と零は思った。

要は、相手が何らかの感情を持つてくれさえすればいいのだ。

それが明るいものでなければ、憎しみでも、悲しみでも、恐怖で
も。

（続）

続き

俺が、怖いかな？

零はそう訊こうとしたが、またもやカラダが彼を裏切る。

口走ったのは、全く違う言葉だった。

「おばさん、ボク、幽霊じゃないよ。」

本当のところ、この公園でウワサになっていた幽霊とは二セなゆたに他ならず、この弁解をした本人だった。

大ウソだ。

それが見抜けるハズもないが、“おばさん”と呼ばれた優奈の母親は、その言葉を見せず、意を決した表情でこういった。

「優奈を、あのコを元に戻して！」

公園の幽霊のウワサが本当なら、自分の目の前にいるのが、娘をあんなんふうにしてしまった相手だ。

優奈の母親は、今まで普通に生活してきた人間を、一晩にして、正確には一瞬で廃人にしてしまう“幽霊”と、対決する覚悟を決めたようだった。

この言葉に、優奈を誰よりも大事に思っていた二セなゆたが、どう反応するのか零にはわからない。

零は誰かを大事だと思ったことも、それを失ったこともないからだ。

あの時のように、不様に泣くのだろうか、と少し不安になる。

自分のほんの一部だとはいえ、少しでも本気で泣いている所など誰にも見られたくはない。

だからといって、零は二セなゆたの行動を止めるつもりはなかった。

どうなるかわからないからこそ、見てみたいと思ったのだ。

自分にすらわからない、もう一人の自分を。

間違いなく自分の一部でありながら、全く理解できない、だから

予測もできない。

特別な契約をしたわけでもない、たかがそのへんの子供一人に全存在をかけて執着するようなことなど、理解できるはずもない。

悪魔でありながら、人の心を奪ったことを後悔し、最後は許しを請うた。

気に入ったのだから、悪魔なのだから、人の心を奪い、喰らうこととに後ろめたさなど感じる必要はない。

自分のものになったハズの、その心が、失われたと感じるのは、あまりに人間的だ。

だが、ニセなゆた はユウちゃんの心を奪った事を後悔し、それが失われた事を悲しんでいた。

それは、愛するものを失った人間の反応によく似ていた。

その一方で、他の人間をためらいなくエサとしてむさぼり、害した。

命を取らなかったのは、単にそのやり方がよくわからなかっただけだろう。

“ 本体 ” である零の記憶すらない、まるで生まれたての魔物だったのだから。

優奈に対する、人間的過ぎる反応。

他に対する、悪魔らしい反応。

それが自然に共存する、ニセなゆた。

もう一人の自分。

人から生まれた魔物が、人に似た部分を持つのは一見当たり前のようだが、ニセなゆた が優奈に見せたような反応は、“ 悪魔 ” という種にはありえないものだった。

“ 悪魔 ” は、気に入った人間を喰った後に、満足することはあっても、悲しんだりはいしない。

彼らの天敵とも言える “ 天使 ” ならば、自然なことだろうが。

時に “ 天使 ” であり時に “ 悪魔 ” 。

まるで、人そのものだ。

予想のつかない“自分”の可能性。
それを、零は見えておきたかった。
見てみたかった。
無性に。

（続）

続き 2

自分を突き動かす、この興味がどこからくるのか、彼にはわからない。

あるいは、これも二セなゆた のせいなのかもしれない。そうだとすると、見たいものは見たいのだ。

優奈の名を出されても、“彼”は泣かなかった。

淡い喜びと、静かで確かな存在感を持った悲しみとが、胸ににじみ出す。

二セなゆた のものだ。

零にはまだ、二セなゆた の意思は見えない。

「ねえ、連れて行ってボクを。ユウちゃんのところ。」

優奈の母の瞳を見つめ、二セなゆた が力を注ぐ。

思い通りに動かすために。

だがやはり、未熟だ。

ただの人間に暗示をかけるのに、必要以上の無駄なエネルギーを使いすぎている。

“悪魔”の視線は、目が合えばそれだけで正常な判断を邪魔するくらいの力は持っている。

実体を持つ零くらいの“悪魔”になると、念じれば相手の精神を破壊することもたやすい。

感情や思考が密集し、凝縮された存在である零たちは、精神的な世界において不可能はほばない。

そして、人間と精神は切り離して存在できない。

死しても、なお。

いや、死してしまえば、なおさら。

感じる心がある限り、“悪魔”の影響を受けないでいることは不可能だ。

いま零の目の前にいるのは、もっとも影響を受けやすい“おシア

ワセに生きてきた普通の人間”。

軽く思うだけで、相手は言いなりになるハズだ。

それを、二セなゆた は全力で操ろうとしている。
りきみすぎだ。

さすがにそれは止めた。

余裕は出てきていても、まだ以前と比べれば弱すぎるほど弱い自分の力を、そう無駄遣いされてはたまらない。

すぐに止めさせたものの、元々そんなにチカラのいることでもなかったから、優奈の母はもうすっかり催眠状態になっていた。

「そう、ね・・・優奈、に・・・会って、あげて？」

見舞いにきた友人とでも思わせたのか、優奈の母はそう言って、ふらふらと歩き始めた。

カラダをゆすりながら、夢遊病者のようにふらふら、ふらふらと危なっかしい彼女の手を、零が、二セなゆた が握った。

「おばさん、手えつないでこ。」

ニコリ、と可愛らしく笑った彼は、もうすぐ優奈に会える期待に胸をおどらせていた。

それだけなら、零はすぐに意識を全て自分に戻していただろう。
彼は二セなゆた を見守り続けた。

だんだんと大きくなっていく期待、そこへ時折 寄せる、とても静かな、ひどく冷たい波を。

それは寂しさ、と思えた。

この先が、わかった気がした。

それは、多少のわずらわしさを零にもたらすのだろう。

それでも、見逃してやる気になった。

いつのまにか、少しずつ理解できるようになってきていた。

わからなかったハズの二セなゆた の考え、気持ち、その行動の理由。

“悪魔”にとって意味のないそれを、打ち消す気にはならなかった。

バカバカしいのに、否定しようとは思えない。

この世に未練を持った死者たちは、思い通りにさせ、その未練を消してやることで残った存在のほぼ100%を力として吸収することができた。

逆に、力ずくで吸収しようとするに存在を壊してしまえば、取り込める力はその一割にすら満たない時がある。

合意の上かそうでないかで変わる、エネルギーの吸収率は、生きている人間相手でもだいたい同じだ。

たいていの場合、最後は死ぬのだし。

だから“悪魔”は契約をする。

相手を壊す過程を好むモノ以外は。

もつとも、零がすっかり結んでしまった人間との主従契約は、かなり特殊でこの限りではないが。

ともかく零は、この無意味な願いを叶えてやろうと思った。

自分の中にありながら、ひとつになりきれぬニセなゆたの、その未練をなくしてやれば、おそらく完全に自分になじむだろう。

やりたいように、やらせてやる。

ニセなゆたが自分の一部なら、その願望も、自分のもの思っ
てやってもいい、そんなことすら考えていた。

（続）

続き 3

眠る優奈は、今にも目を開けてうつとうしくまとわりついてきそうだった。

顔色もよく、どこといって異常はなさそうに見える。

「ゴハンは、ちゃんと食べてくれるし、お風呂もなんかも、つれていってあげれば一人で入るの。・・・でもね、笑って、くれないのよ。ワガママも、言ってくれないの。優奈・・・ユウちゃん、ママ、ユウちゃんのワガママも大好きよ。ユウちゃん、ユウちゃん・・・！」

優奈の友達が来たと思い込んでいる母親は、そう言って泣き崩れた。

今の優奈は、ただ生きているだけだ。

エネルギーが供給される限り、機械が正常に動き続けるのと同じこと。

動いていても、感情はない。

反射的に、なすべきことをしているだけだ。

零と、ニセなゆた は同じ瞳を通して彼女を見下ろし、それぞれに別のことを思っていた。

零は、彼女を想うニセなゆた を思っていた。

痛みと、それ以上に大きな、何か別の・・・不愉快に胸をざわつかせる感情。

どこか懐かしいのに、不快で、それでいてどうしようもなく、魅力的な。

そして、ニセなゆた は。

「ユウちゃん・・・ちよっとだけ、久しぶり。だよな？」

赤味がかった、細くつややかな優奈の髪に、青白い指が触れる。静かに眠っている彼女の前髪を、少し整えてやる。

部屋には低い、押し殺した母親の泣き声以外に音はない。

「おばさん、ちよつと外でて？」

声が気に障ったわけでもないだろうが、ニセなゆたが母親に優しく声をかける。

正常な判断ができなくなっている母親は、得体の知れない魔物を残して、娘の部屋から出た。

トン、と小さく音を立ててドアが閉まると、ゆっくり、おだやかに、ニセなゆたは優奈に話しかける。

「・・・ねえ、ユウちゃん。ボク、今日ね・・・・・・バイバイ、しに来たんだ。ユウちゃんをママのところに、返してあげるね。」

おおいかぶさるようにフトンの上から優奈を抱いて、頬をすりよせる。

「これで、元通りだから・・・バイバイだよ、ユウちゃん・・・バイバイ・・・」

自分の意思でない言葉がつむぎだされるにつれ、カラダから力が抜けるのを零は感じていた。

ニセなゆたが、奪った心を優奈に戻しているのだろう。

気をつけていなければ感じない程度の、軽いめまいに似た感覚。

全て返せば、ニセなゆたは消え、優奈は元の優奈に戻る。

ニセなゆたは、彼女の心をそっくりそのまま、喰うというよりは自分の中に大切にしまっておいたらしかった。

バカだな、“我”ながら。

少し笑いたくなりながらも、とつさに零は行動を起こした。

もうこのカラダを動かす力もないニセなゆたが、完全に消える前に。

「ユウ！俺だ、わかるか？！」

耳のすぐそばで聞こえた声に、とじていた優奈のまぶたが、ピクリと動いて、うつすらと開く。

なによりも近くで、零の瞳がそれを映す。

「なゆ・・・？」

寝起きの、甘ったるい小さな声。

口元は、微笑みかけて。

どうやら間に合ったらしい。

あたりが明るくなっただけで、胸にはあたたかさと、心地いくすぐったさが広がる。

世界を変えるほどの幸福感は、しかし一瞬で消えた。

バイバイじゃない、俺は、“俺”が、ここにいる。

そう思いながら、一方であやうく出かけた、大好きという言葉は飲み込んだ。

（続）

続き 4

もちろん、本人の言葉ではないからだ。

パツチリと目をさました優奈は、目の前に大好きな なゆたの姿を見つけると、はしゃいだ声を出した。

「なゆ！どしたの？なんでウチにいの？」

それから、一瞬黙り込む。

「あ・・・ごめんね！もう、怒ってない？」

最後に会った彼を思い出したらしく、顔を半分フトンに隠しながら、不安げに零の顔をうかがう。

そして、目が合った瞬間、優奈はまぶしさに目を細めてから、不思議そうな表情に変わった。

「・・・なゆ・・・なゆ、今までどこだったの？ユウちゃんずと待ってたんだよ？！」

急に不満を訴えだす優奈は、もう二セなゆたの記憶を持っていない。

本人ともども、永遠に眠ったのだ。

これから優奈と付き合っていく上で、あの二セモノのベタ甘な言動の記憶は、零にとって大変ツゴウが悪かった。

「言わなかったか？俺は、体が弱いんだ、ユウ。だから、ちょっと入院してた。」

この場合、彼の顔色はむちゃくちゃ説得力があった。

「えー！だいじょーぶー？！」

すっかり信じて心配そうにする優奈に、零は罪作りな笑みをくれる。

「ああ。」

この肌の白さは本当に便利だ、そう思ってたの笑みだが、あいにく優奈にはわからない。

病弱に見えるから、会いたくないときは寝込んでるとか言えばい

い。

実は、使いなれているテだった。

「そつかあ、よかったあ。」

優奈も笑う。

二セなゆた を受け入れた零は、もう以前のようにその笑顔を不快とは思わない。

「なあユウ、今は夜だから、もう寝ろよ。」

ひととおり丸く収まったことだし、正直これ以上優奈の相手をするのが面倒になった零に、誰が彼女を起こしたのかとツッコむ人間がここにはいなかった。

「えなゆ帰んの？」

優奈は不満顔だ。

「夜だからな。」

零は、零だからその表情を意にも介さず、答える。

「やだやだあ！もつといて？」

「だーめだ、またな？」

面倒くさを隠すことさえしない、声と顔。

「えーだつて久しぶりなんだよ？」

ワガママ少女は、そのくらいではあきらめてくれない。

これの、どこが良かったんだ。

そう思つて、軽いデジャヴを感じる零。

なんだ、この感じ・・・。

ほええ、と気の抜けた音が聞こえて来そうなほど油断した、見慣れた笑顔を思い出しかけて反射的にそれを頭から追い出す。

考えるだけで、疲れてしまいそうだから。

そんなことより、いまは目の前にある面倒をなんとかしなければならぬ。

「キライになるぞ。」

とりあえず脅迫する、“悪魔”零。

かといって、ただ今は面倒になつてきただけで、もう顔を見るの

もイヤというわけではない。

そのうち、日を改めてなら相手をしてやる気でいた。もっとも、からかったり、悪知恵を入れたりしながら俺色に染めて、立派な悪女ってやつに仕上げてやるう、などと考えているのだが。

「やだ！じゃ明日、明日あそぼ？」

困った顔で優奈が妥協案を出す。

「明日、はムリだな」

面倒だから、と零は心の中で後半付け足す。

「じゃあさつて！」

「そのうち。」

「えええー！」

納得できるハズもないテキストー回答に、ユウちゃん大ブーイング。そこに、少し大きめの零の声がかぶる。

「今寝るなら！おやすみのちゅーしてやる。」

「寝る！」

即答した優奈は、おませさんだ。

「寝るんだから、目エ閉じろ。」

零の言葉に、素直にに応じて目を閉じる。

気のせいみたいに軽い、冷たい感触。

すぐに優奈は目を開けてしまう。

部屋には、もう誰もいない。

「なゆ？」

声をかけても、答えはなく、幻覚とも思える不確かな体験。

それでも、唇に手を触れ、優奈は嬉しそうに微笑むと今度こそ本当に眠りに付いた。

次の日、何事もなかったように起きてきた優奈に両親は目ん玉飛び出させて驚き、学校に行ってみれば長い間休んでいたと聞かされ、心配していたみんなにズイブン歓迎された。

公園で転んで、頭でも打ってしまったのだろっ、ということにな

った。

優奈にとっては、妙に記憶がとんでいて、それがどこからかもアイマイで変な感じだったが、そう言われてみればそういう事のような気もした。

（続）

続き 5

「どうしてえ・・・？」

帰宅したレイは、部屋にいた二人を見てつぶやいた。

「こんなの、こんなの、き・い・て・なあーいーい！」

叫ぶ彼女を、零と優奈が見上げていた。

「ちよつと零さん！約束違うじゃんもう会わないって言わなかったあ？！」

確かにその通りだ。

自分を好きになつた優奈を、零がただレイにヤキモチをやかせるためだけに利用した事に、レイは心を痛めた。

そんなレイに負けて、零はもう優奈と会わないと自分から約束していたのに。

その零は、悪びれもせず言った。

「な・ゆ・た、だろ。それからな、約束は確かにしたが、事情が変わった。」

「なにそれ。」

すっかりイライラしちゃっているレイは、呼び間違えたことを謝らず、多少挑発的に先を聞こうとした。

イイワケできるならしてみなさい、という所だ。

ふふん、と笑うと零は優奈に顔をむけた。

二人の後ろでは、テレビアニメが流れている。

「なあユウ、俺に彼女がいるって知ってるだろ？」

これで、相手を一方的にもてあそぶという状況ではなくなる。

「えっ、零さ？！」

言われた優奈より先に、レイが驚きの声をあげた。

それって、誰のこと？

「うん、でもユウちゃんアイジンだからいーの！きゃあははは！」

すかさず可愛らしく、無邪気な声をあげる優奈。

「だ、そうだ。どうする？レイ」

コドモらしくない影のある、たくらみ顔で零がニヤリと笑った。

「え、・・・ええー？そ、それでいいのおユウちゃあん？」

泣きそうな困り顔でいきながら、その彼女つてあたしかな？あたしであつてるのかな？と、喜びと不安のいりまじる疑問がレイの胸をぐるぐる渦巻いた。

そんな彼女をよそに、ユウちゃんの無邪気な笑顔は変わらない。

「うん！だつて“りやくだつ”しちゃうから。ユウちゃんのみりよく であ、なゆ奪っちゃうんだもん！」

遠足の予定でも話す顔で、楽しそうに優奈はそう言った。

「ええ？ええ？！えー・・・」

「くつくつく・・・」

大人のくせに何もいえないレイを見ている零が、抑えきれない忍び笑いをもらった。

「あたし、負けないからね。」

小さくレイがつぶやくと、零は意地悪く冷たい目で彼女を見る。

「ふーん？」

「あ、え？あ！違って、彼女とか思ってるんじゃないで、立候補で！あのつ、ちがつ」

気まずい視線に、レイはあわててイイワケした。

あつという間に立場逆転だ。

勘違いだったかな、と落ち込むレイ。

そこへ、優奈が追い討ちした。

「レイちゃんはさあ、同い年のオトコ見つけたほうがいいよ？」

ヨユーな得意顔で、上からおっしゃる。

「レイちゃん・・・オトコ・・・」

レイは、ワガママ少女の真の姿を見せ付けられ、これがガチの勝負なのだとやっと気づいた。

勝っても負けても恨みつこナシ（でもきつとユウちゃんは恨む）

で、血の雨を降らす戦いなのだ。

相手のことを考えてたら、まちががなく（零を）持ってかれてしまふ……！

決意も新たに握りこぶしを固め、とりあえず今は唇を噛み締めて耐えるレイなのだ。

「なんか……暑っ苦しいぞお前。さて、ユウ、送っていくから、帰る準備しろ。」

あきれた顔でレイに投げかけた後、優奈にはいくらか優しい声を出す。

二人が見ていたアニメも、ちょうど終わっていた。

「え、行っちゃうんだったらあたしもついてく！」

あわてて付いてこようとするレイを、零が振り返る。

「じゃ、一緒に遊んでるときもずっと付いてくるつもりか？」

「う……むり、だけどお！」

「ウザい。クドい。ここにいろ。」

あまりの冷たい言葉にうつすら傷つき、レイは少し泣きなくなつた。

「いこつ、なゆ。」

支度を終えた優奈が、零の腕に自分の腕をからませた。

「んんんう~~~~！」

くやしくて、ついレイはうなつてしまう。

目をうるませて、顔もほのかに赤い。

「は……。……バカ。」

タメイキをつき、小さくつぶやくと、いつてきますも言わずに零は出て行った。

一人部屋に残されると、レイはベッドにダイブし、枕に顔を押し付けながら両手をグーにしてばんばんとマットを殴る。

「……どっちがバカだあ！あー！もー！零さんこそ、ばかばかばかあ……！」

激怒しながらも、さん付けなあたりが永遠に負け決定のレイだっ

た。

4 オトナ、とかコドモ、とか。

後になつて思えば、前日

「こないだユウちゃんに言つてた“彼女”つてえ、もしかして、やっぱり・・・あたしだったり…する？」

期待をおさえきれない顔で訊いてきたレイに、テンション激低で「は？」

と、返したのも、無関係とはいえないのかもしれない。

いつも家にいる零を気づかう、というよりレイはただデートがしたいだけだった。

「ねえ零さん、あした映画みにいこつ、映画。」

情報誌を手に、レイはうきうきした表情をしていた。

「あ？」

それに対して、零は声のトーンで小さくウンザリしていることをアピールするだけだ。

「これこれー、あたしこれ見たくて、ちょっと付き合つてほしいなーって。でえ、できればその後一緒に買い物とかー、ね？」

ここで遠慮するのなら、最初から話しかけないほうがマシだ、とレイはさらにおねだりをくりだす。

零の方には、使い魔の契約によりじわじわと義務感が生まれ始めていた。

淡いそれは、従わなければ落ち着かないものの、無視しても影響はない。

というのも、レイの言葉は決定を相手にまかせたもので、どう聞いても命令には聞こえないからだ。

命令であつたとしても、すぐに零は撤回させてしまつたりするが、その交渉は、多少の精神力を必要とするものの、反抗にはならないようで、特に不利益は生じなかった。

この場合もそうだ。

「気が進まない。あきらめろ。」

交渉というよりは、逆にこちらのほうが命令にきこえる。

「えー、とりあえずほら見て見て、これ！」

すぐ隣にくつくと、レイは雑誌を零の目のまえに持ってくる。

零の小さな舌打ち。

「近い近い、・・・ん？これは・・・おい、こっちにしろ。これなら見に行く。」

「・・・え？マジで？・・・って、えー？これえ？」

一瞬喜んだものの、零の指差すタイトルを見て、驚きつつあきれた声を出すレイ。

そのレイに、ああ、と答えた零の顔が真剣だったため、渋々“それ”を見に行くことにしたのだが。

次の日、レイが起きると零の姿はなかった。

ボーゼンとし、考える。

デートすっぽかされた？

いやいやいや、だって自分で見に行きたいって言った映画だし。

でも、油断させておいて、とかあの人ならやる気がする。

えー、超シヨックなんですけどお。

てかやつぱあたしの事なんか全然、なんとも思ってたんだあ。

零さんにとつてめんどくさいんだ、めんどくさいんだあたし。

ぐるぐると悲観的なことを考え、レイが泣き出しかけたころ、玄

関のドアが開く音がした。

白い顔がのぞく。

「零さん！」

ベッドから玄関へ駆けだす。

「な・ゆ・た。」

軽く迷惑そうな顔をした零のうしろには、なぜかユウちゃんがい

た。

「おはよーレイちゃん、ねー髪の毛くらいとかせばあ？きゃはは、アタマはねてるう」

「ゆーっ、ちゃっ、えっ？！今日、どしたの・・・」

からかわれたのに気づく余裕もなく、レイはカミカミで質問するのが精一杯だった。

「今日はあ、なゆとデートお！きゃーっ、きゃははは！」

自分の声よりさらに高いユウちゃんの声が、寝起きのレイの耳にキンキン響いた。

「デートって、なゆくん、そうなの？」

デートは、あたしとじゃないの？

とは思ったが、状況からして間違いない。

間違いないが、抗議の意味をこめてレイはきいてみた。

「そうだな。それから、学校のことは心配ない。担任には、俺からよく言っておいた。」

そういえば今日は平日なのだが、どうもユウちゃんを学校から連れ出してきたらしい。

零の言う、よく言っておいた、とは多分、暗示をかけてユウちゃんがいると思い込ませたとか、まあつまり“そういう”ことだろう。ということはレイの今日の役割は、ユウちゃんと零の保護者になることだ。

デートじゃない上、子供をつれて電車で映画館へ行って、きっとお金も自分もち。

文句を言おうとしたレイを、零が制した。

「ユウも好きなんだよ、“アンパンジャー”」

(続)

続き

菓子パンソルジャー・アンパンジャーとは、アンパンマスクをかぶった日曜朝10時のヒーローで、子供に大人気だ。

マスクについたアンパンから飛び出す、パン屋で働く恋人馬多美の作った失敗作”激マズあんこ”を武器に、必ず虫歯になる菓子で世界制服をもくろむ悪の菓子メーカーと戦うのだ！やれ、いけ、あんぱーんじゃーあああ！

…零はその勧善懲悪のストーリーよりも、超天然という設定の恋人、馬多美の一挙一動が主人公アンパンジャーを結果的に追い詰めるさまが楽しみでばあかさず見ている。

ちなみに、アンパンジャーの変身前はイケメン俳優 松平剣一（愛称はマツケン）で、お母さんたちに人気があり、当然のように馬多美を演じる宮垣あかねは（お母さんたちには）不人気だった。

「レイちゃんがつれてってくれるんでしょ？ありがとお。」

恋敵とはいえ、小さな子供に笑顔で言われては、ひっこみがつかないレイだった。

「そ、そうだね、じゃ準備するから待っててね」

なんとか笑顔を作ると、ユウちゃんと零からトドメの一撃が投げつけられた。

「はやくしてねー。」

「あがれよ、ユウ。どうせあいつ支度おそいから。」

どちらもくやしかったが、化粧をしているときに興味深そうにのぞきこんできたユウちゃんは、妹みたいで可愛かったりもした。

レイは、子供が好きだった。

しかし、お姉さんとして接するというよりは、同化して仲良く遊んじゃう系だった。

そんな彼女が、アンパンジャー劇場版「最悪！ねりあんこハミガキ計画！」を、楽しく見る事ができたのは、決してその子供っぽ

さだけが原因ではない。

「アンパンジャーの人すごいカッコいいー！」

胸元をおさえてレイが悶えた。

「だめー！マツケンとはユウちゃんとケツコンすんだからー！」

映画館から出てきた時には、レイはすっかりマツケンファンになつてしまつていた。

興奮してきやあきやあ言つた後、二人はふと零の反応が気になり、彼のほうを見る。

前を歩いていた零は、急に静かになつた後ろを振り返る。

ユウちゃんとレイが自分を見ていた。

彼女たちの会話を思い出しているのか、一瞬だけ間を空けてから、零は二人に答えをくれてやる。

「・・・勝手に奪い合つてろ。行くぞ。」

その冷たく、彼らしい態度にレイは諦め顔で笑つ。

「あは、だよねえ。」

「えー！なゆもユウちゃんをマツケンとうばい合うんでしょー！」

さすがにワガママ少女はそれでは納得しない。

100%自分の願望を零にたたき付け、恋人然として彼の腕にからみついた。

そんなユウちゃんの馴れ馴れしい態度が、零の機嫌をそこねやしないかと、レイは心配そうにそれを見守る。

それでユウちゃんと零が気まづくなれば、レイには都合がいいハズなのだが、ユウちゃんが悲しい思いをする方がよっぽど心配なのが、レイの性格だった。

「なんでだよ。」

零はただそう言っただけで、特に怒つてはいない。

それに安心するレイは、これ以上ないくらい奪い合いという状況に向いていない。

それでも、さらにワガママをいいつつ零にくつついているユウちゃんは気になる。

うらやましさを隠しきれない眼差しで、二人を見つめるのだった。
(続)

続き 2

レイのちよつとしたストレスは、実はしっかり零に伝わっていた。何せ彼は、“悪魔”だ。

不安と、嫉妬。

どちらも“悪魔”の良い養分だ。

ついでに、嫉妬の原因がささいであればあるほど、レイが自分に執着していることが感じられて、零は気分がよかった。

その後レンタルショップでDVD（過去のアンパンジャー作品）を借りる時も、家まで帰る間も、帰り着いてからも、ユウちゃんは零にベツタリだったが、零はそれを放っておいた。

レイも大人だったから、表面上は何事もないかのように、ユウちゃんと仲良くしていた。

彼女が帰るまで、きちんと。

「ゆーう、そろそろ帰れ。」

暗くなり始める時間帯になり、零はユウちゃんにそう言った。

「おうちまで送ってくれるなら帰るーう。」

はい、またワガママ始まりましたー。

口には出さず、零は思った。

レイも、そんな顔をしていた。

「ユウ、そういうワガママはダメだ。」

珍しくマトモなお説教らしき言葉を口にした零を、レイが少し驚いた目で見つめる。

「えー、ユウちゃんワガママじゃないもーん。」

「ワガママだ。」

零の言葉に、レイが小さくうんうんとうなずく。

「いいかユウ、いつも言ってるだろ？相手に言うことを聞かせたかったら、可愛く“おねだり”するんだ。できるな？」

続いたセリフに、レイの表情がいぶかしげなものに変わる。

「いつも？」

レイの疑問に、答える者はいない。

「あ、そっか。レベルの高い愛人は“おねだり”がうまくないといけないんだもんね。」

ユウちゃんの言葉を聞いて、レイの表情はさらに曇っていく。

「ああ、そうじゃないと“彼女”に負けるぞ

？」

うん、とうなずくと、ユウちゃんは一瞬きりつとした表情を見せた。

レイはあんぐりと口をあけ、間抜け全開の表情を浮かべる。

「ユウちゃんー、ストーカーとか怖いしい、どうしても なゆに送ってほしいのー。」

カラダをクネクネさせ、困ったふりをしてみせるユウちゃんに、零が心なしに満足げな目でうなずいた。

「そうだ、か弱いフリはいろんな場面で使えるからな、普段から積極的に出していけ。それが、良い練習になる。」

「うん、ユウちゃんりっぱな悪女になって、なゆに好きって言わせるからね！」

「ふふ、じゃうまくできたゴホウビに今日は送ってやる。次から一人で帰れよ？」

ぱかーんと口をあけたまま、動けずにいるレイを放置で、零とユウちゃんは部屋を後にした。

「なにコーチしちゃってんの・・・零さん・・・」

一人残されたレイは、小さな声でつぶやいた。

(続)

続き 3

ふだんより少しうつとうしさが増している気はしたが、その日眠るまでレイが変わったところはなかった。

圧迫感を感じて、零は目を覚ます。

レイがいた。

上から、零の顔をのぞきこんでいる。

憎らしげに自分を見る暗い表情は、とても彼女とは思えない。

彼女は、自分の隣で寝ている。

しかし、今ベッドの横に立って零の顔をのぞきこんでいるのも、レイだ。

これは生霊、と呼ばれるものだ。

強い思いに支配されて、無意識に憎い相手や、愛しい相手のもとへ精神だけがさまよい出てしまったりするもの。

これだけ近くにいなからそんなものが出るのは、理解できないが。

「なんだよ、言いたいことがあるなら直接言えよ。」

カラダから抜け出るほど、何を思いつめるといつのか。

心当たりがあるとすれば、今日遊びにきたユウのこと。

しかし、まさかあんな小さな子供に、そこまで対抗心を持てるものだろうか。

疑問に思いながら零は、とりあえず説得してみる。

「戻れ、カラダに。そんなんでフラフラしてると簡単に死ぬぞ。

言いたいことがあるなら明日きく。」

冷たくみえたレイの顔が、やや見慣れているスネた表情に変わる。零の顔をのぞき込むのをやめると、両手をグーにして、ばたばた腕をふりまわした。

まるで、だだをこねる子供だ。

「お前なあ・・・」

子供、なら子供にライバル意識を持つだろうな。

半身を起こし、ちよいちよい、と零は小さく手招きした。

レイは、ばたばたをやめるとふくれっツラで零を恨めしそうに見た。

零は、なおも手招きする。

口をとがらせた表情で、レイが顔を少しだけ近づけてくる。

手招き。

レイがさらに顔を近づける。

そのアタマを、よしよししてやる。

一瞬びっくりした顔をしたレイだったが、零の目を見て、ゆっくり満足そうに笑った。

声は出ないようだが、笑うカタチに口が開いている。

両手を広げて、大の字に背中からベッドに飛び込むと、そのままカラダに戻ったらしかった。

寝ているレイ以外に、部屋にはもう誰もいない。

彼女なりに、無理をしていたのだろう。

心と体が、バラバラになるくらい。

「そこまでガマンすんなよな……。メンドクせえ。」

面倒といいながら、改めてベッドにもぐりこむ零の口元は少しゆるんでいた。

つまりは、それほどまでに想われているのだ、と。

(続)

続き 4

微笑んでいるレイの寝顔を、朝の日差しが清々しく照らす。

その頬を、零はわりと思いつきりつねりあげた。

目覚ましを反射で止めて、二度寝しているようなイギタナイ（寝穢い）ヤツに、遠慮はいらない。

「イターイ！」

甲高い声に、零は顔をしかめる。

「目覚まし止めたんなら起きろ。ニヤけた寝顔しやがって。」

吐き捨てた零に、レイはそぐわない笑顔を向ける。

「だつてーえ、スゴくいい夢だつたんだもん。」

俺、だろつな多分。

自意識過剰な零の考えは、しかしこの場合かなりの確率で正しい。あの“生霊”状態が無意識下であっても、零に“よしよし”された事が夢に影響する可能性は大いにある。

「そうか よかったな。さつさとメシ食って出てけ。」

言うだけ言つて零は耳をふさぎ、フルパワーで聞きたくないという意思表示をした。

どうせ聞くだけで耳が腐りそうな、イタい夢に違いない。

「ちょーシツレーなんですケド。」

ふくれっ面で文句をたれつつ、のろのろとレイは起き出した。

レイが着替える間も、化粧をする間も、零はさりげなく振る舞いながら絶対に彼女の方を見ない。

それは気づかいではなく、見られたレイのリアクションを想像するだけで疲れるからだ。

興味もない。

“悪魔”が繁殖行動を取るのを見たことがないし（そもそも悪魔同士が出会えば即殺し合いだ）“つがい”にも出会ったことがない。

まして零は、性欲のたぐいを主食にする“淫魔”でもない。

レイの心がどっちを向いているか、に関心はあっても、そのカラダが出っぱっていると引っこんでるとかは、どーでもいい。

「じゃ、そろそろ行くね、零さん。」

レイが立ち上がり、バッグを肩にかける。

「カギ、閉めてやる。」

「え？あ、アリガト。」

少し驚いた顔のレイ。

普段、そんなことすらしない居候だった。

とはいえ。“悪魔のいる部屋”に、施錠が必要かどうかは疑問だが。

靴をはくレイのすぐ後ろには、零がいる。

「零さんがお見送りしてくれるの、何かヘンな感じ。」

小さく笑いながら、レイが零の方へ向き直る。

「そういう日があっても、いいだろ？」

笑うことも、怒ることもなく零が返す。

「そういう日、ってことは、今日だけかあ。」

そう言いながら、はじめから期待していなかったらしいレイは残念がる様子もない。

「毎日してほしいなら命令すればいい。」

「それじゃ意味ないのー。じゃ、いつてきまーす！」

一言 反論してから、レイは微笑んだ。

だらしないくらい油断しきった、曇りのない笑顔。

見慣れすぎていて、これこそが本来の顔つきとも思える顔。

「ん。」

短すぎる答えに見送られて、たよりない背中が出て行く。

出たところでまたすぐ振り向いて、勝手に閉まろうとするドアを押さえて小さく手を振ってきた。

それには追い払うしぐさで答え、零は内側からドアノブに手をかける。

「じゃね！」

それであきらめがついたのか、それでも音符がちりばめられてい
そうな楽しい声を出すと、レイは今度こそ歩き出した。

数歩分、それを見送ると零はレイの背に声をかける。

「俺はお前を彼女とは思ってない。が、俺なりに気に入ってる。
それで満足しとけ。」

大きくも小さくもない、温かさもないが、けれど決して冷たくは
聞こえない声で。

振り返ったレイの顔が、笑顔になりきる前に零はドアを閉め、施
錠した。

想像するだけで疲れるレイのリアクションなんて、わざわざ見た
くもない。

少ししだけ、零のことがわかってきたらしいレイは、それで彼の
意思を感じ取ったらしく、そのまま出かけていった。

その日、帰ってきてからもレイは幸せそうでメンドくさかったが、
元気がないよりは多少うつとしい方が彼女らしい。

面倒なはず、なのに今日はそれが少し楽しい。

変わっていく自分を、零は感じ取っていた。

そこには、不安と、疑問が同居する。

けれど今は、まだこのままでいい。

このままでいたい、そう望んでいた。

5 渡り歩く影

「友達の友達から聞いたんだけどさ。この話聞くとね、夢みちやうんだって。」

そう言ってウエイトレス仲間の日向寧々子^{ひなた ねねこ}、通称ネコが話した内容は、彼女と一緒に休憩に入ったことを呪いたくなるモノだった。少なくとも、怖がりのレイにとっては。

「なんでそんな話すんのー？」

非難がましい声でネコをせめても、もう遅い。

話は、よくありそうな怖いウワサだ。

夢に男の子がでてくる。

この話を聞くとその夢をみてしまう。

名前を聞かれるから、答えないと二度と目を覚ますことができない、という、というもの。

名前を答えるときに、漢字でどう書くかまで説明できないと、やはり目覚めることができないのだという。

「あははっ、ただのウワサだよー。ミミなんか途中で怒っちゃって最後まで聞かなかったけどね。」

ミミ、というのもウエイトレス仲間で、派手な化粧と金髪タテロールのツインテールが印象的な、スタイルのいい女の子だ。少々、性格がキツイ。

「ミミちゃんも怖かったんだよきつとー。ネコちゃんのいじわる。」

スネた表情でレイが軽くにらむと、ネコは悪気のない様子で笑って、ゴメンてー、とあやまった。

「ほら、来い。」

ベッドの上の零が、レイの腕をつかんで引く。

「やなあ。」

やだ、と言ったつもりなのに、ロレッツが回らないレイ。

「半分白目でキモチ悪いんだよ、さっさと寝ろ。」

ふだん寝る時間は、とつくに過ぎている。

時計は3時を回り、夜に強いわけでもないレイは、落ちる寸前だ。眠気と必死で戦う彼女の目は、半分とじかけていて、意識が飛びかけるたび、白目をむいた状態になる。

それでもなお逆らってベッドに入らず、首を振って零と眠気に抵抗する。

零は、低くつぶやく。

「何だか知らんが・・・強情なヤツだな。」

彼の姿が、一瞬そのシルエツトをくずす。

ふたたび形となった姿は、はるかに大きい。

「うう？」

久しぶりに見る大人の零に驚いたレイが、疑問符を含んだ声を出した。

肩と、ヒザのあたりに、妙に細長い彼の腕が回り、レイはあつと言う間にベッドに横たえられた。

「ただでさえなかなか起きないくせに、俺の負担を増やすな。」

からみつく低い声は、本来の彼のもの。

半分レイにおおいかぶさる格好の零から、長い黒髪が遮光カーテンのように垂れ下がる。

レイの目に映るのは、黒い背景に浮かぶ零の顔だけ。

少しだけ、目が覚める。

自分が恋した、白い顔。

見つめるほど寂しさを感じる、淡い色の瞳。傷口に似て紅い、薄い唇が、にいと笑った。

「見とれるほど好きか？俺が。」

瞳をうるませたレイが、小さくうなずく。

眉を寄せ、悪人の顔でくつくと笑うと、零は一瞬で元の子供に戻った。

「なら逆らうな。」

声も、子供に戻っていた。

どうやっているのか、いつものように手も触れず部屋の照明を落としながら、自分もレイの隣に寝る。

「あい。」

聞き取るのがやっとの小さな返事をした、とほぼ同時にレイは眠りに落ちていた。

軽いイビキまでかいて。

その小さな音を聞き、零は鼻で笑った。

(続)

続き

見覚えのあるドアを開くと、そこは自分の部屋だ。黒い服を着た、子供が倒れている。

ああ、この光景は、覚えがある、とレイは思った。零さんが、子供になっちゃった日だ。

子供の横にしゃがみこんで、その肩を軽くゆする。冷たいカラダが、もぞり、と動く。

見慣れた顔が、こちらを見る。瞳が、光った。

これは、記憶とは違う。

レイは、動けなくなった。

光る瞳が、たまらなく怖いのだ。なんで？だって、零さんなのに。でも、怖い。

まるで、零さんじゃないみたい。出会ったことのない、モンスター。

ソレが、口を開く。

「お前の、名は。」

問われているのに、レイの唇は、縫いつけられたように開かない。緊張にノドが締め付けられ、答えるどころか声を出すこともできない。

「答えられないなら、契約通りに。」

首筋に伸びてくる、白く小さな手。

冷たい指が触れ、レイは息を呑む。

「ひ」

思い切り目をつぶる。

とたんに衝撃を感じて、また目をあける。

暗闇だ。

「何の夢だ？」

すぐ近くで零の声がした。

どうやら、脱出できたらしい。

「ひいつ！」

それでも、たった今まで見ていた夢のせいで、ただ話しかけてきただけの零の声まで、怖い。

「ひーじゃねえ。」

レイのヒタイを、全然チカラの入ってない でこぴん が襲った。びす。

「ヒトの顔面殴つといておびえてんじゃねえ。何の夢・・・まさか、俺か？」

どうやら、うなされたせいでレイは零に危害をくわえたらしかった。

闇に慣れてきたレイの目に、いぶかしげな零の表情がおぼろにうつった。

レイの脳裏に、ネコの言葉がよみがえる。

この話聞くとね、夢みちやうんだよ。

レイは、何も言わず首を振った。

「寝るのをイヤがったのと、何か関係があるのか？」

ぶんぶん、とレイはさらに激しく首を振る。

どうしても話そうとしないレイに、零は一計を案じた。

「・・・そう、か。話せないような夢なんだな？」

レイは、ただうつむいた。

「話せない、ような・・・つまりイカガワシイ内容だったと。」

「え？えー？！違っそなんじゃないによ！」

ロレッツも回らぬネボケっぷり、慌てっぷりでレイは否定した。

「話せないってことは、いやらしい夢だから、恥ずかしいんだ

る？」

「ちーがーうーよー！」

「じゃ話せ。話せないならお前は欲求不満決定な。」

「えー！そんなぁヒドいよぉ！あたしは、零さんのために」

「エロいなー、大人だなーレイはー。」

困った声を出すレイに、零の棒読みな非難が降り注ぐ。

「違うもん違うもん違うもん！」

「で、夢では俺と　どーんなコトしたんだ？」

ほんのり、零の声に誘うような甘さが混じった。

「しーてーなーいー！！！」

「あー、そつか。いえないようなコトだったんだよなあ。」

思い出したそぶりの小芝居は、またもや棒読み。

「違うもんっでもだつて、言ったら、零さんが」

「違うつて証明するには、話すしかないな？」

「ううっ・・・じゃ、じゃいいよエロくてモ。」

開き直り、諦めてもう一度寝なおそうとするレイの耳に、軽いタメイキが聞こえた。

「俺が、どうなるんだよ。言ったら。何を心配してるのか知らないが、俺はお前らとは違う。」

「だつて、この夢スゴい怖いんだよ？」

何が怖いのか、自分でもよくわからないが、その恐怖は思い出しただけで泣きそうになるくらいだ。

「はー・・・」

今度のタメイキは、はつきり大きく、そしてわずかにイラ立ちを含んでいた。

「お前が怖がつてた映画で、一度でも俺が怖がつたことがあったか？」

「・・・」

沈黙を自分の勝利と感じた零はフン、と鼻先で笑った。

「さぁ話せ、何がそんなに怖・・・つて、寝てんのかよ！」

一瞬の間が空いたスキに、レイはまた眠ってしまっていたのだっ
た。

（続）

続き 2

さっきの、続きだった。

零でない零が、目の前にいる。

光る瞳が、まだレイを見ていた。

「逃げたな？」

いつのまにか、首にまきついていた彼の手。

指に、チカラがこめられる。

一度起きたハズの自分を、夢の中に呼び戻したのは彼なのかもしれない。

「お前は、もう、目覚めない。」

何の感情もないしゃべり方は、今でもする。

けれど、それがこんなに冷たく響くことは、最近では ほとんどなかった。

でも、出会ってすぐの頃はだいたいこんなだったなあ。

恐怖に混じる、ほんのわずかな懐かしさ。

を、我ながら少しおかしいと感じた瞬間、痛みでまた目が覚めた。

「・・・ひ・らあーい（痛い）！！」

頭が浮くほど、頬をつねりあげられていた。

「じゃ、さっさと起きろ！言つとくが最初はもう少し手加減したんだからな！！」

全部言い終わってから、零は手を離れた。

いいかえれば、零が全部言い切るまでレイは頬から吊られていた。

もちろん、ぎゃあぎゃあ騒いだ。

すっごく痛いから。

当然零は気にしない。

ちよっぴりイラつときてたので。

「こつちが話してる間に寝やがって。バカにしてんのかテメーは。朝まで一睡もできないようにしてやろうか？あア？」

「ごめんなさいゴメンナサイきやーっ！それでえっと、何の話だっけ？」

ご
ち

「あいたつ」

脱力した零のヒタイがぶつかり、レイは地味に痛がる。

「お前は・本当に・ドマゾだな。」

低くこもった声は、どうやら立腹らしい。

「そんなに」

言いながら零はレイに、ごちつとヒタイをぶつける。

「あいたつ！」

「体罰が」

ごちっ

「あづっ！」

「欲しいのか？」

ごちっ

「いだいって！」

「ああん？」

怒涛の連打。

[illegible]

「いたいたいたいたいたいたいたーあつ！イヤッ！」

「イヤなら話くらいちゃんと聞けっ……ん？」

突然、零は怒るのをやめると、表情をひっこめた。

視線だけを動かして、部屋の中をチェックしている。

その目が、レイの後ろ、ベッドのふちあたりで止まった。

レイも振り返る。

そこに、白い手があった。

手の後ろから、黒い髪をした頭が上がってくる。

ぼんやりと光る、恨めしそうな目が現れた。

「二度も、俺から、逃げたな。」

光る瞳は、暗い室内の様子がうつすらわかるほどになっていた。

「・・・や、いやぁーっ！」

レイは、悲鳴をあげた。

思わず、零のたよりない体に抱きつき、薄い胸に頬を強く押し付ける。

零は、動揺もなく言った。

「ありや俺だろう、何が怖いんだバカ。」

「怖いっすごい怖い！何とかしてよ零さん！」

顔をあげることなく、ひたすらその恐怖から目をそらしたまま、レイは懇願した。

気を悪くすることもなく、むしろ満足げにフン、と鼻で笑うと、零は落ち着き払った声でもう一人の自分に話しかける。

「・・・もうわかってるんだろ？だから襲ってこないんだよね？」

そういえば、何もしてこない。

疑問に思ったレイは、恐る恐る後ろを振り返る。

もう一人の零は、心なしに驚いた表情を浮かべ、ただ立ってこちらを見つめている。

正確には、零の顔をじっと見ていた。

ゆっくりと、口を開く。

「お前の、名は。」

「名前、ね。ゼロって書いて、れい。お前の捜してた名前は、これだろう？俺の名だ。」

訊かれてすぐに、零は目の前にいるものが、名前を頼りに自分を探していたとわかったようだった。

もう一人の零が、無表情のままベッドの上へあがってくる。

「ひゃっ！」

驚いたレイは、再び零の胸へ顔をつけて、目を固く閉じた。

肌の上を、頭の中を、胸の奥を、体中を、冷たい空気がすうっと通り抜けていった。

不意に、両腕をつかまれる。

「もう、平気だ。」

零は強引にレイを引きはがすと、それだけ言って、さっさとフトンをかぶって横になってしまった。

「え？え、え？」

周りを見回すと、何が起きたのか自分たち以外部屋には誰もいない。

「あ・・・、よかったあ、怖かったあ。ありがと、零さん。」

返事はない。

横になったまま身動きもしないカタマリは、気のせいかいつもより大きく見えた。

その背中に安心感を覚えたわけではないが、ほっとしたレイはまたも一瞬で眠りにおちていった。

6 これ、命令！

起きなくてはいけないのは、わかっていた。あまりグズると、零の機嫌をそこねかねないことも。

それでも、昨日は寝るのが怖くて夜更かししたせいで、とても起きられそうにない。

まどろみながら、ぼんやりそんな事を思っていたレイは、シャツの首元が軽く引っ張られるのを感じた。

「…いきやーっ！」

絶叫と共に起床。

ベッドの上で暴れる彼女の服のスソから、氷がいくつか転がり出た。

「くつくつく・・・おはよう。」

おかしそうに、そして陰気に零が笑っている。

「もーっ、零さんやりすぎー！超びつくり…」

そこまで言って、気が付いた。

声が違う。

今までより、だいぶ低い。

もうほとんど以前の通りに聞こえる。

そして、もっとハッキリした違いがある。

「零さん、おつきくなった？」

それに対して今日の零は、怒るわけでもなくフンと鼻先で笑った。

よく見ると、おつきくなったところではない。

もう兄の背は、余裕で超えていそうだった。

髪も伸び、肩に付くほどの長さになっている。

ただ、顔つきにはまだ少年らしさも残っていたが。

数秒、黙って見つめられていた零の唇が動き出す。

「俺が大好きなのはわかったから、いつまでも見とれてないでサッサとメシ食って出てけ。」

「・・・みもふたもないよう。」

あんまりなセリフに、レイはいじけた声でつぶやき返した。

（続）

続き

あの“夢の中にいた俺”は、かなりの人数を渡り歩いたらしく、子供の姿には見合わない大きな力をたくわえていた。

おまけにそれが、何の抵抗もなく丸々手に入ったものだから、外見も急成長した。

もう“可愛い”なんて言われることは、ないだろう。

おかげで、ちょっと面白い。

テレビを見ている俺を、あいかわらずレイが遠慮もクソもなくジロジロ見ている。

俺は、お返しにこちらからも見つめてやった。

テーブルに手について身を乗り出すと、顔と顔はズイブン近くなる。

「そんなに見たきゃ、近くで見せてやる。」

レイは困った顔で固まり、息も止めてしまっているようだ。

さぞかし鼓動は高鳴っていることだろう。

こんな態度を取られると、・・・もつとかまってやりたくなる。

俺はなんて優しいんだろう、悪魔失格だ。

人差し指で、あわれな子羊の胸、少し上あたりをつつく。

「きこえる。」

言って、笑う。

「えっ?! やだっ!」

胸をおさえ、レイがうるたえる。

不様な姿が、単純に愉快だ。

「・・・くくくつ、んなわけあるか、バカ。」

「あー... 零さんのウソつきい。」

スネた目で、軽くこちらをにらみつけてきた。

何でも信じるあたりは物足りないが、からかって面白いのは間違

いない。

焦ったり困ったりしている顔を見ると、笑いがこみ上げてくる。ま、本気で泣かれると気分は悪いが。

俺がコイツを手放したくないのは、もしかしたらこういう所なのかもしれない。

見ていたドラマが終わってしまつと、レイは

「お風呂はいっちゃお。」

と言つて立ち上がった。

さりげなく俺も立ち上がり、後ろから耳元にささやく。もちろん、色気たっぷりイヤラシク。

「お背中ながしましようか？」

どうやらくすぐつたかつたらしく、レイは耳を押さえ、赤くなりながら必死で首を横に振つた。

笑える。

こらえる。

「エンリヨするなよ、俺はお前の下僕なんだ。」
誘う微笑み。

本当は、声を出して笑つてやりたい。

その間抜け面を。

すると、俺のエモノはちょっとした抵抗を見せた。

「違うもんつ、そんなじゃないもん！零さんは」

「彼氏、とでもいいいたいのか？ちっちゃなご主人サマ。」

少し背を丸め、視線を合わせてやる。

まだもとの状態には ほど遠いが、それでも俺のほう全然背は高い。

と、いうよりレイは、人間の女の中でも小柄なのだ。

その小さなご主人サマの言い分は、というと。

「“零さん”だよ。…彼氏はー、あの、できたらあ、これから…ね？」

照れ笑いで、俺の表情をうかがう。

多分俺は、呆れた顔でもしていたのだろう。

「・・・」

「うん、ムリだね。わかってましたあ。じゃ、お風呂いつてくるね…ついてこないでね。」

わかっているなら、命令でもすればいいものを。

もちろん、風呂の件じゃない。

主人の命令ならば、彼氏のフリくらいしてやる、ということだが、肩を落としたレイは、俺の鼻先でドアをぱしん、と閉める。

「俺は、人間のオトコじゃないんだからな。」

どうせアイツに言ってもわからないだろうが、口に出してみる。それが届いたかどうかは、わからない。

レイが風呂を済ませて戻り、しばらくすると俺は気づいた。

警戒されていることに。

ちよつとからかっているだけなのに、レイは話しかけてこようとせず、こちらの様子をうかがっている。

「何だよ。」

「…何が？」

「気まずい。」

気にはならないが、今からかっても不発に終わるのがわかっているから、何ともつまらない。

おまけにその後、俺がベッドに入ることすら拒絶してきた。

「一緒に寝るのお？」

先にベッドに入った俺に向かって、迷惑そうにぬかしやがった。

今さら床で寝る気はない。

予備のマットレスを敷いても、寝ごころは断然ベッドのほうが上だ。

「何だよ、昨日まで一緒に寝てたろうが。」

「だって昨日はあ！」

「昨日も今日も、俺は俺だ。」

「うう…じゃ、じゃあ、失礼しまーす。」

まだ多少納得のいかない顔をして、しゅしゅレイが隣に入ってきた。

俺は、照明のスイッチに向かって、わずかなチカラを飛ばした。明かりが落ちる。

枕元にスイッチはなく、暗くしてからベッドに入ろうとすると、レイは色んなモノを蹴飛ばすので、これは俺の仕事の一つになっていた。

さて寝ようか、と思うと。

「狭い。」

くつつかないとベッドからハミ出してしまいそうな状況を、俺は口に出した。

「だって零さんおつきくなっちゃったじゃん。」
不服そうなレイの声。

「横むきや少しマシになるか。」

「何でこつちむくの？」

「別に。」

ただからかってるだけだ。

どんなに警戒しても、この距離では無駄。

コイツに許される選択肢は、寝たフリ・照れる・恥ずかしがる、くらいしかない。

寝たフリに関しては、俺の攻撃に耐え切れれば、の話だが。

「じゃ、あたしもあっち向く。」

バカな女だ。

「寂しいだろ。」

甘えた声を出して、俺はレイの肩をつかみ自分のほうを向かせた。さあ、ムダにときめけ。

全力の肩透かしをくらわせてやる。

(続)

続き 2

「やめてよっ！」

これは・・・驚いた。

まさか反抗するとは。

強い調子の声は命令と同じ効果を発揮したらしく、俺は手をふり払われた格好のまま一瞬動けなくなった。

「からかってんのバレてんだからね！」

本気ではなさそうだが、声が怒っている。

「あ、ああ、わり・・・」

「ベッドで寝てもいいから、あたしにさわらないで。・・・これ、命令！」

「あ・・・ん、いや、ハイ。」

・・・まさか命令までされるとは。

基本的にコイツは、俺に命令することを避ける。

これは、さんざんからかわれた事に対する、レイなりの仕返しなのかもしれない。

「あの、な、...レイ、怒ってる、のか？」

本気で怒らせたのか、さすがに心配になった。

おそろおそろかけた声は、自分でも情けくなる程小さい。

ちよつとからかっただけだ、まさかそんなに怒りはしないだろう。それでも、もしかしたら少しは怒らせたかもしれない、嫌われたかもしれないと思うと、胸の奥で焦りがささくれ立ったツメを立てる。

自分は好かれているのだからこのくらい平気だ、と落ち着こうとしても得体の知れない感覚は止まない。

そのくらい、レイからの命令というのは珍しいものだったとも言える。

小さないくつものキズが、そわそわとうずく。

レイは、何も言わない。

やっぱり相当怒ってるのか？

「…レイ？」

「ん…くふー、くー…」

…寝てやがる。

「寝つき良すぎんだよ…」

気にするだけムダだったのかもしれない。

俺も寝ることにした。

怒っていないみたいだと思うと、妙な危機感もウソのように消えた。

目覚ましを止める。

低いテレビの音と、コーヒーのいい香り。

頬杖でテレビを見る、見慣れた黒い小さな影。

「あ、おはよ、零さん。」

「おはようございます、ご主人さま。」

反応がおかしい。

なんでだろう、と考えてレイは思い出した。

「あつ！昨日ごめんね？さわんないでなんてっ…」

言ってから、さらに思い出した。

すっかり子供に戻っているが、きのうの零はオトナだったハズで、そのせいで“さわんないで”などと言うハメになったのだ。

「あれ？零さん元に戻ったの？」

「今は、昨日のアレが本当の俺だ。どっちかって言えば、これは“変身”になる。…これなら、今まで通りなんだろう？」

「え？」

零が、レイの顔に手を伸ばし、指先が唇に触れる直前で止める。

「さわっても、いいか？」

「…え？あ、うん。」

カラダのどこか奥から熱気が上がり、顔全体が火照る。

レイは、眠気からではなく頭がぼうつとするのを感じた。
それから、痛み。

「いぎゃっ！」

唇がつねりあげられた。

「こ・の・ク・チ・がつ！俺に反抗したのが悪い。自業自得だからな。」

引きちぎる勢いで引つ張って、手が離れる。

ふん、と鼻息荒く零は憎々しげに零はレイをにらむ。

「いたーい、ごめんてばーあ。」

涙目で謝る、いじめられっ子。

「命令を正式に撤回しろ、嫌われなくなければな。」

「取り消すう・・・いたいよー。」

「わかつたら」

「さっさとメシ食って出てけ、でしょ？」

無表情の零が、手を上げる。

「ひゃっ」

またつねられるかと、レイが首をすくめる。

ふわっ、と頭に手がのせられた。

「わかつたら、それでいい。」

そう言ってまた零は、すぐにテレビのほうを向いてしまった。

「変なの。でもやっぱ、こっちがいつもの零さんだよね。」

「昨日も今日も、俺は俺だ。」

「昨日と同じこといつてるー。全然ちがつよー、昨日の零さん、なんかヤラしかったもん。」

レイの言葉にわずかに振り返った横顔は、目元がご機嫌ナナメ。すかさず謝ろうとしたレイより一瞬早く、零が口を開いた。

「ああいう俺は」

言いかけて、やめる。

レイは次の言葉を待った。

「・・・いや、いい。さっさとメシ食って出てけ。」

「あー！またそれえ。やだもーん、ゆっくり食べるもんね！」
レイはふざけて言い、笑った。

零は返事もせず、ふいとまたテレビのほうへ顔を戻した。

朝食は、甘くてやわらかいフレンチトーストが用意されていた。

昨日はごめん

本当は零も、そう思っている。

レイはそんな気がした。

7 俺の

ダイスキなのに
だから大嫌いなときもある
スキだったり キライだったり
キモチは 揺れ動く
ブランコみたいに
いっぱい揺れて 揺れて
たのしい、ね？

「零さんて、猫っぽいね。」

自分を見ているようで、そうでない零の視線に気づき、レイが言った。

話しかけて初めて、目が合う。

「ワガママできまぐれ、か？」

「それもあるけどー、今なに見てたの？」

「ナチュラルに無礼だな。お前に見えないモノだ。」

言い返すものの、零はむっとするでもなく、何の表情も浮かべていない。

レイはレイで、なにが“無礼”なのか気づいておらず、本人的にはただ思っただけなので何も気にせず話を続ける。

彼女は基本的にとても優しいのだが、同時にとても頭が悪く、神経もあまり細くない。

と、いうより無神経だ。

「ほらー、そういうトコ。猫もそうでしょ？何もないとこ見てて、夜とか怖いのに。」

怖いというわりに、なにが面白いのか顔は笑っている。

そのハナシを、零は現実的な解釈で一蹴した。

「あれは、見えなくらい小さなホコリや、虫なんかを目で追ってるにすぎん。たいていは、な。」

「え、そなの？ガツカリ。」

「怖くなくていいだろうが。それともナニか？お前は“ドウブツ”にはフシギなチカラがあるんだよお”とでも言うつもりか？」

零がレイの口調を真似てみせると、レイは真っ赤になって恥ずかしがり、抗議した。

「ソレあたしー？全っ然似てない！」

すぐに中途半端なモノマネが返ってくる。

「ぜんぜんにてなあい！」

「もー！！やーめーてー！」

「やーめーてー！」

冷めた表情で、セリフだけをそっくりそのままマネてくるから、ハラが立つことおびたらしい。

「んーもーうつ！」

「んーもーうつ」

ホンモノよりいくらか甘ったれた響きをきかせたコレで、レイはすっかりむくれて口をきかなくなった。

「・・・」

「・・・くくくつ、わかった。今日はこれくらいにしてやる。」
意地悪きわまりない零の笑い顔を、レイが疑いのまなざしてうかがう。

少しかんがえたあと、彼女は電話の横のメモとペンを手に取った。

“ほんとに？”

汚い、とまではいえないが、子供じみた字が問いかける。

「本当。」

零がつまらなそうに言くとレイは、やっとう警戒をといた。

「あー恥ずかしかった！ってゆーかキモチ悪かったってゆーか、零さんコドモー！」

まだ少しスネているらしい。

零は、自分の非を認めない。

「お前に影響されたんだ。俺をいくつだと思ってる？」

本人いわく、軽く1000年や2000年は生きている、らしい。

「えー、ぜったい零さんがコドモなんだよぉ！」

「うるさい。」

とがらせた唇をつねじられ（零はよく、つねる、と、ねじる、を同時に言う）、レイが みぎゅ と悲鳴をもらした。

それでハナシはなんとなく終わってしまい、とうとう零がレイのまわりに何を見ていたのかは、わからずじまいだった。

しばらくたったある日、零は唐突に切り出してきた。

「お前最近、調子悪かったりしないか？」

少し考えて、レイはこたえた。

「なんともないよー？」

「そうか、それは良かったな。」

あきれた、とでも言いたげな顔と声の意味が、レイには何一つわからない。

わからないが、元々 零にはわからない所が多い。

ヘンに追求すると、機嫌をそこねる恐れもある。

レイは、気にしないことにした。

（続）

続き

明るい人間のまわりには、明るい人間が集まりやすい。

それと同じように、明るい人間のまわりには、ヒト以外でも明るいモノ、善良なモノが寄ってくる。

反対に、暗いモノや邪悪なモノは近寄りづらく、そうしたモノは、それらに合う性質の人間を好みがちだ。

だから、本来であれば鳴神鈴はあの病んだ兄や零の影響がない限り、ヒトであれ魔物であれ、悪意を向けられることはめったにない、ハズだった。

そんなことがあったとしても、性質が違いすぎて生半可な悪意ではレイのそばには長くとどまれない。

そういうレイのそばだったから、一時ヒドく弱った零も、他の魔物に襲われず済んだのかもしれない。

いわばレイの部屋は安全地帯みたいなもので、それ相応にチカラある魔物が、よほど精神力のある者の呪いでもない限りはめったに入り込むことはない。

なのに、少し前からレイは、誰のものとも知れない悪意をまとわりつかせたまま、部屋に帰ってくるようになった。

日に日に、その悪意は増していく。

最初は、顔に汚れがついているのかと思った。

気配も感じないほど、希薄だったから。

マスカラか何かが落ちて、見当ハズレなところへついたのだろうと。

しかし、それは見ていた零の視線をたどって、彼の中へ吸い込まれた。

汚れではないと、それで初めて気がついた。

次の日、汚れに見えていたものは、薄黒く濁った粘液に変わって

いた。

やはり、顔についている。

大小数滴の、ぬらぬらしたソレをへばりつかせたまま、何も知らずレイは笑っていた。

それもすぐに、まなざしの中に溶けた。

次の日には黒さが増し、その次の日には顔だけでなく、他の部分をも汚し始めた。

指先を、胸を、ぬるぬるとしたねばっこい液体が伝う。

これは、よこしまな欲望だ。

自分以外の誰かが、レイを欲しがり、好きにしたいと思っている。好きは好きでも、その想いはスズキのように彼女の幸せを望む、甘ったるい気持ちではない。

視覚化された、この黒い粘液のいやらしさ、あさましいありさまは、そのままその思い、またその主の性質を物語っている。

レイがウエイトレスとして勤めるランコントロールは、ケーキの味だけでなく制服の可愛らしさも評判だ。

いやらしい視線で彼女たちを見る者がいることは、容易に想像できる。

従業員か、客か。

どちらにしろ、自分がいる限りその想いはとげられない、と零は思う。

レイが好きなのは零であり、そのカラダであれ、心であれ、好きにできるのは零だけに許される権利のハズだからだ。

もつとも今のところ零は、少しかかう以外レイに何かしたいとは思わない。

部屋に戻るまでまとわりついて離れないほどの想いを抱きながら、決してレイを手に入れることができない、顔も知らぬ相手。

その誰かに対し、ほんのいくばくかの優越感を持ちながら、ほぼ毎日レイが持ち帰る邪心を零は吸収し続けた。

最初のうちは、量も少なく密度も薄かったので、ただ入ってくる

だけだった。

そのうちに、量も増し、密度の濃い想いのカタマリになってくると、相手の考えや、感覚が少しずつ伝わってくるようになった。

たとえば、最初はレイを“かわいい”と感じた。

ふだん意識もしないその容姿が、他に比べて特に好ましいと、一瞬だけ思えてしまう。

すぐにそれは、生々しい性欲に変わった。

予測はしていたし、一瞬で消える。

オマケに、自分の感覚ではないから、それに流されることは可能性すら感じなかった。

逆に、何も知らず、そんな視線で見られているレイがおかしかった。

そうして静観を決め込むうち、レイは全身にぬめぬめとした黒光りする液体をしたたらせて帰宅するようになった。

ここまでくると、優越感だけではいられなくなった。

ただの片思いとは言えない、レイにまとわりつく異常な執着心。

零の胸の中に、じわりと不安がしみた。

原因を、とりのぞくべきか彼は迷った。

それは、レイを守ることになる。

気に入っているから、誰にも渡さない、とは思っても、守るというのは必死すぎる気がした。

そこまでしたくない。

その間にも粘液が、視線に溶けて入り込んでくる。

レイの笑顔が、いつもより可愛く見える。

自分の名を呼ぶその声が、心地いい。

衝動が駆け抜けていく。

着ているものをはぎとって、彼女を。

そんな思考を感じているちょうどその時、何も考えていない当人に微笑みかけられた。

自分の考えでないとわかっているのに、その目をまっすぐ見返す

のがためらわれた。

結果的にそらした目が、ソレを見つけた。

いやらしい“目”を。

とうとう、ドロドロの感情だけでなく、本人の一部までもが現れたらしい。

心のほとんどがレイのことといっぱいで、他のことは自分自身すらどうでもいい、そんな状態が予想できた。

レイの顔の横に浮かぶ、その“目”を零は、消えろ、という意味を込めてにらむ。

部屋にそんなものがあるのは目障りだ。

しかし、レイに説明するのは面倒だから、表情は変えない。

静かに視線を送るうち、数秒で“目”は消えた。

そうだ、なにもわざわざ自分が動かなくても、こうして消してやればいい、と彼は思った。

その零の視線に気づいたレイは、

「零さんて、猫っぽいね。」

と言った。

何も知らずに、ただ零についての発見を、嬉しそうに語った。

(続)

続き 2

その日によって、“目”は醜い“唇”になったり、ぶよぶよした“手”になったりもした。

しだいに、見える部分は広がっていき、さらに数日もすると、全身ねばねばにおおわれたレイにおぶさる形で抱きつく男の半身が見えるようになった。

細くはれぼったい目をした、色白でいかにも暗そうな肥満体の男。べたべたした髪を伸ばしているが、頭自体は薄くなってきた。レイの耳元でうごめく唇は、何かをささやきかけているのか、そこに舌を這わせたいのか。

レイの身になればおぞましい、零の目から見れば見慣れた人間の姿だった。

ただ、こうなってもまだ何も気付いていないレイは、いつもと変わらず、元気そうにしている。

ふつうは、ここまでくればその邪念のせいで原因のわからないイライラや、ゆううつに襲われたり、あるはずのない重みで肩がこったりと、それなりに影響を感じているはずだ。

それが、レイときたら、

「なんともないよー？」
である。

「そうか、それは良かったな。」

言いながら零は内心、死ななきゃわからないだろうな、と呆れていた。

それどころか、その徹底した無神経ぶりに感心さえした。

レイに抱きついている男は、まだ消えない。

だんだん、消えにくくなっていた。

妄想の中で、レイを自分の彼女だとも思っているのだろう。しつこさは、自己主張だ。

生意気に、人間の分際で俺に自己主張か。

そう思うとカツとなり、零は視線にチカラをこめた。
目つきはかわらないまま、その威力だけが増す。

「あつつ？　なんか、ちくちくする。・・・なんだろう？」

すぐそばのレイにもいくらか影響したらしく、カラダをさすっている。

男は、消えた。

レイにしつこく、汚らしい想いをよせる男。

レイを自分のものにしたがるその存在は、邪魔だ。
守るわけじゃない。

邪魔だから、いなくなってもらっただけだ。

レイには、何もいわない。

言えばただ、面倒が増える。

こうなったことも、だれにでも平等にふりまかれる彼女の優しさが原因だろうが、それでも零は彼女に対して忠告しようとする思わなかった。

このバカには、どうせ言ってもわからない。

（続）

続き 3

行ってきます、と元気よく言ったレイに、ん、と短く零は答えた。彼女がドアを閉めると、零の姿は消えた。

ヒトの姿をほどこいて霧状になると、空気にまぎれて移動する。目には、見えない。

人間相手なら、尾行にも監視にも、うってつけだ。

そうやって彼がぴったりはりついている相手は、レイ。

彼女はどうせ、心当たりなどない、と言うだろう。

気味の悪い客がいたとしても、おかしい態度をとられても、たままそういう人だけで悪気はないのだ、と解釈するのがレイだ。

彼女にきくよりは、自分が直接確認するほうが早い。

とはいえ、本当にすぐに相手を見つけられたのは、零の考えがどうこう、というより相手がすでにストーカー化していたせいだ。

アパートを出てすぐに、覚えのあるぬるりとした感触がレイに伸びた。

出かける時間を把握して、待ち伏せていたらしかった。

ということは、今まで帰りも後を付けていたのだろう。

アパートの入り口から部屋までなら、そのへんの男の思い込み程度のモノがついてきても不思議はない。

レイについていたモノ、この男の“念”は確かに強いとはいえ、特殊な力を持っているわけではないという事だ。

いくらか鈍感とはいえ、レイが気づかなかったこともうなずける。しかし、男がレイに強い執着を持ち、彼女に害を及ぼしかねないという状況に変わりはない。

こんなに近くに危険人物がいたなんて、考えてもみないことだった。

零は、一言いってやらねば、と思い一度レイを放置して霧状のま

ま移動を始めた。

ヒトからは見えないこの姿なら、目立たずに車などよりもよほど早く動ける。

ストーカー本人を見つけたときに、考えている事はチェックしておいた。

付け回して、写真をとって、店では客としてそばに近づく、というのが目的だ。

たいしたキケンはない。

今のところは。

とにかく一日中レイを“見守る”のがこの男の唯一の楽しみで、自分では使命だと思っている。

実際には、見守っているハズの視線はちよくちよく胸や、本人は少し太いと思っている脚をじろじろ眺めている。

だが、その視線、ストーカーよりももっと腹が立つことがある。

自分の部屋でも、ランコントロールのものでもないドアの前に、零は立った。

自動ドアが開き、やる気のない店員の声が聞こえる。

「しゃーせー……。」

「お前がそんなだから、客が来ねんだこの店は。」

まっすぐに歩いてくる零の低い声がすると、カウンターのの中の男はすぐにこちらを向いた。

「あ、零くん、ちよつと見ない間にズイブン大きくなっちゃってー。」

文句を言いに来た零は、小さな子供ではなく今現在の彼の真の姿をとっていた。

スズキは、客を遠ざけるような事件を引き起こした本人にむかって微笑みかける。

御雷の事件のさらに前にも、零はスズキに八つ当たりをしたことがある。

その結果、ブレイブの店員はガチホモだというウワサが立ち、客

は激減した。

売り上げ自体はあまり変わらず、逆にスズキの取り巻きが減り、当人以外はせいせいしていた。

「お前は、たまにくる親戚のおじさんか。」

「おじさんはやめてよー、前は自分のほうが老けてたクセにー。アハハ。」

「いくつのつもりだバケモンのくせに。」

「にじゅうろく。」

当然の顔で答えたスズキに、零は顔をひきつらせた。

「だったら俺はハタチだな。」

なぜか、スズキをいい気にさせておきたくない零だった。

文句を言いに来た今回に限らず、スズキは零にとっていつも、なんとなく絡んでやりたくなる相手だ。

きつと相性が悪いのだろう。

何と言っても、スズキは“悪魔”の天敵である“天使”なのだから。

だが、零に対して攻撃をしかけてこないスズキを、殺そうとは思わない。

面倒だから。

スズキが笑い出した。

「ないない！今なんかどう見ても未成年だし。16、7？」

スズキが思い出すよりも早く、零は襲いかかった。

「あうわっ！ったあゝい！」

つまんだ頬肉を渾身の力で引っ張ると、スズキは激しくわめいた。

「必殺！頬吊り（ほおづり）！！」

零も、技名らしきものを叫んだ。

言葉どおり、スズキの顔はやや吊り上げられている格好だ。

零は、子供扱いがキライだった。

ハタチはオトナでも、16はコドモというワケだ。

しかし、1000年以上も生きたわりには、オトナげない反応で

(続) ある。

続き 4

「のいる！のいひやうっ！」

のびちやう、といたいらしい。

「伸びちまえ！どーせすぐ戻るんだろうが！」

人間の体とは違うのだし。

零としては、伸びたままになる呪いでもかけてやりたいところだ。

「いーやーらっ！」

引つ張る零の手と、それをほどこうとして掴むスズキの手の力が拮抗する。

ぶるぶる震える二人の手。

勝負はつかず、したがってスズキの頬は引つ張られたままだ。

「もおっ、あにつ（何）しに、来たんらよお！」

痛みの中からスズキが声を絞り出すと、零は不機嫌に目を細め手を放した。

「・・・この役立たずが。」

「え？」

スズキには、なんの事かわからない。

「レイにストーカーがついてる。」

零の声は落ち着いていて、表情もないが、怒っているのは間違いない。

「で？」

スズキは首をかしげた。

零はそのしぐさに苛立ち、表情と声を変える。

「で、じゃねえ。お前、何しにランコントロールに行ってる？お前がいながら、何でレイにあんなのが近づくんだ？あ？」

詰め寄る零に、スズキは平然と言った。

「甘えるな。」

冷たい表情は、珍しい。

その珍しい表情のまま、スズキは言葉を続けた。

「もちろん、あのコに何かあった時は助けるつもりでいるけど、本来それは君の仕事だろ。ここに文句言いに来たってことは、彼女に何かあったらやなんだよね？僕にイヤミ言いに来ただけなら、君はもつと楽しそうにしてるハズだし。・・・だから、気づいたなら君が何とかしろよ。」

何か言葉を飲み込んだ気配が気にかかったが、言われてみればその通りだ。

放っておけば、何かが起こりそうなきにはスズキが対処したのかもしれない。

ストーカーの考えは、さっき読んだとおりだ。

“何か”起こすまでには、まだ間がある。

焦って動いたのは、気になっていたのは自分だ。

まだそこまでキケンではない、何も起こりそうもないからスズキは動かない。

それが気に入らないなら、自分が動けばいい。

だが、スズキはレイを好きなハズで、ならば危険は可能性だけであつてもつみとるべきではないのか？

「あいつの事が、心配じゃないのか？」

もうほとんど、結論は出ていた。

スズキは揺るがないだろうと思ったが、素直に引き下がろうとも思えず、零は問う。

青い空と、森が溶け合う瞳。

自分の知らない記憶がそこにある気がして、零はかすかなめまいを覚える。

まっすぐに零の目を見たまま、ただ静かに、ゆっくりと彼は

「・・・そうだね。」

と言った。

何かを、伝えようとしている。

そんな気がするだけ、なのかもしれない。

心当たりはない。

何が言いたい？

問うて答えるものなら、最初から口に出すだろう。

何か知っている、それを隠している。

気のせい、だろうか。

ほんの数秒考えると、舌打ちを残して零は店を出た。

ドアが開いた瞬間、人間に見えていた姿が蒸発する。

高速移動する気体に、スズキのつぶやきは追いつかなかった。

「ふふ… やっぱり16、7がいいトコだ。」

安心した、その笑みも。

（続）

続き 5

レイちゃん、今日も一日、おつかれさま。

明日も、キミの騎士がずっと見守ってるよ。

アパートの入り口に消えていくレイを、物陰から見つめながら彼は思った。

「・・・ふ、うふ、うふ。」

薄青いひげの剃り跡に囲まれた唇の間から、荒い息に似た笑いが漏れる。

本当は一日中彼女を“見守る”ために、盗聴器や小型カメラを用意したいところだが、昼は彼女についていなくてはならないし、夜はその日写真におさめた彼女の写真をアルバムに整理して、じっくり鑑賞しなくてはならない。

彼は、忙しいのだ。

それに、取り付ける所を誰かに見られたら、これから彼女を守ってあげることが難しくなるかもしれない。

臆病なのではない、慎重なだけだ。

こんなにも思慮深く、慎重で、彼女のために身を粉にして護衛を続ける自分は、まさしく生まれ変わる前、騎士だったに違いない。

彼は思う。

そして、自分と運命で結ばれた彼女はきつとお姫様だったのだ。

一介の騎士と王女の恋は周りから反対され、二人は・・・。

でも大丈夫、今の二人にはなんの障害もないんだよ、レイちゃん。興奮に息を荒くすると、彼女の部屋に電気がつくのを確かめてから、彼は薄闇の中を家路についた。

両親は昼の間、彼がどこへ行っているのか知らない。

ただいま言わず帰ってきた彼に、家にいた母親が声をかける。

「毎日遊んでないで、仕事探さないね、修ちゃん。」

おれの仕事はレイちゃんを守ることなんだよ、クソババア。
修ちゃんなんて呼ぶなよな、大人なんだからよ。

さあ、部屋でゆっくり今日とりたての、新しい写真を見よう。

二階に上がると、おれは後ろ手でドアを閉めた。

そのとたん急に、寒気と言つか、怖気おそけがした。

「選ばせてやる。Dead or die?」

おれの声ではない。

父親の声でもない。

低い声の中に、押し殺した怒りがにじんでいる気がした。

いや、そんな事よりもおれとドアの間にはヒトが入れるスキマはない。

なのになぜ、この声は後ろから聞こえるんだ？

「…は、…ひは、あう・・・」

なぜ、なぜ、なぜ。

誰・・・いや、ナニが居るんだ？

なぜ、誰もいないハズの部屋に？

いつから、どうやって？

言いたいことは沢山あるのに、混乱と驚きと恐怖が入り混じり、言葉にならなかった。

うしろの何かが笑った。

「くつくつく…いや、悪かった。これじゃ選り辛いな。言い方を変えよう。俺と契約するか、しないか。契約すれば、死後その魂を貰う代わりに、楽に死なせてやる。何も感じず、ただ、心臓が止まる。怖く…ないぞ？くくくつ。」

怖かった。

ナニが怖くないって？

おれは、ナニが何だかわからない。

楽しそうに笑っているコイツは、死神か？

契約…悪魔？

死の、契約。

「いや、だ…いやだー!」

「そうかあ、俺は、選ばせてやったのに、なあああ!」

徐々に大きくなる後ろの声は、恐怖を限界まであおり、俺は、声を…。

「あゝ おっ、がえあつがあっ!」

何かごつごつした物が、素早く口に押し込まれた。

ノドにまで入り込もうとするソレは、後ろから伸びた手だ。

おれは激しくむせて、こみあげる胃液を手ごと吐き戻そうとカラダを震わせる。

暴れても、口の中に入った手が、がっちり頭を固定していて逃れることができない。

口から、たらたらとよだれが垂れ、苦しさに涙がにじんだ。

両手ではずそうとしても、手はビクともしない。

口いっぱいに入っているソレは、甲の部分が収まりきらず、すぐ目の前で青白くスジを浮かせている。

苦しい、キモチが悪い。

噛み付けば放すかもしれないと思ったが、限界まで無理やり押し広げられたアゴにはチカラが入らず、そんなことは不可能だった。

そして、そんな抵抗を考えた瞬間、さらに手は奥までねじ込まれ、骨ばった固い指先がノドの奥深くまで侵入し、うごめく。

さっきまでとは比べ物にならない、苦痛と吐き気が突き上げた。

ノドがケイレンし、体が勝手にびくんびくんと跳ねた。

「くるしいゝい?」

ねばりつく不気味な声が、からかう調子で言った。

(続)

続き 6

冗談じゃない、もう死にそうだ。

「ぐう、ひぐつ、はあひえっ！」

苦しい、放せ、と言ったつもりだった。

手がジャマで、うまくしゃべるところか、声を出すたび吐き気がする。

「ふ・・・ふふ。何言ってるのかわかんねえよ、ブタさん。それより喜べ、契約を断ってくれた勇氣ある！騎士殿には、これからもっと、つらあくてえ、苦しくてえ、めっちゃくちゃ痛い思いが待ってるぞ・・・く・・・くくく。」

騎士？

おれがひそかに自分を騎士と思っている事を、こいつは・・・。考えることさえできなかった。

後ろのやつが、しゃべりながらぐりぐり手を動かしたからだ。

「ぶおうっ、・・・おぶ、ぐ・・・ぶっ！」

とうとう、おれは吐いた。

口に手を入れられたまま、胃の中のものを噴射した。

わずかなスキマから、吐しゃ物が部屋の中へ飛び散る。

後ろで、またあいつが笑った。

「くはははは！きったねえなあ！はははははは！」

大笑いしながらようやく手を抜くと、奴はおれの服のあちこちにソレをなすりつけ、ゲロをふいた。

「えあ・・・はあ、はあ・・・」

おれは、あえぎながら床に倒れこんだ。

振り返ると、おれの後ろにいたのは天井すれすれにまで伸びる黒い影だった。

妙に細長い、長すぎるシルエット。

高すぎる位置から、白い顔がおれを見下ろしている。

大笑いしていたハズなのに、まるで表情が残っていない。
振り乱した黒髪からのぞく、色のない瞳から目が離せなくなっていた。

コイツがなんなのか、どこから来たのか、なぜこんな目にあうのか、ぜんぶ、全部もうどうでもいい。

ただ。

「た……たすけて……」

赤黒い線がうごめき、答える。

「い・や・だ。言っただろう。Dead or die だ。」

「いやだ……いやだ！ いやだっうわーっあーっ！！！」

おれは叫んだ。

声は、出ていなかった。

「しいいつ、騒ぐなよ。」

唇の前に人差し指をたてて、白い顔が近づいてくる。

目の色が、おかしい。

光ってる。

悪魔だ……本当に、こいつは悪魔なんだ。

「この姿を維持するのも、お前の母親をテレビに集中させておくのも、今の俺にはそれなりの負担なんだ。この上近所の人間まで呼ばれたら、ゆつくり楽しめないだろう？ お前と過ごす、夢みたいないひと時をさーあ。……まあ、わかってるだろうがお前にとっちゃ悪夢だ。くっ、くくくっ。」

「……ひっ、はひっ、ひっ、ひ」

耳に音が届いて初めて、自分が息をしていることに気づく。

ひどく早い。

からだ全体に響く、鼓動も。

「ここに、この家の台所から失敬した包丁がある。イチバン痛そうなやつを選んでやった……はい、持って。」

おれの手には包丁を持たせると、奴はいやらしく、ただでさえ細い目をさらに細め、笑った。

「ひい、は・・・はああっ！」

今度は声が出た。

同時に俺は包丁を、横に思いっきり振っていた。
やられる前に、やってやる。

包丁は確かに、奴の体を切りつけた。

なのに手ごたえはなく、何も無いところと同じようにそこを通り過ぎた。

「やると思った。くくくつ、そんな弱いんじゃない、レイを守れないぞ？悪魔から。」

叫びたいのに、また声が出ない。

「それは、そうやって使うんじゃない。こつだ。」

奴がしゃべると包丁を持った右手が、俺の意思と無関係に動き出した。

残された左手で、俺は右手を押さえた。

右手は自分の、おれの腹をめがけて包丁を突きたてようとしている。

奴は、面白そうにおれの右手と左手が戦うのを見ている。

「う・う・・・うぐっ！」

「遠慮するなよ、どうせ大きな声など出せない…と、いうより俺がもうガマンできないな、くくくつ。」

右手に、悪魔の白い骨ばった手が、添えられた。

衝撃に、一瞬視界が白くなる。

時間が、ひどくゆっくりと流れる、数秒間。

突き刺す感触と、食い込んでくる感触が、同時にある。

(続)

7
 続き

痛みよりも先に、パニックが俺を襲った。

「.....!!.....!!.....!!」

やはり声は出ない。

ぱくぱくと口を動かす俺を、愉快そうに悪魔が笑う。

「くつくつく、脂身が多くて内臓には届いてないかもしれないな？もっと奥まで届くように、いや届くまで、繰り返すんだ。」

ふたたび手が、勝手に動き出す。

いやだ……俺は弱々しく首を振る。

包丁が抜けると、血がどくどくと出はじめ、激痛が走った。

刺したのは腹なのに、体中が痛い。

どこが傷口かわからないくらい、体中が痛みを感じているのに。
どっ。

腹に衝撃を感じた。

「そうだ、右手は俺の意思と無関係に……」

「おあああーっ！あーっ！ぐがあーっ！！」

自分でも驚くようなすさまじい悲鳴があがった。

「お・・・つと、クチをふさぎ忘れた。ヒトの血を見るのは、久しぶりでな。」

腹からはしだいに勢いを増して血が噴出しはじめ、なにか、ハミだして・・・

「ア——っおおおおあああつ！！ああつ！！あ——っ！！」

おれは悲鳴をあげ続けた。誰か気づいてくれ、助けて！

その間も右手は勝手に腹を刺し続け、悪魔は機嫌良さそうに微笑んでいる。

「いい声だ。が、すこし、静かにしろ。もう一度俺の指をしやぶりたいか？…俺はもうゴメンだけだな。」

悪魔は血まみれのおれのシャツのはしをつかみ、思い切り引き裂

い切り逆方向へ引つ張った。

「あ、おかえり零さん！」

ドアも開けず、音もなく部屋に入ってきた零に、少し驚きながらレイは声をかけた。

「あぁ。」

彼女の笑顔に目もくれず、定位置に座ると零はベッドに背をあずける。

いつもどおり表情はほとんどないが、その横顔は何となく少し晴れていた。

「なんか……いいことあった？」

レイがたずねる。

「別に。」

そつけなく答えた零の聲は、彼を知らないヒトが聞けば不機嫌に聞こえただろう。

「あ、そなんだ。スズキさんと遊びにでも行っただのかと思ったんだけど・・・」

「なんで俺があいつと遊ぶんだ。」

レイの予想に、零は表情を陰しくした。

「えー、だって夕方から出かけたからユウちゃんとなわけないし、あと友達っていったらスズキさんくらいしか・・・」

「違う。」

「でも友達でしょー？前から知ってるんだったよね？」

「知ってる……だけだ。今日は、“影”を見つけたから回収してきた。」

前から知っている、というフレーズが何となく零は気にかかった。「影」って、零さんから出てっちゃったチカラ、だっけ？じゃ、また少し元の零さんに近づいたんだね！そっか、だからか。おめでと零さん！」

自分のことのように喜び、笑顔を浮かべるレイ。

キラリじゃない表情、それを向けられることが、心地いい瞬間もある。

“俺の”レイを取り戻したと、久々の悪魔らしい行動は、確かに零の気分を良くしていたはずだった。

それなのに、そのレイの言葉が、笑顔が、不安をよんだ。

ヒトである彼女を気に入った、自分でもわからない自分。

その自分は、邪魔者を消すなどと理由をつけ、結局コイツを守ってしまった。

それは、コイツを自分のものにしておきたいのは、守りたいのは、ただの欲望だ。

こいつらの言う、好きだの、愛だの、そんな幻想じゃない。

確かに存在する、欲望だ。

俺はちゃんとわかってる。

わかってる、ハズなのに、わからない。

何か知っているような、スズキの瞳。

あいつは、何を伝えたかったんだ？

何を、言わなかったんだ？

答えはわからない、どうせそんなものはない。

俺は俺を、ちゃんとわかってる。

ただ、少し混乱しているだけだ。

人間を、そばにおきたいなんて、今まで思ったことがなかったせいだろう。

「どしたの？零さん、あたし、何かやなこと言っちゃった？」

気づくと、レイは不安げな表情に変わっていた。

自分を気遣う、大きな瞳。

純粹な目が見つめているのは、ついさっきまで高笑いしながら、ストーカー男に自分自身の体を刻ませていた悪魔。

悪魔は、うしろめたさなど感じない。

「そうだな、全部お前が悪い。」

ただそう言って、目をそらした。

8 4時の影

タイムセールの時間は、子供にとってそろそろ帰る時間だ。まだ街灯など必要ない明るさの中を、男の子と女の子がならんで歩いている。

「ユウちゃん、手えつなごうよ」

男の子が言った。

女の子、ユウちゃんはわざとらしく困った声を出して笑う。

「えー、どーしよっかな。」

もったいつけると、男の子はさらに迫った。

「いいじゃん、つなごうよー。」

「やーん、恥ずかしいー。」

言葉は拒否していながら、裏腹に笑顔で男の子をじらすユウちゃんだったが、ふと何かに気付き、会話をとめる。

男の子がどうしたの、と問う前にユウちゃんは走り出した。

「あ、なゆだ！なゆー！」

「ちよつと、ユウちゃん？」

男の子も追いかける。

その先にいたのは、彼らよりも少し年上に見える黒ずくめの少年。スーパールの袋を両手にぶらさげて、自分を呼ぶユウちゃんの方をむく。

「よお」

短く挨拶らしきものを口にした。

「どしたのお？おかいものお？エラあい！」

彼の買い物を“お手伝い”と思っているユウちゃんは、手放してそれをほめる。

彼女の関心が、全て なゆ、つまり零に行ってしまったのは誰が見てもわかる。

ユウちゃんは一緒にいるもう一人の男の子の方を向こうともしな

い。

面白くない彼は、必死で会話に入ろうとする。

「ぼくだってえ、ぼくだってお手伝いするよ!」

その言葉で初めて彼に気付いた顔で、ユウちゃんが男の子を見た。

「まだいたの? ばいばい、ミッチー。またね。」

冷たく言い、とびきり可愛らしく笑った。

「くくつ、よくできました”だな、ユウ。」

突き放しながらも笑顔で期待を持たせる小悪魔テクを、零はほめてやった。

ミッチーと呼ばれた男の子のほうは小さく、えーと言いながらも帰ろうとはしない。

零しか見えていないユウちゃんにとっては、ミッチーが帰っても帰らなくてもいいらしく、それ以上彼に何かいうことはなかった。

「ね なゆ、明日あそぼっ?」

「ん、んー・・・」

悩むそぶりで零は、だるそうな声を出す。

「じゃぼくも入れて? ね?」

すかさずミッチーが割り込んできた。

今度はユウちゃんが、えー、とイヤそうな声を出したが、零は二ヤリとして言った。

「ああ、いいだろう。公園で、1時だ。」

「えー? ミッチー来んのぉ?」

ユウちゃんが抗議するすると、ミッチーはミッチーでさすがに気を悪くした。

「イヤなの? ユウちゃん。」

責める調子の声に、ユウちゃんはイイワケをする。

「イヤじゃないけどお、なゆ、ミッチーと遊んだことないしい。」

つまり、零が ミッチーと面識がないことを理由に、エンリヨし
ると言っているのだ。

自分だけノケ者になりたくないミッチーは、零に直接話しかけて

みる。

「いいよね？なゆ・・・？」

ユウちゃんが呼んでいた名前を、ミッチーも呼んでみる。

相手がどこまで気を許してくれるか、そうして探っているのだ。

すると、零のほうも親しげに笑いながら、呼び名を確認してきた。

「ああ、ミッチー？」

まだたいした会話もしていなかったが、これでもう二人は友達だった。

こうなるとユウちゃんも、しぶしぶではあるが認めるしかない。

「なら、三人でもいいけどお。」

零は毎日遊んでくれるわけではなく、誘っても断られる場合がある。

約束できる機会は、貴重だった。

（続）

続き

別に零は、男友達が欲しいわけではなかった。

そもそも本物の子供ではないのだから、子供の友達をほしがるわけはない。

その彼がなぜ、ミッチーの存在を許したかというところ。

「もー、なんでだよ！さっきからぼくばかり鬼じゃん！」

鬼ごっこをすれば、ミッチーは零に追いつけず、ユウちゃんをつかまえればわざと零がすぐ次の鬼になり、あつという間にミッチーをつかまえる。

かくれんぼでは、どこかをさがす間に零とユウちゃんは二人して隠れる場所を次々かえてしまい、みつからない。

三人で遊んでいるのに、ミッチーはいつもひとり。

それが、零には面白かった。

ユウちゃんの気を引きたがっているミッチーは、最初から零にとつていいオモチャにしか見えていなかった。

あからさまなイジメに、しばらくすると当人も気付く。

「なんか、ぼくばかりソンしてる。」

不満と寂しさの混じった顔で、ミッチーはスネ始めた。

「そんなことないだろ、じゃあ、違う遊びをしよう。」

零は、全く悪気のない表情で言った。

ユウちゃんと仲良くする零に対して、ミッチーが発する嫉妬は美味しかったし、せっかく手に入れたオモチャをすぐに手放す気はない。

当然、零を好きなユウちゃんは賛成。

「ユウちゃん、何でもいいよー。」

ミッチーのほうは疑っている。

「たとえば？」

零は、少しイジワルそうに笑うと言った。

「お医者さんごっこ。」

「やる。」

ミッチーは即答していた。

ただし俺の考えたやつだ、と零が説明したその遊びは、罰ゲームの連鎖だった。

まず一人、患者役をジャンケンで決める。

他の二人は医者役として、ランダムに混ぜたジュースやお菓子で、クスリをいくつか作る。

ほとんどの場合、味はスゴイものになり、食感も食べ物からは遠ざかる。

テキトーな病名で患者がきて、クスリを処方。

ここで飲みきればクリアで、またじゃんけんから始まる。

飲みきれなかった場合、患者はオペと称して二人からつねられる。患者が10秒耐え切ると医療ミスとなり、残った薬を医者役が飲む、というもの。

なぜか、零はジャンケンに負けることがなかった。

「なゆスゴイ！」

ユウちゃんは感心し、ミッチーはズルいよー、とゴネながらもルールに従った。

仕掛けはカンタン、零は心が読めるのだ。

一度だけ、ギリギリまで迷って出す手を変えたミッチーに負けてしまったが、それでも零は顔色ひとつ変えず“薬”を飲み下してから、とってつけたように

「まずい。」

と言った。

とってつけたセリフなのだから、そう聞こえて当然だ。

“悪魔”の彼は、身体感覚を（意識すれば）殺すことができた。舌と鼻をオフにすると、飲み込む違和感さえガマンすればだいぶ楽だ。

ノドもオフにしてしまえばもっと楽に思えるが、そうするとうまく飲み込むのが難しくなってしまうので、多少の不快感は仕方ない。零が負けたことで、不信感が晴れたミッチーは“薬”を見事クリアした彼に賞賛を送った。

「なゆ、コンジョーあるう！」

さて、しばらくしてこのお医者さんごっことは、（ひそかに二人の苦しむさまを楽しんでいた零以外）誰も得をしないことに気付いたミッチーの提案により止める提案がされ、それは容れられた。

薬のダメージは、ユウちゃんをもむしばんでいた。

その後は、ブランコにのってみたり、ミッチーの聞いて来たウワサ話に、これも付き合いたと零も乗ってやったりして、さらに時間は過ぎていった。

（続）

続き 2

話が学校のことに及んだとき、ミッチーは急に黙り込んだ。

数秒そのまましていると、ユウちゃんが彼の顔をのぞきこんだ。

「どしたの、ミッチー？」

「忘れ物、しちゃったんだ。」

それがどうしたのか、と零もユウちゃんも黙っている。

「宿題のノート、もって帰らないと宿題できないんだった！ヤバい。」

「明日誰かのうつせば？」

ユウちゃんが言うと、ミッチーは首を振った。

「間に合わないよ、今日のやつメツチャいっぱいあるんだ！」

「ママにおこられる？」

ユウちゃんがきくと、ミッチーはうなずく。

「別に、死ぬわけじゃないだろ。」

零はつまらなそうに言ったが、ミッチーはさらに暗い顔になった。

「でもヤだよねえ、ねー？」

ユウちゃんはミッチーの味方らしい。

「じゃ、取りに行けばいい。」

零が言うと、ミッチーはおびえた。

「入れる、けど、けどダメだよ！4時おぼけが出るかもしれないから・・・」

「あー、あれ？ミッチー信じてるの？」

なんでもなさそうに、ユウちゃん。

「なんだ、4時おぼけって。」

零だけが、それを知らなかった。

「4時44分にー、学校でオバケが出るんだってえ。」

言って、怖がるミッチーがおかしいのか、ユウちゃんは笑った。おびえるミッチーに、零はこともなげに言う。

「24時間制で言えば、夕方4時は16時だ。心配しないでいいんじゃないか？取りに行けよ。」

誰か（ほぼミッチー）をイジめるわけではないただの子供の遊びに、彼はもう飽きてきていて、これを口実に解散したかった。

とはいえ、この零の考えには何の保証もない。

よってミッチーの不安もおさまることなく、彼はさらに迷い続けた。

「えー、でも大丈夫かなー、おばけ出たらどうしよう、やっぱやめようかな。」

取りにいくことを考えるとさらに怖くなってしまったらしく、ミッチーは激しく独り言をいい始めた。

零は、くつくと笑い、ユウちゃんは悩むミッチーに一喝した。

「もー、ミッチーかつこ悪い！」

そこへ零が口をはさんだ。

「んなこたない。一人で行けるよな、ミッチー？」

零の微笑には一点の曇りもなく、ミッチーはさらに拒むことができない。

「幸い、暗くなるのはまだまだ先だ。今日はここで別れることにして、お前は忘れ物をとりに行け。」

自然にその場を仕切る零に、ミッチーは流される。

「うん・・・わかった。」

渋谷了解したが、ユウちゃんには通用しなかった。

「えええー？もうバイバイすんのお？ユウちゃんもつと遊びたあい。」

零の方も、そのくらいは読みきっていて、イラつく事も無く対応する。

「送ってつてやるから、ほら行くぞ。」

歩き出すとユウちゃんは、待つてよう、と言いながらついてきた。あとから、ユウちゃんは一瞬だけふりむいて、

「ばいばい、ミッチー。」

と手を振り、少し元氣のない彼に、ガンバレー、と無責任な応援を投げかけた。

弱々しい笑顔でミッチーがそれに応えると、今度は零が振り向き、じゃあな、と言った。

その後、唇の動きだけでこう付け足した。

“あとで”

それはうまく伝わったようで、ミッチーはほっとした笑顔を浮かべ、元氣に零たちに手を振ってきた。

彼らが見えなくなるまで。

その後、零はユウちゃんとの何気ない会話の中から、学校の場所を聞き出しつつ、彼女を家のドアの前まで送った。

明日の誘いを蹴ってユウちゃんをドアの向こうへ押し込む。

それから人気のない通りへ入ると、完全に誰も見ていないタイミングを見計らい、姿をほどこいた。

霧状になって高速移動を開始する。

4時44分に、間に合うように。

（続）

続き 3

ミッチーは、正門のところでヒザをかかえ、うつむき加減にしゃがんでいた。

門のすぐそばに生えている大きな木の陰で、零は彼の友達の姿に戻り、声をかけた。

「よう。」

「わっ！」

ミッチーは、女の子みたいな高い声で叫んだ。

「驚かすな、そんなにオバケが怖いか？くくっ」

零は、動揺していない風に感じられる声と表情で言い、笑った。

ミッチーは慌ててイイワケをする。

「違うよっ、だって後ろからくるから……え？どっから来たの？今・

・

不可解そうに言ったミッチーの表情に、少しだけ恐れが浮かぶ。

零は、いたずらっ子の表情で笑って見せる。

「フェンスを登ったんだ、そっとな。」

違和感がなくとも、自然に聞こえようと大嘘。

とはいっても、今のミッチーには真実の方が残酷だった。

「じゃ、行こっ。」

安心しきった、屈託のない笑顔でミッチーが言った。

陽光は、ゆっくり黄色から橙色へとかわり始めていた。

職員や、委員会活動の生徒がまだまだ残っているらしく、校内に

はそれなりに人の気配があった。

「何だー、これなら怖くないじゃん。ね、なゆ。」

「ああ。」

ミッチーの話に適当にアイツチをうちながら、零はさりげなく周囲をうかがう。

人以外の気配があるかどうか、感じ取るためだ。

ミッチーは当然気付かず話を続け、零はほとんどそれを聞かずにたまにアイツチをはさんだ。

「…でね、さっきまで、なゆのことイジワルな奴って思ってたんだ、ごめんね。」

上の階が怪しい、そう見当をつけたとたん、耳に入ってきたのがそんな言葉だった。

「…」

本人に向かって正直すぎだろう、そう思った零は、つい驚きと呆れが半々の表情でミッチーを見る。

「あ、だから、さっきまでだよさっきまで。ごめんね？ごめんね？」

あまりにも考えのない物言いは、誰かに似ていて、零は思わず笑みをこぼす。

「ふふ、かまわない。」

さつき学校に入ったのが、4時半すぎ。

もうすぐ何か起きるはず。

上から感じる薄すぎる気配は、その時本当の姿を現すのだろう。

ただのウワサでなければ、狩ってやる。

零は初めから、そのつもりで付いてきていた。

自分の“影”が生まれる範囲がどのくらいかはわからないが、ここは可能性充分な場所だ。

レイの住む場所から、一駅は離れていない。

調べるくらいの価値はある。

ウワサ話は自然に広がり、広がった分だけ恐怖をバラまくはずだ。夢の中にいた影のときと同じように、大きな収穫があってもおかしくない。

ついでに恩を売っておけば、後々いい影響があるかもしれない、とも思っていた。

下心は満々だった。

そんなこととは知らず、良い奴であり、頼れる親友零になリたいに、ぺちや

くちやとうるさくしゃべりかけていたミッチーが、突然黙った。

変化は、零のほうがよりはっきりと感じ取っていた。

おそらく、今が4時44分なのだろう。

人の気配が、急に消えた。

遠くあちこちからかすかに聞こえていた、声や物音が、ピタリとなくなつたのだ。

空気が湿り気を帯び、重苦しくなつた。

一種の、結界を作っているらしい。

建物じゅうの人間を一度にどうにかした、というよりは、獲物である零たちだけを周りに切り離し、互いに感知させないようにした、と思えた。

なぜなら、校内の零たち以外を一度に殺せる魔物がいたなら、ウサなんぞが広まる前に、この学校の生徒はとくに全滅しているはずだからだ。

ミッチーが、零の服のソデをぎゅっとつかんだ。

「なゆ、ばく……トリハダ……」

零はミッチーの目を見て、薄く笑った。

「大丈夫だ、少し……目を閉じてろ。」

零の言葉とともに、ミッチーがくずれおちる。

「お子様にはショッキングな光景になるかもしれないからな。」

ついでに、怖がる彼をなだめるのも面倒だった。

強制的に目を閉じることになつたミッチーは、倒れて頭を痛打しながらも、起きることは無かつた。

大人しくなつた彼をその場に残し、零は気配の強い上の階へ進んだ。

（続）

続き 4

4時44分に出るオバケか。

階段を早足に上りながら、零は考えた。

まだ、インパクトがたりない。

4は“し”と読み、死を連想させる。

4が一つ、たりない。

「4階、だろうな。」

それで“4”が“4”つそろつ。

子供相手の魔物の条件付けとしては、充分だろう。

たどりつくと、思ったとおりそこが一番濃い気配に満ちていた。

ミッチーを置いてきたあたりとは、比べ物にならない じめつとして薄ら寒い空気。

呼吸を邪魔するほどの圧迫感と粘りつく重さ。

思考と行動に、決して小さくはない影響をあたえるであろうそれは、しかし零にはノーダメージだ。

生存に呼吸を必要とせず、その気になれば同じモノを生み出せるのだから、気になるわけもなかった。

もし気に障るようなら、いつでも消し去れるのだし。

ここが、建物全体を覆う重苦しい空気を中心、それを生み出している場所だと、零にはわかる。

目に見えるのと同じように、音がしているように、そこから二オイがするように、触れられるほど確かに、しかしそれらどれも違う感覚で、わかる。

オバケというからには、それらしい人型の本体があるはずだ。

さつさとそれを始末したいところだが、どこにもそんなものはない。当然。

ここには、いないのか？

結界の主、学校に出るオバケ。

オバケ、以上の情報がないことが、少々 零を苛立たせた。
ここじゃないなら、他の階だ。

屋上か、下か。

下・・・？

そういえば、下にはミッチーを置き去りにしていた。

「あ。」

今、気づいた。

おいしそうなエモノをわざわざ置いて、その場を離れてしまったことに。

戦うときはいつも一人だった。

それはほとんどいつでも一方的な狩りで、自分のことさえ考えていればよかった。

何かを、誰かを守って戦うことなどなかった。

別に、どうしてもミッチーを守りたいというのではない。

ただ、黙って持って行かせてやる気にはなれないだけだ。

新しく手に入れたばかりの この子分は、ユウと遊ぶときにはいいスパイスになる。

自分をよく見せたくてたまらない彼は、適度に欲深く、つきあいやすかった。

人のカタチを、少しの間軽くほどく。

と、零のカラダは床をすり抜けて、階下へ落ち始めた。

一階まで、ほぼ一瞬でたどりつく。

上がるとき こうしても良かったが、出た先にちょうど本体がいた場合、余計な時間がかかるかも知れなかった。

今は、そうも言っていられない。

少々不利でも、どうせ自分が勝つのだから、ミッチーを確保する事を優先した。

零はカラダを固め、ミッチーのいる方向へ走った。

黒く、長い影が倒れているミッチーのすぐそばでゆらめいていた。零は距離をとって立ち止まる。

黒い煙が、燃え立っているようにも見える。

よくある魔物の姿で、はっきりしたカタチがないということは、だいたいが大した力も持っていないということだ。

細長いシルエツトは、たぶん零の“影”であるらしい。背格好が似ていた。

ソレは、ただミツチーを見下ろしていた。

「おい。」

零は声をかけた。

ぞわり、と影がうごめいた。

零の方を、振り返ったのかもしれない。

何しろ全体が黒くもややもやとしていて、どこが顔なのかもわからない。

零はかまわず話しかける。

「お前のエモノなんだろ？何もしないのか？」

影がそわそわとゆらめくと、零のアタマに映像が浮かぶ。

相手は話す事もできないらしく、じかにイメージを送り込んできた。

大きな影は、自分。

その影に驚き、泣き叫ぶ子供。

逃げて行く後姿。

快感と、活力。

「なるほど。」

子供をおどかしては、その恐怖を吸い取って生きていた、ということだ。

校舎全体を覆うほどの力は多分無く、ウワサがウワサを呼んで、学校という空間に恐怖が蓄積されたことで、ここがヤツの縄張りのようになっているのだ。

「じゃ、恐怖がほしいんだな？」

ざわざわと影が動く。

なんとなく、肯定に思える。

「なら、俺の中に戻れ。」

零は影と同じ、以前の自分の姿をとる。

影が、動きを止める。

「俺は、もつと大きな恐怖を人間に与えることが出来る。」

零の背に、黒いコウモリ羽が伸びる。

深い闇の色をした、大きな翼。

「お前は、俺だ。」

瞳が紫色の光を放ち、長い黒髪が無数の蛇の群れのように房に分かれ、踊る。

影は動かない。

零は一步踏み出した。

「戻らないなら、消すぞ。出来の悪いコピーは必要ない。」

二歩目、今度は何も言わない。

三步、四歩とゆっくり近づく。

あと数歩、というあたりで影が激しくゆらめき始めた。

零は歩を止める。

ざつ、と影が幾筋かに裂けた。

零は神経を集中し、攻撃に備える。

数本の筋状に別れた影は、それぞれ螺旋状に零のカラダに巻きつく
くと、そのまま彼の中に消えていった。

「・・・俺のくせに、俺にびびりやがった…」

同化する瞬間に、影の思考、感じた恐怖も自分の中に広がった。

消される恐ろしさを味わうよりは、その恐ろしい相手と一体化し
たほうがマシと考えたのだ。

「ふん、でも、まあ・・・」

どうやらカラダは、ほぼ元に戻った。

気を緩めても、背の高さも、髪 of 長さも変わらない。

満足げに微笑んでから、“意識して” 零は なゆた の大きさに
戻る。

ミッチーを揺り起こした。

「ミッチー、おいミッチー。」

眠らせた本人が起こすと、頭を打っても起きなかったミッチーはすぐに目を覚ました。

催眠なのだから、かけた当人ならカンタンにとけてあたりまえだった。

「ん、あれ？なゆ、ぼく？」

「おまえ、オバケだとか言っただけで気絶したんだ。平気か？」

心配そうな顔を作りながら、零はもつともらしい嘘をつく。

「でたの？やっぱり出たんだ？！」

すぐに立ち上がって逃げようとするミッチーの肩を、零がつかむ。

「待て、いなかったんだ。勘違いだ、一緒に行つてやるから。忘れ物取りに行くんだろ？」

平然と、なんの表情もなくそう言った零は頼もしく見えたようで、一瞬間をおいて、ミッチーはうなずいた。

（続）

続き 5

それからというもの、ミッチーは完全なる零の子分となり、アタマが上がらなくなったのだった。

「おいミッチー、あそこにいる金髪に向かって　毛野郎って言うて来いよ。面白いぞ。」

「えー、やだよ、あれオトナじゃん、怖いよ。」

零が指差した金髪男を見て、ミッチーは泣きそうな顔をした。

「ああ、きつと怖いだろうな。そうか、嫌か。ふうん……」

零が目を細めると、ミッチーはびくつとして前言を撤回する。

「い、イヤじゃないよ、やっぱ……行ってくる。」

洪々。

「くつくつく、お前、やっぱシンユー。」

機嫌よく零が笑うと、ミッチーは気を取り直してうん、と笑顔を見せた。

親友、の響きが嬉しいらしい。

ミッチーが走っていき、少し離れたところに居たその金髪に、例の言葉を浴びせる。

少し間をおいて、ミッチーがこちらに逃げてくると、すぐに零も見つかった。

金髪が、走ってくる。

「じゃあなミッチー！また今度だ！」

叫びながら零はミッチーを置いて走り出した。

「えー?!ズルいよ、なゆー!!」

「またなあ！ははは！あははは！」

金髪はミッチーに目もくれず、笑いながら走る零を追いかけた。

「れーい！待てえええ！バレてんだからねええええ！レイちゃんに言いつけるぞぉー！」

言うまでも無く、金髪とはスズキだ。

「ははは！零って誰だよ、俺は　なゆた　だ！はははは、はははははは！」

楽しそうな笑い声が、スズキの怒声と共に遠ざかって行った。

9 もっと

「もー、甘いモノばかり食べて、ちっともゴハン食べないんだから！」

とか何とか言いながら、自分の部屋でレイはケーキをばくついている。

自分の働くランコントロールから、お買い上げでテイクアウトだ。

店長はタダでいいと言うのだが、レイはちよくちよく買うのにそれじゃ悪いと言い、結局半額ということになっていた。

その、半額ケーキをレイの向かい側で食しているのは、もちろん零。

したがって、このお説教をうけているのも零だ。

彼も黙ってはいない。

「オトナぶったこと言ってるつもりかも知れないが、お前の考えくらいわかってる。一緒にメシ食ってるってシチュエーションが欲しいだけだろ？」

オヤツを食べている普通の子供にしか見えない零から、こちらを馬鹿にした回答が返ってくる。

普通に、くやしい。

「自分だってー！オトナぶってるけどケーキ大好きじゃんっちょことかイチゴとかー！」

言い返すと、零は余裕で微笑んだ。

「好き…だったら悪いのか？」

確かに、オトナだって甘い物がスキだったりする。

零の表情は、まったく子供らしくない。

レイは自分の方が、間違っている気がしてきた。

「悪く、ないけど・・・。」

くくく、と零が低く笑う。

むしろ、一緒に食事をしたい、と言っても理由が“寂しいから”

というレイのほうが子供じみている。

毎日一緒に食事ができればいい、とレイは思い、まるで夫婦のようなその状況に憧れた。

なのに、不意に浮かぶ疑問。

夫婦、伴侶、ずっと一緒にいる相手。

彼は、自分を選ぶだろうか？

これから先もずっと、一緒にいていつか自分を好きになって欲しい。

それは、彼女の願望だけで、肝心の相手の気持ちは今ひとつ、つかめない。

一応、ちょっとばかりの関心はあるらしいのだが、確かめようとすると返ってくる反応は微妙だ。

好き、ってなんかこんなじゃないよね、とレイは思う。

今の状態に一番ハマる表現は、

嫌いじゃない。

それでも、だいぶ進歩した。

ねえ、好き？

なんて訊けない。

良くても愛想笑い（その気になると零はそれがとても上手い、が素の彼を知るものにはそれが不気味に映る）、悪ければ…嫌われることもありうる。

うっとうしい、と。

二口、三口食べて、まだ半分以上残るケーキを前にレイは食欲がなくなるのを感じた。

「ねえ、零さん。」

返事の代わりに、淀んだ空に似た瞳がこちらを見る。

表情はなくとも、目を合わせてくれたこと、いつもよりかげりの少ない瞳、言ってしまうえば雰囲気で、若干機嫌が良いのがわかる。だから、少し距離をつめてみる。

レイは食べかけのケーキを一口分フォークで取り分けた。

「あーん。」

やな力才されたら、ジョーダンで言っちゃえばいいんだもん。

ほんの一瞬、レイにはそれが少し長く感じる。

間を置いてから、零はそれに食いついた。

ぱくん、と子供のように。

すっかりそれを飲み下してから彼は、たまには子供扱いされてやる、と無表情のまま言った。

（続）

続き

「風邪じゃねえかバカ。」

夜になって咳をしだしたレイに、零は冷たく吐き捨てた。

「はなみじゆ、でた。れえさん、ティツシュ。」

箱ごと渡そうとした零の手が、レイの手に触った。

零が、小さくつぶやく。

「ん？」

白い手がレイの頬に伸びる。

「…熱でてるじゃねえかバカ。」

「ふえ、何か、そーやっていわれたらあ、ボーツと…」

「寝るバカ。」

「でも、おふる…」

「許さん。気になるなら拭いておけ。」

有無を言わせぬ零が、パウダー入りでせっけんの香りのサラサラボデイ、というキャッチフレーズのついた箱をレイの前に置く。

熱で脳がゆだってしまったと見えて、レイは小さくうめきながらその場で服を脱ぎ始めた。

パンツを残して全部脱ぎ散らかし、カラダを拭いていたのだが、零は特に何も言わず、ただ彼女の脱いだ服を淡々と片付けた。

翌日その（見られちゃった）ことを思い出したレイは、深く落ち込んだ。

が、わりと一瞬で忘れた。

幸いすぐに食欲も戻り、あっという間に彼女は回復してしまった。

それから、二日ほど後の朝。

零が寝坊した。

うつすら朱の差す頬が可愛らしくて、レイは隣の寝顔をそっとつ

つく。

「んん」

眉を寄せて、小さな声を出す零。
なんかおかしいな、とレイは思う。

もう一回、つんつん。

「う　　ざ……」

ウザい、らしい。

レイは少し笑って、気づく。

声がおかしい。

おまけに、頬が朱いのも零にはありえない。

どんなに怒っても、真夏の炎天下に何時間さらされても、彼の顔色はいつも青白かった。

その朱い頬に、触れる。

熱い。

「うそ、熱?!」

その声に零が目を覚ます。

「るせえ…何だ?」

ゆっくりカラダを起こした彼を、レイが押し倒す。

「ダメ!寝てて!」

零は驚きのあまり、無抵抗に寝かされたままつぶやく。

「……は?」

「ごめんね零さん、カゼうつっちゃったみたい……」

眉尻を下げ、困りきった顔でレイが謝った。

「…カゼ?俺がカゼなんか」

言いかけて、零本人も自分の声の変化に気付く。

「……つくしゅ。」

たぶん、彼にとって生まれて初めての、くしゃみ。

「ほらあ、零さんハナミズたれてきたよ?」

信じられない、といった顔でぽかんとしている零のハナを、レイはパパッとティッシュで拭いた。

「はい、くしゅくしゅ、チーンで。」

どうも耳に入っていないようで、彼は微動だにしなかった。

（続）

続き 2

その後、お前がいると余計調子が悪くなると言っで、零はむりやりレイを仕事に行かせた。

レイはひどく心配したが、出かけるかわり零にムリヤリ風邪薬を飲ませ、額に熱吸収ジェルシートを張ることで妥協した。

今日は何もせず寝ていることも、命令半分に約束させた。そうして仕事を終えた彼女が部屋に戻ると、もう零は朱い顔をしていなかった。

「あー、熱下がったんだあ。ゴハン食べれる？すぐ作っちゃうね。」

笑顔のレイを、零が止めた。

「いや、いらん。」

「食べらんない？でも食べた方がいいよ？ちょっとでもいいから。」

「逆だ。」

言っている意味がわからず、レイは黙って零の説明を待った。

「俺たちは、もともときまった形すらない不安定な生き物だ。ヒトの生活をしていればそれに適応して、カラダがヒトに近づいていってしまふ。自分でも信じられないが、今回のことは多分それだ。」

俺は、今まで力ぜなんかひいたことはなかった。」

急にレイが、ふふん、と得意げな顔をする。

「零さーん、カゼひかないのはおバカさんのシルシなんだよ？」

零は眉ひとつ動かさず切り返した。

「迷信だな、お前でもひくんだから。」

レイは、うぐ、と うめいた

あれから、零が食べ物、飲み物を口にするとところをレイは見てい

ない。

レイがいなくても、多分それは変わらないだろう。

そのせいか、夕食の献立に渋い和食が出るようになった。

ダシをとらず、めんつゆベースでかなり色んなものを作る手抜きは、いったいどこで覚えてきたのか。

（一日家にいる彼は、実はそれをＴＶのらくらくクッキングというコーナーで学んだ。家事に関する知識はあまりないので、主婦のマメ知識的な番組は新鮮でタメになり、今のところ飽きなかった。）
しょうゆとの割合だけで味を調節しているフシがあるが、レイにとってキレイな味ではない。

また、何か意見したところでどうせ聞き入れてもらえそうもないので、黙っておくことにしていた。

さらに、夜の外出も度重なるようになった。

「お前と一緒にグース力寝てたらカラダがなまる。」

と、いうことらしい。

全く食事をとらず、夜も留守がちになってしまった零に、レイは寂しさを覚える。

ちよつとだけ、不満も。

もつと一緒にいたいのに。

ゴハンだって、一緒に食べたいのに。

普通の、恋人同士みたいに。

そんなこと、思っても言えない。

不安だけど、これ以上彼が遠くなるのが怖い。

ねえ、好き？

なんて、ゼツタイ訊けない、けど。

「ねえ零さん、まえ言ってたよね？あたしのこと、少しは気に入って、くれてるんだよね？」

零が、口元だけで にいつと笑った。

「そうやって、俺の事だけ考えてるうちは、な。」

あいまいさの残る答えは、よけいに不安をあおる。

「じゃ、じゃあもつと…」

もつと好きになれば、少しは優しくしてくれる？

言いかけて、別の不安に襲われる。

重い、ってイヤがられたら。

追えばいつもかわされる。

いつか、かわすだけでなくそのままどこかへ消えるのではないか。
時折襲う不安が、今現実になってしまったら。

レイの表情を、零がうかがっている。

気付いても、すぐに笑ってゴマカすことができない。

不安が、大きすぎて。

お構いなしに、零が口をひらく。

「…もつと？お前にそんな余裕があったとは知らなかった。くくくつ。」

「余裕なんかないよ！ない、けど。」

いつでも精一杯、全力で、たぶん片思いをしている。

それでもきつと、まだまだずっと、もつとこのキモチは大きくなる。

もつと好きになる。

そばにいれば、いるほど。

好きだから、不安にもなるけれど。

「けど？」

零が促しても、想いをそのままぶつけるのは、まだ怖い。

「・・・だからあ、えと・・・んつと、あのね、ずっと、一緒に・・・いてね？」

迷ううち、これくらいなら言っても大丈夫であろう、きいてもらえそうなオネガイが口をついて出た。

零はニヤつくのをやめ、無表情でレイの顔を見つめてくる。

ずっと、は余計だっただろうかと、レイは少し不安になった。

うつすらと、零の顔に呆れが広がる。

「なんだそりゃ。今はそんな話じゃないし、前にも一緒にいてや

るって言ったよな？言ったよなあ？！」

プロポーズのようないやとりだった。

しかも返事はOK。

だが、零に言葉以上の事など期待できるハズもない。

おまけに彼は、かみ合わない会話に苛立ちはじめた。

それでも、不安はやわらぎ、レイは微笑んだ。

それを見ている零の表情は、なんとも言えないフクザツなものだった。

その日から零は、夜間の外出をぱたりとやめた。

命令ではなかったが、一緒にいて、という言葉に、彼なりに思うところがあつたらしい。

かといって、一緒に寝てはくれない。

深夜番組を見続け、少なくともレイが寝るまでは起きている。

もちろん、朝も。

寝なければ寝ないでも、あまり問題はないという。

「えー？そんな事いって、あたしが一生懸命オシゴトしてる間、おうちでお昼寝してるんでしょ？」

冗談半分にレイが言つと、零は言い訳もせず

「たまに。」

あつさり白状した。

「ズルい・・・お昼寝するなら夜寝てもいっしょだよ！」

「う・・・」

小さく、零がうめいた。

レイの言葉に押されたのか、その後は時々、一緒に寝てくれるようになった。

それでもあいかわらず、何も口にしない日は続いている。

好きだったケーキすら、全く食べていない。

ガマンしているだけで、本当は食べたいのだろう。

雑誌にスイーツの特集が載っていれば、ほんのわずかに悲しげに眉をひそめ、TVにケーキが映ればチャンネルを変えた。

毎日ケーキを扱っていながら、いつこうにそれに飽きず、むしろ大好きなレイは、この反応に少し困って、とうとうある日思い切ってこう言った。

「少しは食べなさいっ！」

たんっ、とランコントロールのお持ち帰りBOXを、零の前に置いて突然の命令に驚いた彼の顔には、一瞬後、それはそれは淡くかすかに、照れがうかんだ。

朱く、ではないが少し顔色が変化した、気もする。

嬉しいのか、それともやせガマンがバレて恥ずかしいのか、ちょっとレイにはわからない。

両方なのかもしれない。

初めて見る表情。

ほらね、と彼女は思う。

昨日よりもっと、今日の方がもっともっと好きになったよ、零さん。

10 彼、俺。

ぴんぽおん。

チャイムを鳴らしたのが誰か、ドアを開けなくとも零にはわかっていた。

セールスであれば居留守を使うつもりで、ドアの外まで感覚の伝わる範囲を広げたからだ。

セールスではない、が家事の手を止めてまで出る相手ではない。

「入れよ。」

ドアの外まで聞こえるほどの声ではない。

それでも、伝わる。

向こうも外で答える。

ドアのすぐ向こうに相手がいると思える、普通の音量。

「君の部屋じゃないだろ？出て来い。」

多少のイラ立ちを含んでさえ、なおも柔らかく響くスズキの声。

ドアを隔てて、広げた感覚が零に言葉を運ぶ。

「入りたくなきゃそこで話せ、忙しい。」

それが伝わるか伝わらないかのうちに、スズキは鍵のかかったドアを通り抜け、ベランダに居た零の後ろに立つ。

「文句言いに来たのに、なんで僕が君のワガママ聞かなきゃいけないんだよ！」

「文句をいいにきたのは、お前の“勝手”だからじゃないのか？」

頬をピンク色に染めて頭から湯気を立てているスズキに対して、

零は眉一つ動かさず、流れる水よりさりとした答えを返した。

「かつ・・・てなのはいつも君だろ？！」

文句を言われても、零は家事の手を休めない。

「そうカッパするな、アタマ冷やせ。」

言葉とともに、零は肩越しに持っていたモノをスズキの顔へ投げつけた。

ぺしゃり、と音をたててソレは彼の頭全体に軽く巻きつく。

「つめたっ…何、こ」

はずしたソレが何だかわかった瞬間、スズキは絶句した。

「・・・」

表情をなくした彼は、今どんな顔をしていいかわからないに違いなかった。

白地にピンク色の刺繍。

スズキの目には入っていないが、タグには「D・75」と記されている。

普段はレイの胸に装着されているものだ。

零はさつきから、洗濯物を干していたのだった。

「これ・・・」

か細い声で言って、零にソレを返すと、スズキは一言いい残して外へ出た。

「終わったら、呼んで・・・」

零はそれを聞いて、吹き出す。

「ぶふっ」

こらえるということ、彼は全くしなかったので、スズキはマトモにその声を背に浴びたが、アタマの中はそれどころではない。

抵抗する気力もないその姿も零には可笑しく、高笑いはいしばらく響き続けた。

それもおさまり、数分後、よりかかっていたドアが開き、スズキは転倒しかける。

「入れば？」

そのドアの隙間から、ぬっと零が顔を出す。

「君が出て来いよ。」

我に帰ったスズキの声は、多少不機嫌だ。

「スネるな。紅茶、好きだろ？」

「入れてくれるの？」

驚いた顔で、スズキは聞き返す。

「ああ、入れ。」

零は、さらにドアを大きく開き、スズキを招き入れた。

「……じゃ、おじゃま、しまーす。」

スズキは、戸惑いながら中に入った。

ティーバッグでカンタンに入れた紅茶が、可愛らしいカップに入ってスズキの前に置かれた。

「あ、いい二オイ。アップルティー、かな？」

すっかり機嫌を直したスズキが、頬をゆるめてそうきいた。

「ああ、レイが気に入っててな。カップもあいつのなんだが、構わないだろ？」

くくく、と意地の悪いことこの上ない顔で零が笑った。

「えっ、いや、僕は……」

さっきのことを思い出し、困った顔をするスズキ。

「くつくつく。」

零がまた笑う。

「何だよ。」

さすがにスズキも少しムツとする。

「キレイに洗ってあるから、安心しろ。」

まだ笑ったままの零の顔は、とても愉快そうだ。

「わかってるよ！別に僕は……」

その後なんと言っていていかかわからず、スズキはカップをガツとつかみ、一気に紅茶をあおろうとする。

「ぶうえあづあつ……！」

まだ熱すぎたらしく、盛大に噴き出しながらスズキは叫んだ。

「温度考えろ、ばか。」

零は呆れた目をして言うと、立ち上がった。

「だって君が」

「ちゃんと拭いとけ。床は汚してないだろうな。」

涙目で言い返そうとするスズキに、零はキッチンからフキンを投げつけた。

無言でテーブルを拭くスズキに すっかり満足した零は、低位置に座りなおしながら今気づいたように用件をきく。

（続）

続き

「そーいやお前、何しに來たんだ？」

「君が言うかあ？！」

ハナシをさせてくれなかった張本人の言い草に、スズキのガマンも限界を迎えた。

「もーアタマきたっ！」

テーブルの横にまわりこみ、零の隣に來ると肩だの背中だのをどつすどす叩く。

ぶつとい腕の攻撃力は、決して本人の顔つきや性格のようにヌルくはない。

「うおっ、重っ、わかつ、たっ！きくっ、からあ！」

振り下ろされるたくまし過ぎな腕を、あまりにもきやしゃな零の手が、なんとかキャッチすると、やっとそのささやかな暴力行為は止んだ。

「…なんで殴ってる方が半泣きなんだよ。」

「君が、なんつつつにもわかつてくれないから！」

「何をだ？そこを言わなきゃわからんだろう。」

うつかりいらんこと言う零。

「だからっ！言おうとすると君がっ！」

押さえる手を振り払って、再度バイオレンスモード突入。

「聞く！今度は、ちゃんとっ！な？」

攻撃を受け止めつつ、真剣な声色でなだめてやると、やっと暴力ループから抜け出すことができた。

「じゃ、ちゃんときいてよ？」

のそのそ元の位置に戻りながら、スズキは釘をさした。

「…レイちゃんがね、今後あまりランコントロールに來ないでほしい、って。」

「なんでまた。」

うつむいて話すスズキに、頬杖をついた零が興味もなさそうに合の手を入れる。

「それが、僕も気にしてはいたんだけど、その、周りが、うるさくて、ね。」

その先をいいにくそうに、スズキはさらに下をむく。

「うるさい？」

いぶかしげに、零が問う。

「…前、いわなかったっけ？みんなが、僕とレイちゃんを…くっつけようとするって。」

「ああ」

そういうことが、と零は納得した声を出した後

「勝手にくっつきやいいじゃねーか。」

と言つて笑った。

「やめろよ、そんな事思つてないクセに。」

スズキの声は、少し怒っている。

「別に構わない。お前だってあいつの為ならどうなっても構わない、だろ？」

挑発的に零が笑顔をうかべると、スズキは嫌悪感をむき出しにした。

「僕はケンカしに来たんじゃない。なんでちゃんと話が聞けないかな、君は。あのコのことだから？」

「俺が聞いてないんじゃないかって、お前の話し方がヘタなんじゃないのか。」

しれつと言いつ返す零にカツときかけたスズキだが、言い返すことはしなかった。

これでは永遠に話が進まないからだ。

零のペースには、さっきさんざん振り回されたばかり。

キヤツキヤしてるようできて、スズキもオトナだった。

「それは…悪かったよ。でも、とにかくこのままじゃ、僕はランコントロールに行けないし、みんなレイちゃんに新しい彼氏候補を次々

紹介しようとするし、君にも僕にもよくないと思うんだ。」

「俺には関係ないだろう。」

「あるでしょ。もしその候補の中に、レイちゃんのタイプで、しかもすっごい優しい男の子が現れたらどうするつもり？」

「は？」

「とられちゃうよ?!」

ぐいつ、とスズキが顔を近づけると、頬杖をやめて零は一瞬身を引いた。

「あいつは俺を」

「人はね！変わるよ。」

零の反論にさらに強く言葉をかぶせるスズキの目つきは、妙に真剣だった。

零は口をつぐむ。

「レイちゃんに限って、そんなことないと思いたいけど、それでも可能性はゼロじゃないと思わない？」

「……」

「それで、僕考えたんだけど。」

何も言わないままの零の態度を、納得したものと取ってスズキはみずからの思いつきを話した。

「俺が、ランコントロールに？」

疑問を含んだ零の声に、スズキはうなずいた。

「そ。お客さんとしてでもいいし、同居人として迎えに来た、でもいい。イヤなら彼氏だなんていう必要もない。あ、ただしちゃんと大人バージョンで来てよ？」

ここで、軽くスズキは零の全身に視線を走らせ、笑った。

零は表情を変えないが、それは何も感じないのと同義ではない。

「“零”のことはみんな知ってるはずだし、レイちゃんの態度でわかってくれると思う。」

「……結局彼氏アピールだろ、それ。」
だるそくに、零。

「だから、イヤならそこまでしなくても、レイちゃんの好きな人が、彼女の手の届きそうな距離にいるってことだけでもわかればいいんだって！」

スズキは熱心に、というより必死に零に語りかけた。

「あいつは調子に乗るとウザいんだ。」

零はだるそうな顔から、イヤな顔に変わり果てている。

このふんぞり返りっぷりには、スズキも眉をひそめた。

「たまには喜ばせてやれよ、家事だけじゃなくてさ！」

「家事をなめるな。」

どっちを向いたプライドなのか、表情をひっこめた零の目は鋭い。

「手抜きでしょ!？」

スズキがぴしゃりと指摘すると、心当たりに

「う」

と、零はのけぞった。

勝負あり。

「ねえ、そんなにあのコ喜ばすのイヤ？」

悲しげな表情のスズキに、零は面倒くさそうな顔をするだけで、

何も言わない。

「…とにかく、よろしくね。頼んだよ！」

スズキは勝手に話をまとめると、につこり笑い、残りの紅茶を飲み干した。

「喜ばせる、か。」

スズキの使ったカップを片付けながら、零が薄く笑みを浮かべたとき、スズキはもうその場にいなかった。

(続)

続き 2

「いらつしやいませ、何名サマでしょう?」

レイはメガネをかけた青年に、愛想良く笑いかけた。

「ひとり。」

からみつく低い声には、聞き覚えがある。

レイは改めて、相手の顔を見た。

「えっ」

思わず漏れた声に、相手はただ、ぬめりと湿り気のある笑いを浮かべた。

目の色も、彼以外にまずありえなかった。

「零、さあん?」

大きなレイの声で、店内に居たウエイトレスや、数名の客が振り向いた。

“零”が“誰”であるか知らない客たちは、そこにいたごく普通の青年に対する興味をすぐに失い、自分たちの会話や、いままでしていたことの続きに戻った。

ウエイトレスたちは、仕事に戻るふりをして、チラチラ零を盗み見る。

金が無くてレイのところに転がり込んだあげく、急にいなくなつたサイテー男“零”。

それが、レイの周りの者が知っている“零”。

ただし、レイは事実をほとんどそのまま話ただけで、恨み言らしきものをこぼしたことは、ない。

すべて丸くおさめられるほど、ウソが上手くないだけだ。

その零が、久々に姿を見せたことは、ウエイトレスたちの興味を充分ひきつけた。

零を盗み見ながら彼女たちは、みんな同時にほぼ同じ感想を持つ

た。

コイツ、こんなヤツだったっけ？

それもそのはず、零はちょっとした擬態をしていた。

ランコントロールの面々が知る、そしてレイの知る“元々の零”は、青白い顔でいやに赤さの目立つ薄い唇をして、長い黒髪を不気味に振り乱した恐ろしく背の高い枯れ木のような男。

だが今 来店したこの男は、どこにでもいそうな、大人しそうな青年で、背も人並みなら、髪も首筋があらわになるほど短く、振り乱しようも無い。

確かに肌は白めだが、顔色が悪いというほどではない。

とにかく、普通だった。

なんなら、優しそうだった。

そんな疑問に満ちた視線を送るレイ以外のウエイトレス達に、零はかけていた眼鏡をはずすと、挨拶がわりに微笑みかけた。

もちろん、視線に込めた力で、彼氏像としてありえない以前の零を、思い出せなくなってもらうためだ。

メガネで彼の力が遮断されるワケでもないが、かけているほうが視線や目の色を強く意識されずにすむ。

相手は零に怪しさも恐怖も感じないから、彼を人間として認識し、無闇に影響をうけづらい。

子供の姿の零が怖がられないのと、同じことだ。

行く先々で怖がられ、みんなが彼のいいなりになつては“彼氏”として成立しない。

人間にはない要素を、できるだけ隠して擬態し、レイの“彼氏”のできあがりというわけだ。

瞳が光らないよう、気を使いながら微笑む。

これで零は、彼女たちにとって“名前くらいしか知らない、レイが好きになつたらしい男”になる。

その上で、優しい彼氏を演じてみせる。

レイには、期待させておいて二人に戻ればいつもの零という肩透かし、周りには、任せておいて安全な彼氏としての認識を植え付けられる。

これで、他の男のとの縁は完全になくなる。

スズキから文句を言われるスジアイもなくなり、レイが零以外を気に入ることもない。

カンペキだ。

何より、優しい顔でレイをからかうのは面白い。

零はそんなことを考えていた。

向こうだつて何度もダメされているわけだから、気付きはするだろうが、何も感じないわけではない。

しかし ただダメせば怒らせるだけだが、今回は“スズキのため”というイイワケがある。

人間は、誰かのため、というシチュエーションに酔いやすい。思い切りレイをもて遊んでやれるこの機会に、それを有効利用しないテはない。

リアルタイムで進行中の零の考えなど全く知らないレイは、席に案内しながら小声で話しかけてくる。

「れ、零さんどしちゃったの？何で来たの？あ、イヤとかじゃないんだけど、でも何で急に？」

この擬態（変身）にも、急な出現にも予想通り慌てまくっている。そんなレイを見る零が浮かべている笑顔は、作り笑いではなく、心底たのしくて出たものだった。

「それはな」

レイの肩をつかむと、零は彼女の耳に口を寄せた。

「お前の“彼”を、ここの連中に見せるためだ。スズキに“迷惑”がかからないようにな。」

なるほど、と目を大きくした後レイはもう一つだけ確認する。

「お芝居？」

それに対して零が見せた微笑は、恐ろしく優しかった。

「もちろん、スズキのためだ。」

レイはほんの少し眉を寄せ、残念そうな顔をしたが、すぐに納得し笑顔を見せた。

いまさら何を期待したのか。

レイが一度奥へひっこむと、少し間をおいて別のウエイトレスが水を持ってきた。

（続）

続き 3

金髪タテロールのツインテール、ミミちゃんこと宇佐美瑞希。

元々この客（？）だった零のほうは、彼女たちの顔を知っているし、頼みもしないのに普段から家で彼女たちの話をさんざん聞かされ、誰が誰かはじゅうぶん把握していた。

ミミは、さりげなく“零”をまんべんなくチェックして去って行った。

オーダーをとりにきたのは、日向寧々子、通称ネコ。

ショートカットの元氣少女で、あまりの活発さに男の子とまちがわれたこともあるらしい。

こちらはストリートに話しかけてくる。

「はじめましてー！ “零”さんですよネ？」

あたしネコって言うんですけど、よろしく。

で、零さんて、確かレイと一緒に住んでたんですよ？」

え彼氏彼女でいーんですよね？」

ウエイトレスと客、という立場以外で今までネコと接したことはない零だったが、レイの話からネコがよくしゃべるとは知っていた。それでも。

ハンパねえ……。

質問攻めに遭い、零の顔はひきつりかけていた。

ネコの質問はまだまだ続いていた。

「で、ぶっちゃけレイのこととんくらい好きですか？」

デートとかってどこ連れてってててるんですか？」

てか何してるヒトなんですか？」

あ、トシっていくつですか？」

いつから付き合ってるんですか？」

前にウチの店来てましたっけ？」

あ そーいえばご注文なんでしたっけ？」

「エンパイアシヨコラと、モカで。」

多すぎる質問はスルーで、零は何とか笑顔を作り注文だけをすませた。

ネコのほうも言うだけ言う満足して、オーダーを復唱すると去って行った。

ケーキとコーヒーを運んできたのは、亀田結花里、“ゆつくりカメちゃん”。

少し…だいぶぼっちゃりしているが、まとう雰囲気がとても優しく、ゆつくりした動作と話し方も、接する相手に癒しを与えてくれる。

零には効果もないが。

「おまたせいたしましたあ」

品物を置いた後、丸い顔についた丸い目で、じつと零をみつめてくる。

零は、とりあえず微笑んだ。

「何か？」

問う彼に、カメちゃんは少しアタマを下げた。

「レイちゃん、よろしくお願いしますね。」

「…どうも。」

レイよりいくつか年下だと聞いていたが、まるで姉の態度だ。

改めて零は、我が主のしょーもなさを思った。

お高いランコントロールの、さらにチヨコレートの中で一番高いケーキをじっくり楽しむと、零はレシートを持ってレジの前に立った。

気付いてレジに入ったのは、御手洗 翔。

レイの幼馴染で彼女を追いかけてランコントロールへ来た青年。

が、恋愛感情は無いようで、今のところ零も彼を何とも思っていない。

「2,050円です。」

普段キッチンで雑用をしている彼は、愛想笑いもなく言った。

“普通のヒト”らしく財布から出した金を置くと、零はメガネを

はずした。

「翔くん？」

呼ばれて顔をあげた翔の目が、ともに零の視線にさらされる。人間には理解できないチカラを含んだ、視線。

意識や記憶に細工をされれば、自我を保っている限り誰でも違和感を覚え、表情にわずかなりとも影響する。

つまり、一瞬フシギそうな顔になるのが普通だ。

それが、翔は違った。

眉をひそめ、不審者を見る目つきで零を見つめ返してきた。

零は慌てることなく、メガネのレンズに軽く息を吹きかけ、ホコリを払う仕草をしてみせる。

その上で、メガネをかけなおすと、敵意が無いことを示すために、笑った。

何か言いたそうな顔で、翔は黙ってレジのキーを打ち、清算する。レイが言うところによると、この翔はオバケが見えるらしい。

つまり零たち、人外の持つ力を意識して感じ取ることができる。

以前そのせいで女の霊に憑かれた翔を、零は“なゆた”の姿で助けたこともあった。

もつと強い力で記憶を操作しても良かったが、思いなおした。

この翔は、あまり強引なタイプではないし、レイを姉（たびたび妹）のように慕っているから、おかしい男を紹介することもないだろう。

出てきたレシートを手渡されるときに、零は先手を打った。

「翔くんて、オバケ、見えるんですよね？」

相手は黙っている。

零は警戒に気付かないフリで続ける。

「俺、そういうの引き寄せやすいらしくて、時々取りつかれたりしちゃうんですよね。」

気弱そうに苦笑してみせると、相手は不機嫌な顔つきになる。

「もう、黙っててって言うてるのに、レイさんは。」

レイへの不満を口にした。

「どうやら、零への不信感はぬぐえたようだった。

さらにうまくいけば、今までの不都合な事実はすべて、その辺でとりつかれたオバケのせいになるだろう。」

「大丈夫、俺は誰にも言いません。でも、時々相談させてもらっても、いいですか？」

唇の前で人差し指を立ててから、なるべく人が良さそうに見える顔で、零は笑った。

「うなずいて、翔も少し笑った。」

零はついでに、翔にも“良い彼氏”をアピールしておくことにした。

「レイ、そろそろ上がりですよ。もう来るかな？」

「そうですね、裏口に回ってもらえば会えると思いますよ。」

「ありがとう、と笑い零はランコントロール従業員用通用口へ向かった。」

（続）

続き 4

勝手にドアをあけると、少し奥にド金髪の中年男が見えた。

ランコントロールの店長、五月女^{さおとめ}だ。

ここのキッチンを仕切り、ケーキもほとんどは五月女が作る。

全て一人で、というわけでもないのだが、いない日は全てのメニューの仕上がり微妙な影響がでて、客の中にはそれに気付くものもいた。

五月女が零を見つけ、声をかける。

「ああつ、お客さん、こっちから入っちゃだめだめ。表まわってね。」

「あ、違います。俺、レイを迎えにきました。」

「あー、彼氏さんかあ？」

五月女は、油断しきった笑顔を見せる。

見るからにダメしやすそうな男だ。

「俺、零って言います。ゼロって書いて、れいです。」

”彼氏の零”を印象付けるため、自分から名乗る。

会ったことはない男だが、零の評判くらいは知っているだろう。

零がメガネをはずそうとすると、予想外の反応が返ってきた。

「へえ、苗字は？」

五月女は、まだ笑っていた。

何気ない一言に、零は一瞬凍りつく。

今まで、上の名前などきかれたことがなかったからだ。

下の名前がレイと同じ音だから、上も気になった。

きつとそんなところだろう。

こんな何でもない質問で、あまり間をあけるのは不自然だ。

零はとっさに、よく聞くありふれた名前を口にしていた。

「サトウです。」

髪も黒いし、顔のつくりもそんなに濃くはない。

瞳はカラーコンタクトだとも言ってしまうば、スズキほど不自然ではなかった。

「へー、サトウくんか。待ってな、レイちゃん呼んでやるよ。」
にこにこ五月女は奥へ行こうとするが、今思いついた名前をレイが知るはずがない。

零は内心慌てながらも、平静を装って止めた。

「いえ、すぐ来るハズですから。あと、俺のことは零って呼んでください。」

「なんで？」

悪気なく聞き返してくる、五月女の鈍感そうな顔が零には腹立たしかった。

イイワケを考えなくてはいけない。

「自分の苗字、キライなんです。すごく平凡だから。」

クチからでまかせだが、五月女は笑って同意した。

「あー、あるよなあ。オレもだよ。五月女、っていうんだけど、オトメって響きがキライでさー。」

だからオレは、太市って呼んでくれ、零。」

「はい、太市さん。」

取りつくろえた安心感も手伝って、零は自然にほえんだ。

また記憶を操作しそびれたが、この男にもその必要はなさそうだった。

そこへ、ちょうどよくレイがやってきた。

「あ、零さあん」

あのまま帰ったと思ったらしく、意外そうな顔をしている。

「おつかれさま。」

優しく零が笑いかけると、レイは誰が見てもトキメキてんこ盛りのとろけそうな表情をうかべた。

五月女が不器用に気を利かせる。

「おっ？オレ、お邪魔？ははっ、じゃあな二人とも。」

「あ、おっお疲れ様でした！」

その声で正気に返ったレイを外へ追い出し、五月女は笑いながらドアを閉めた。

ボタン、と音がした瞬間 零の顔から笑顔があとたもなく消え、レイは残念がる。

「ああっ、 “優しい零さん” が終わっちゃったー。」

それに対して零は、特に不服そうにするでもなく無感情にはき捨てる。

「なんだそりゃ。ほら、帰るぞ。」

さっさと歩き出す。

「はあい・・・でも、ホント変に優しくて、ドキドキしちゃった。あは。」

嬉しそうにレイは笑った。

「嬉しそうにしているのか？これでお前に本物の彼氏とやらはできなくなった。永遠にだ。」

言いながら、何かおかしい、と零は思う。

「え、それって、なんか。」

夢見がちにうるむ、澄んだ瞳。

コイツが見ている俺は、本当の俺じゃない。

俺が何をしてきたか、知らない。

自分をつけまわしたストーカーが、誰に、どんなふうに殺されたのかも。

たとえば血まみれの俺を、コイツはどんな目で見るだろう？

そんなことを考える、俺は、おかしい。

本当の俺じゃない、俺。

その俺に笑いかける、レイ。

からかって、だまして、楽しいハズなのに、楽しくない。

気分は口調に影響し、必要以上に突き放した言い方になる。

「そういう意味じゃない。一生独身決定ってことだ。」

レイは眉をひそめ、スネた表情になる。

「・・・零さんがいてくれれば、いいもん。」

「俺は彼氏じゃない。」

人間ですらない、お前たちの敵だ。

お前たちを殺すこの手に、本当の俺に、お前は抱きしめられたいとは思わないだろう。

「今は、そうかもしれないけどお。」

存在に隔たりが、ありすぎる。

「今も、これから、ずっとだ。」

悲しい顔をするレイから、俺は目をそらす。

「俺は、ヒトじゃないんだからな。」

「知ってる、でもいいの。」

すかさず反論した彼女の心は、俺しか見ていない。
はつきりそれがわかる。

こんな時、ふだんなら感じるハズの優越感が、今はやってこない。
かわりに訪れた、胸の中のもう一人の自分を、誰かが抱く感覚。
その腕は刃。

切り裂かれる。

流れ出していくのは、血じゃない。

リアルじゃないくせに、リアルすぎる痛みが幾重にも勝手な軌道
をとって俺を貫く。

俺を抱き、刻むのは誰だ。

俺自身とも、見知らぬ誰かとも思える。

寂しく笑うレイの笑顔が呼んだ、得体の知れない俺の一部。

11 記憶の影

眠っている。

あの日から、ずっと。

時は、僕たちのなかで。

俺は それを 解き放つ

ふたたび動き出した時は、君を苦しめるだろう。

僕は…君を…苦しめる。

君は…僕を…その時、どうする？

もう大丈夫だ、と言った零の言葉を半分だけ信じてランコントロールへ行った僕を迎えたのは、いつもよりさらに明るいレイちゃん的笑顔と、支離滅裂なノロケトークだった。

僕の予想よりずっと零はうまくやってくれたらしく、ネコちゃんには

「残念ですけど、あきらめるしかナイですね。」
と、なぐさめられた。

これで堂々とランコントロールにも行けるし、もしかしたらレイちゃん達は今までよりもっとうまくいくかもしれない。

っていうのは、さすがに甘いかもしれないけど。

それでも、レイちゃんの嬉しそうな顔を見た僕は、零をほめてあげたくなった。

お礼を言うほうがいいのかな。

でも、悪魔ってほめたりお礼を言うの、どうなんだろう。

今までも、だいたい最後は叱るか言い合いになるか、ってパターンばかりだったし。

そんなことを考える、というより悩みながら歩いていると、小さ

な女の子の聲が耳にとびこんできた。

「なーゆっ！ シュラバごっこ とちゅうだよー？」

数メートル先に、呼ばれた彼は たたずんでいた。

女の子の聲がする方でも、僕の方でもない、どこかを見て。

「なゆくん？」

声をかけると、やっと我に返った様子でこちらを向いた。

「お前か。」

「どしたの？ 呼んでるよ、女の子が。」

声の主であるう、小さな女の子が駆け寄ってきた。

「なゆー、どしたの？」

可愛いが気の強そうなその女の子を無視し、なゆ こと零は僕をみている。

「今、レイに似た女が」

「レイちゃん？ 店にまだいるハズだよ。」

「あいつじゃない。あいつより背もデカいし、髪も長かった。」

どこかぼんやりとした表情で、ぽつぽつと話す零は、記憶をたどっているかに見えた。

「それって、似てくない？」

「似てるんだ。雰囲気、みたいなものが。」

「・・・なに、それ。」

ぼんやりしすぎて、いまいち伝わってこない。

零にくつついている女の子は、困った顔で話が終わるのを待っている。

きつと僕も今、あんな顔をしているのだろう。

「・・・なんでもない。じゃあな。」

きびすを返した零を、僕は呼び止めた。

「あ、待つて待つて、レイちゃんの件、アリガトね。」

お礼くらい言わないと。

と思つたのだが、返事は無愛想そのもの。

「ああ。」

やっぱり、お礼言われるのとかキライなのかな。

無表情はいつもの事なのに、僕は焦って話題を探した。

珍しく協力的な零に、無意識で期待したのかもしれない。

彼と、僕たちとの関係改善を。

「おかげでさ、あのストーカーもいなくなったよね。」

たまたまかもしれないが、いつもレイちゃんを変な目つきでジロジロ見ている、気味の悪い男に今日は出会わなかった。

彼氏がいるとわかって、あきらめたのかもしれない。

零も気にしていたし、それが今度のことの成果であれば、悪い気はしないだろう。

ところが、零は本当に、僕が思う以上によく動いていた。

「ああ、アレなら殺した。」

「え・・・」

すべてがうまく回り始めた。

そんな僕の幻想を、目の前の悪魔はたった一言で、無表情に打ち砕いた。

そうだ、思い出した。

思い出さなきゃいけないくらい、忘れていた。

僕の前に立っているのは、よく知っているはずで、だけど理解なんか到底できない、悪魔。

そして、僕たちは友達なんかじゃない。

どんなに、願っても。

僕だってもう人間ではないから、かなり長い時間を生きて、色んな経験をした。

彼が当然のこととして人を殺すことも知っていたし、僕に絶望を与えたいがために、それを詳しく話して聞かせることも一度や二度じゃなかった。

なのになぜ、忘れたりしたんだろう。

零の声が、僕を突き刺す。

「自分でけしかけておいて、なんだ。まさか、そこまでしないだ

ろうなんて甘い事考えてたんじゃあるまいな？」

その通りだった。

そこまでするなんて、思わなかった。

だけど、当たり前だった。

悪魔なんだ、零は悪魔なんだから。

僕の考えは、いつでも甘い。

いつも、手遅れになってから思い知らされる。

あの時だって。

「ねー、つまんない。」

女の子に手を引かれるまま、零が去っていく。

僕は、動けない。

進めばいい？

戻ればいい？

何もかもを修復するには、どっちへ行けばいいんだろう。

レイちゃんと居て、彼女に愛されて、彼もまた彼女を大切に思い始めて、それでもまた零は、人を殺した。

愛も、優しさも、ふりそぞぐ笑顔も、彼を変えられない。

彼は、悪魔だ。

悪魔と人間で、幸せな結末なんてありえない。

やっぱり、ダメだったんだ。

最初から、うまくいくわけなかった。

今度も、また。

目の前が暗くなり、僕は手の平で顔を覆った。

このカラダには、本当はもう血なんて流れていない。

なのに、さぁと血の気が引く、冷えて行く感覚がした。

取り返しのつかない絶望に、自分が沈んでいくのがわかる。

「久しぶりだね。」

誰だ、僕の名を呼ぶのは。

顔を上げた僕の前にいたのは、そこに居るはずのない、懐かしい笑顔。

そうだ、君以外にその名を呼べる者は・・・。

「どうして、きみが」

彼女が、僕を抱きしめた。

「もう苦しまなくていいんだよ、全部、全部忘れてしまったアイツが悪いんだから。」

その言葉に、救いを求めるようにすがりつき、僕は 目をとじた・・・。

（続）

続き

「ブレイブのヒトがね、無断欠勤もう三日目って、心配してても手が足りなくなっちゃうから、新しいヒト探そうかって。」

帰ってくるなり、レイは自分自身ひどく心配そうに、スズキがいなくなった事を話し始めた。

零は、眉一つ動かさない。

「そうか、大変だな。」

一応、話を聞いていた事だけは伝えておこうと、返事はする。

その態度に、レイが軽くキレた。

「何ソレ、心こもってない。心配じゃないの？」

零は相手にしない。

「あいつはガキじゃない。」

そう言う彼の見た目は子供だが、面白い場面でもなく、レイはさらに言いつのる。

「だって無断欠勤だよ？もう三日なんだよ？いるのに仕事しないことはあっても、来てないなんてスズキさんらしくないよ、何かあったんだよ！」

一人焦り始めたレイに、零はなかば叱り付ける調子で返す。

「あつたら何だ、俺が何かしなきゃならないのか？」

「友達でしょ？」

「違う。」

「ちがくない！だって零さん、嫌いなら相手にしないもん。」

レイは顔を赤くして、目をうるませている。

対する零は、声にけだるさがにじむ。

「あつちが突っかかってくるからだ。」

「もういいよ、じゃ勝手に意地張ってなよ。あたし、ちょっと探しに行ってくる。」

レイは、何を言ってもダメだと思ったらしい。

「メシは？」

「あとでいい。」

玄関へ向かうレイは、零を振り返ろうともしない。

「どこを探す気だ？」

靴をはくレイに、零が問う。

「いろいろ！」

珍しく、レイの声が苛立っている。

「俺が行く方が早い。」

「え？」

ドアノブに手をかけたレイが振り向くと、もう零の姿はそこになかった。

気温の下がり始めた薄闇は、気体となった零自身が世界を覆っているようだった。

まさしくそんな具合に、零はほどこいた自分を意識できるギリギリの範囲まで広げ、暑苦しくて面倒くさい、よく知る気配を探す。

こうして探さなければ、スズキが実体をほどこいていたらレイたちにはわからない。

ヒトや動物以外のおかしな気配はいくつかあるが、覚えのあるものではなかった。

気付かれる前に一瞬でその範囲から移動する。

零たちの部屋の周囲にも、ブレイブ周辺にもいない。

なら、あそこはどうだろう。

零はさらに移動した。

夜とは言っても、町には明かりがあふれている。

その中で、ゆっくりと、よく見なければわからないほど、ほんのわずかに明るさのトーンを変化させている店があった。

明るくなったり、薄暗くなったり、しかしその差は、気のせいと思えるほど。

ランコントロールだった。

そこに零は、スズキの気配を感じていた。

少し違和感のある、それでもよく知っている気配を。

おそらくスズキは、零と同じように気体化しているのだろう。

目標を探り当てると、目立たない場所を探して零はいつもの姿に戻る。

彼は、今見ている光景に疑問を感じていた。

なぜランコントロールは、明るくなったり“暗くなったり”しているのかと。

零やスズキは元々実体のない、思念だけが集まってできた生き物だ。

食性の違いから、“天使”や“悪魔”と呼ばれ、彼らが気体としてただよっているとき、その場所の明るさ、暗さに影響をおよぼすことがあった。

天使がいれば明るく、悪魔がいれば暗く。

わかりやすいが、人間は気付かないことがほとんどだ。

したがって、ここにスズキがいるなら、ランコントロールは他の場所より明るく見えなければおかしい。

こんなふうに明暗をいつたりきたりしているのは、“天使”の存在自体が点滅しているのかもしれない。

“天使”の寿命というのはこんなふうに、電球みたいに切れるのだろうか、と思いながら零は呼びかけた。

「スズキ？」

ごく細かい粒子の打ち上げ花火を逆再生して、光が零の前に集まる。

それが消えると、そこにスズキが立っていた。

（続）

続き 2

笑っていない。

人目がありすぎる中で、派手な超常現象を起したスズキに、零が驚く。

「お・まつ、こんな所で何するんだ。」

彼らの周囲にいた人々が、いつせいにスズキに注目し、ざわめく。「何？気のせいだ。」

冷ややかにスズキが言うつ、彼を中心に光の円が広がりながら淡く駆け抜けていく。

その銀色の光が走った人々は、急にスズキから関心を失った。何か見た、が。

気のせいだ。

とでもいうように。

こんな話し方をする男ではない。

こんな力の使い方もしない。

怒っているのだとしても、零の知るスズキはもつと暑苦しかった。何の表情もない顔、敵意しか感じない話し方。

いつか、甘えるなと突き放された時でさえ、こんなに遠くは感じなかった。

「スズキ、お前どうかしたか？」

急に姿を消したことよりも、彼の変わりようのほうに気がかかった。

周囲にはわかることなく、光からヒトに変わったり、必要かそうでないかに関わらず、あたりにいた人間全てに無差別に“何も見なかった”暗示をかけたり、チカラの無駄遣いぶりを見れば、存在の危機はとりあえずなさそうだった。

だが、それ以外はすべてがどうかしている。
あたたかみのある青ではない、銀色の光も。
スズキは答える。

「いいや、今が正常なんだ。どうしてもっと早」

淡々と吐き出された言葉の途中、零が軽く後ろへ跳ぶ。

「く、こうしなかったんだろう。悪魔」

スズキは話し続けている。

零のいた場所には、銀色の大きな斧が突き立っていた。

柄にあたる部分はなく、刃の伸びる先をだどると、スズキの背につながっている。

「と人間なんて愛し合えるハズないじゃないか。だって、あの時もそうだったんだから！」

路面に突き立っていた斧が生き物の動きで抜けると、そこに傷はない。

スズキの背でもう一つの刃と対をなすそれは、広げると両方で3m以上はありそうだ。

零は、目を見張った。

天使たち特有の、羽毛をかたどった光でできた翼を、スズキも持っていたハズだった。

それが今は、ギラギラ光る刃に変わってしまったている。

零は混乱した。

天使ではなくなったスズキに。

彼から殺意を向けられることに。

「なんだ、なんなんだ?! 何だそのハネ! それに何の話をしてる?
」

「じゃ僕も訊こう。」

いいながらスズキが跳んだ。

銀翼が伸びて零の背後に刺さり、そこに向かって一瞬で縮む。

「スズキって、誰だ?」

そのスピードと、スズキのパワーが合わさった拳を、零はギリギ

リ顔の前で受け止めた。

受けたこぶしを、逆に握り締める。

短かった髪が、一気に伸びて無数の束をなし、スズキに襲い掛かった。

「ふざけるな。」

強く言った零の髪は、瞬時にスズキの全身をからめとった。

銀の翼も、それを断ち切れず縛り付けられる。

「このままぶち殺してもいいんだぞ。」

零をにらみつけていたスズキの姿が一瞬光り、次の瞬間にはそのカラダは髪の手束から抜け出ていた。

スズキは言う。

「お前こそふざけてるんじゃないか？悪魔。」

スズキが半身をひねって、一歩踏み出す。

その勢いのままに、背の銀翼が零に向かって射出された。

回転しながら高速で飛んでくる斧は、零にとって動きが読めないほどではなかった。

零はそれが自分を通過する瞬間にあわせ、軌道部分の自分をあいまいにぼどく。

空気を切ることでできないから、それでかわせたハズ、だった。

「んっ?!」

零がうめく。

「僕は、本気だ。」

スズキが、低く言った。

刃が空気を切れなくとも、刃のまとう殺気はある種の“空気”としてそこに働きかけることができる。

斬ることが、できる。

零を斬り付けた斧は、ブーメランのようにスズキの背に戻った。

零は、まだ状況がのみこめなかった。

「今さらか?!もうかなわんと知ってるだろう?それとも俺に殺されたいのか?」

脅し文句のようであり、受身に回っている今は強がりにも聞こえる。

しかし、どちらでもない。

ただ、疑問だった。

零が本気でそうしようと思えば、スズキを殺すのは難しくない。

スズキは急に動きをとめ、翼を収めた。

ゆっくり歩み寄る。

零は、少し警戒しながら、それでも危険は感じていなかった。

スズキは零のすぐ前で止まると、彼の両肩にそれぞれ手をおく。

チカラがこもる。

「できないクセに。」

歪んだ顔で笑い、全身から殺意をにじませた。

（続）

続き 3

「っ！」

零はわずかに眉をよせた。

肩が焼ける。

スズキの掌から直接伝わる殺意は、物質的な零の体ではなく、実体を持たない彼そのもの、存在自体を否定し、反発し、それを消そうとする。

スズキがしていたように、一度カラダをほどいて逃れることは、今はできなかった。

逃げるとすれば、相手の殺意にとらわれている部分を捨てることになる。

普通の生き物で言えば、その部分の肉をこつそりこそげとられるのと同じだ。

それよりは、力ずくで引きはがす方がはるかに損害は少ない。

痛みを感じた怒りのまま、零は背から翼をくりだした。

零の頭越しに伸びた翼が垂直にスズキに振り下ろされる。

が、彼を斬ることはない。

翼が、スズキの肩に食い込む。

「くっ！」

刃といえるほどの鋭さはなくとも、速度が圧力となってスズキの肩を破壊した。

明るい色合いの服が、見る見る血に染まる。

肩は、不自然なところで曲がり、崩れたラインを描く。

骨が砕けたのだろう。

本当はないはずの骨格を再現しているあたり、ものの感じ方だけでなく、スズキは何もかもがどこまでも人間じみていた。

人外のくせに、これじゃ心臓の位置を一突きすればカンタンに死んでしまいそうだ。

苦痛の中で、零はチラとそんなことを考えた。

スズキは、零の攻撃のショックでより強く彼の肩をつかんだ。そこから流れ込む殺意も増す。

余計なことを考える余裕がなくなる痛みが、零の全身を駆け巡る。こんなときに、痛覚をオフにするのは一見便利そうでもない。

ダメージの深さが、知覚でなくなるからだ。

今のところ、零は捨て身で戦ってもいいし、フシギと、ここに至ってもスズキを殺して終わりにする気もなかった。

だから、どれだけやられたかは知っておく必要があった。

本当にマズそうなら、手加減もしていられない。

零の肩が、ぐずりとくずれた。

その分だけ、スズキの手が零の中にめり込んでいく。

「ぐっ……う……」

零が、

「うっ、あぁっ……」

スズキがうめく。

肩が崩れても、零の手は動いた。

カラダから離れたとしても、必要なだけの集中力があれば、それは可能だ。

零の手が、妙に低い位置からスズキの腕をつかみ、押し上げる。それにつれて、肩の位置も戻っていく。

お互いに、真っ赤に焼けた鉄でつかみ合いをしているようだった。

「ぐアうっ！」

スズキがほえる。

銀翼が左右から水平に、零を襲った。

ドンッ。

振動をともなって、地面に黒い翼が突き立つ。

スズキの両肩、両翼を落として。

零は、もう苦痛の表情を浮かべてはいなかった。

叫びながら、ヒザから崩れ落ちていくスズキを、ただ見ている。
切り落とされた腕も、翼も、少しの間その形を保っていたが、やがてゆっくり空気に溶けていった。

光ってもいない、影にも見えない、その溶けていく姿は煙に似ていた。

本当なら、本人が戻そうと思えばそれは元通りにつけることもできた。

大怪我に錯乱して、叫びながらのたうち始めたスズキが正気であつたなら。

クチからよだれをたらし、顔は己の血と涙でぐちゃぐちゃだった。肩から胴体の一部にまで及ぶ切断面からは、どぶどぶ勢いよく血が出ては乾いて、少しずつ空気に溶ける。

これも、本人がおちつけばすぐに止まるものだった。

グロテスクでみつともない姿と、狂気をふくんだ悲鳴は零を大いに誘惑した。

このまま、もっと。

それを振り払うと、零は地面に頬擦りするかのような動きをするスズキの顔を、思いつき蹴り上げた。

「しっかりしろ、スズキ。」

心配していたレイをごまかすのなど、本当はカンタンだ。

それでも、彼は悪魔としての本能を、この一蹴りでおさえこんだ。なぜだかは、わからない。

何かを思い出せそうで、思い出せない。

スズキの瞳の色が、頭をよぎった。

わからない、何か。

俺はそれを知りたいのかもしれない。

そんな思いで。

ぐちゃぐちゃのスズキの顔に、さらに鼻血が加算された。

少々歪んでしまった顔は、もう笑えるレベルではなくなっていた。その顔を見ながら、零は考える。

レイがいて、俺がいて、コイツがいて、その“あたりまえ”を、俺も少しは望んでいるんだろうか。

スズキの口元が、がくがくと揺れた。

しゃべれないほど、痛めつけてしまったか。

（続）

続き 4

“耳”を使うのはあきらめ、スズキの思考を意識した。

ころして。

ぎくりとして、零は一瞬スズキからわずかに意識をそらした。
汚れ、ゆがんだスズキの顔を、あらためて見つめる。

翼も両腕も失くし、そこから血はふきだし続け、地に這いつくばり、その姿はみじめで、今にも死にそうだ。

それでも、本当は今すぐこの場から逃げる事ができる。

零は今、スズキの動きを制限するような力はいつさい使っていないからだ。

なのに、彼は死を望む。

鼻からあごにかけて腫れ上がって変形した顔の、いまとなっては目だけに表情がよみとれた。

底知れない悲しみ、何もかもを呑み込む諦念。

最後の一撃をうながすように、スズキが目をとじ、涙がながれていく。

抵抗の気配はない。

「いったい、何があった。」

きょう何度目の質問だろう。

そして、何一つコイツは答えない。

零はイライラしたが、これ以上何かすれば本当にスズキは死んでしまいそうだった。

答えない彼の心をさぐる。

お前は、思い出さない。

殺せないなら、僕に救いはない。

なら、死だけが僕を救える。

この辛い記憶から、解放されるんだ。

「記憶って・・・なんだ・・・」

なにか思い出せそうな、だけれどどうしてもわからない、あの感覚。零が考え込んでいる間に、わずかな物音がしてスズキの体から力がぬけた。

気絶したらしい。

本当に人間に似たその弱さに、小さく舌打ちすると零は彼の前髪を乱暴につかみ、顔を引き上げた。

「起・き・ろ。」

まぶたを閉じたままの顔にただよう、儚さ。流れ続ける血。

ほうつておいても、死ぬ気がした。

傷をふさぐのなら、同じ天使じゃないとうまくいかないだろうな。そう思ってから気付く。

今のコイツは、天使じゃない。

俺の力でも、同化できるかもしれない。

傷口をふさぐイメージで、力を注いでみる。

思ったとおり、ひとまず血は止まった。

腕を再生してやるのは、パーツの割合が大きすぎて　いくらなんでも負担が大きかった。

とりあえずこれで死ぬこともないが、拒否反応だろうか。

傷口は黒く変色し、肉が盛り上がった表面は　いぼが重なり合ってきたかと思うほどにでこぼこだった。

「み、醜い・・・」

思っても見なかった副作用に、零は思わずつぶやいた。

それでもとにかく、一応の危機は去った。

つかんだ前髪ごと、スズキの頭をゆらしてみる。

「おー・・・い。」

かくかくかく。

「・・・」

取れても、治せるしな。

零は思った。

跡のこるけど。

がつくんがつくんがつくん。

激しく高速で腕を前後させる。

「あぐア?!...あー...」

今度はわりとすぐに反応が返ってきた。

だらしない発音からすると、蹴った時にアゴをこわしたようだ。

ついでにコレも治しておく。

「アうつ...があ、いたっ...何を?」

どうやら悪魔同士と言っても、やはり性質が全然違うらしく、確

かにケガを治してやることはできたのだが、跡は残るわ痛いわけで、

あまり具合はよろしくなさそうだった。

今度は顔面の下半分が、青黒いアザになった。

「んー、形、は、戻った。」

零の言葉で、スズキは自分の体の変化に気付く。

「治した、のか?」

「多少。」

一瞬驚いたスズキの顔が、みるみる怒りにそまる。

「殺せばよかったのに!忘れてたいんだろ?なら殺せ!」

また同じことを言い始めた。

「だから何のハナシだ!」

話が見えず、零は苛立つ。

「俺が忘れてんなら教える。それから、殺せ殺せてな、じゃそ

うしたら俺はレイに何ていえばいい?あ?!うまいイイワケがある

ならそれも教えてくれよ、なあ!」

逆に零の方から責めると、スズキはうつむき、苦しみだした。

零のつかんでいた髪が引つ張られ、何本も一度にぞろりと抜けて

スズキの頭部は自由になった。

痛いはずだが、本人は気づいてさえいない。
荒くなった息の間から言葉をしぼりだす。

「ち、が、…君、嘘つき、イイワケ、なんて…」
背を丸め、全身をこわばらせる。

「おい…？」

性質の違いすぎるチカラが体に入ったことが、毒として作用したのか。

他愛ない会話の中でいつも見ている、少しスネた顔が不意に思い
出され、一瞬で かき消える。
消えていく。

（続）

続き 5

つなぎ止める言葉を。

「レイが！」

あわてて、たぐる。

「レイが心配してたんだ、あいつはどうする？守るって言ったガキは？ブレイブは？」

一言ごとにスズキは身をよじり、深く体を折っていく。

「お前には関係ないっ！」

叫んで顔だけを上げたスズキの目から光が走る。

腕のあった場所には、鈍い銀色のいびつな大鎌が生え、零に襲いかかる。

慌てるでもなく、零は後ろに身を引ながら横なぎの蹴りを繰り返した。

「めんどくせえ奴だな。」

大鎌はサビきつた金属のモロさであっさりと折れ、あとかたもなく崩れて消えた。

血をだすことなく、スズキの肩口は、さらにえぐれた。

「・・・そうだ、面倒なんだ、僕を生かすのは。なのに、それでも“君”は、殺さない・・・」

疲れ切って、放心した顔のスズキがつぶやいた。

零はそれに答える。

「レイが泣くほうが面倒なんだ、使い魔としては。」

はは、と乾いた笑いを漏らすと、スズキはまたつぶやく。

「あのコの言うことなんか、いつも聞かないくせに。」

殺意はもう消えていた。

なにもかも諦めた顔だった。

それでも敵意は完全に消えたわけではないが、零は気が楽になるのを感じた。

殺さなくてすむことになのか、レイを悲しませなくてすむことになのか。

「別に、いつも無視してるワケじゃない。」

ほら、もういつもの会話だ。

戻ってこい。

零は知らぬうち、そう願っていた。

うまく笑えないのか、スズキの顔がゆがんだ。

「そうやって、僕を生かすためのイイワケを考えたり、ギリギリ手加減するのは、殺すより、ずっと面倒だよ。」

殺意は、消えたのではなく、向きを変えたのかも知れない。

「だから、レイが」

「君は！」

零のイイワケを、スズキがさえぎる。

「君は、ホントはウソがうまい。僕は、君にだけ別れをつけて遠くに行ったとも言えはいい。」

「……」

零は、一瞬言葉に詰まり、反論をさがす。

「理由は。遠くに行かなきゃいけない理由なんか、お前にはないだろう？」

どうしても殺さなくてはいけない理由も。

絶望的に無表情な顔で、スズキが答える。

「“さあな”。君らしい答えだろ。」

完璧だった。

零の態度次第で、レイはそれを信じるだろう。

二人を“友達”と思っているのだから。

「そうしてほしいのか？」

「そう言った。」

残念そうにスズキが笑った。

その表情には、わずかにいつもの彼らしさがうかがえた。何も言えずにいる零に、スズキは続ける。

「けど君はそうしなかった。こっちは本気で君を…。なのに、こんなに、言っても…。だから」

スズキの体から、淡くあわく、揺らめく煙が立ちのぼりはじめた。
「だから、僕は…きみ、を」

つぶやくスズキの声が小さくなりはじめ、目つきもうつろになってきた。

思わず、名を呼ぶ。

「スズキ！」

消えた腕と同じ色の煙。

ゆらめきながら、後から後から湧き出ていく。

スズキはまだ何か言い続けている。

「しん じ…」

しかし、最後の音がそれをかたどった唇から出てくることはなかった。

彼の体から完全に力が抜け、その場に横たわる。

消える。

零は思った。

主観的静寂の中、目の前の存在は変化を見せない。

また気絶らしかった。

もう無理に起こそうとは思わなかった。

「ホントにめんどくせえな、テメーは。」

拍子抜けし、独り言が口をついてでた。

その時唐突に、スズキのすぐそばに立つ影が見えた。

(続)

続き 6

このあたりは、広範囲に向けてスズキが無差別に飛ばした暗示のせいで、零たちを見て立ち止まる者は居ないはずだった。

零は不審に思いながら、相手を確認する。

それは、本当に“影”そのものだった。

黒く細長く伸びた、零の“影”。

たまたま遠くガラスに映りこんだモノとも思える、不鮮明でぼやけた姿ながら、目の前にいる。

ほとんどのチカラを使いきって、存在を保つのがやっとなのか、わずかな空気の流れにさえ、ゆらめいた。

「“影”……。俺、かよ・・・」

天使が悪魔につかれる、というのはレアなケースに思えた。

それよりも何よりも、自分の一部がスズキをあんふうに狂わせたことに、零は驚いていた。

その影と思しき声が、アタマに響く。

違う。俺は、記憶。

「記憶？」

今日初めてではないフレーズを、零は疑問形で繰り返した。

お前が封じ込めた、記憶。

……と、共有する記憶。

“スズキ”、ではない、それでもなぜかスズキの事だとわかる名前の部分だけが、聞き取れなかった。

そこに入る名前も、また封じ込められた記憶の中にあるのか。

そして俺は、お前の死を望む、“俺自身”
思い出せ。

「俺に自殺願望はない。」

零が言う間に、影は大きくゆらめき、姿を変えた。

やはり不鮮明ではあったが、見覚えはある。

いつか見た、レイに似た女。

ぼんやり、笑っているのが見えた。

つくん。

とてつもなく まがまがしい刃の切っ先が、胸の奥を軽くつついた。

だめだ、さわるな。

「来るな、お前は、いらない！」

全く原因のわからない、恐怖に似た感情が零を支配した。

今までに覚えのない感覚。

消えそうな影に、零は怯えていた。

思い出してよ。

影が、女の声でしゃべった。

知らない声だ。

こんな女は、知らない。

全部、忘れちゃったの？

女が、涙を流す。

胸の奥の刃が、食い込む。

呪いが、しみだす。

唇を震わせ、零は何も言えない。

涙だけが、なぜかはつきり浮き上がって見えた。

細く淡く、朱のすじが混じったと思うと、見る見る涙は血にかわる。

忘れて、なかったことにして、繰り返すの？

クチから、鼻から、髪の間から。

赤い、幕が降りる。

彼女の全身が赤く染まる。

ぐらり、と彼女の身体が零にむかって傾いた。

倒れる、と零は思った。

これは影で、あれは本当の血じゃない。

この影は、何か忌まわしいモノ、忘れるべくして忘れた記憶に違いない。

いらないモノだ。

わかっていた。

全てアタマではわかっていたのに、真っ赤に染まった彼女を抱きとめていた。

ほら、もう

女の声が言う。

彼女の身体が赤黒い霧にほどける。

思いだしはじめてるんだ。

自分の声。

その言葉に気をとられた一瞬で、みずからを“記憶”と言っていた影は、全て零のなかに戻った。

身構えたが、肩透かし。

何も起こらないし、思い出さない。

だが、封じ込めた、らしいそれが解き放たれたとき、自分は死のぞむのだろうか。

零は、ついさっきまでソレにとりつかれていたスズキの、今はなんの表情も浮かんでいない顔に視線を落とす。

答えはない。

その時が来るまで、わかりはしないだろう。

「・・・じゃ、帰るか。」

見苦しいことになってしまったスズキの上半身を隠すために、チカラを一部、ジャケットの形にまとめる。

子供の身体ではスズキを運ぶにムリがあるから、“元の姿”に戻る。

ジャケットをかぶせた状態で運ぶためには、…お姫様抱っこが一番安定していた。

すごくきもちわるい。

この借りは、ゆっくり返してもらおう。

零は、周りの人間たちが暗示から完全に解放される前に、夜空とよく似た色の翼を思い切り広げた。

腕の中で、金色の髪がさらさらと揺れる。

スズキの体は重く、温かった。

12 面倒

実体がある状態で気絶したスズキは、ドアを通り抜けることができない。

俺はドアを足でガンガン蹴りつけた。

部屋から出てきたレイは、元の姿に戻った俺がスズキを抱いて立っている光景に、ぱかんとクチをあけたきり、数秒絶句していた。

「それ、スズキさん？」

やつのことで出てきた言葉が疑問形なのは、スズキの上半身が俺の“出した”ジャケットでくるまれているせいだ。

それでもカラダの大きさと、少しのぞいたストレートの長い金髪でだいたいわかる。

そもそも、俺はコイツを探しに出たのだ。

「ああ。」

答えて、キッチンの床に放り出そうとすると、レイが慌てて止めた。

「ちよつと！何でそこ？ちゃんとベッド連れてってあげてよ！」
不本意だが、仕方ない。

「舌打ちしたでしょ。」

レイが顔をのぞきこんできたが、俺は少々の抗議をこめ、目をそらした。

スズキをベッドに転がすと、俺はいつもどおり子供の姿に変わった。

部屋の狭さが、それでだいぶマシになる。

「ひゃっ・・・」

レイが小さく悲鳴をあげた。

転がしたはずみで、スズキにかけておいたジャケットがはだけたのだろう。

「零さん、これ・・・」

恐怖、混乱、憐憫が同時に強くレイの顔に浮かぶ。

「俺が痛めつけて、俺が治した。」

「治ってないよ!」

説明と同時にツツコミが返ってきた。

「待て待て。」

「きゅきゅきゅ救急車!!ヒドイよ零さん!ヒドイ!!」

レイが携帯に手を伸ばす。

「だから待て!」

大きな声を出したのは、泣きそうな顔にイラっときたせいもある。

「暴れたから仕方なかった。それに、人間じゃないのは知ってるだろう?救急車なんか呼んでどうする気だ。」

少し迷ってから、救急車を呼ぶことを諦め、レイは携帯を置く。

「だって・・・でも、何もここまで・・・」

スズキのほうに向き直り、悲しげにその眠る顔を見つめる。

「スズキさん・・・」

青黒い頬に、そっと指先で触れた。

俺はそれを注意深く観察する。

思っていたとおりだった。

何も気付かないレイを、からかうフリをする。

「キスでもしてやれよ、目をさますかもしれないぞ?」

レイが、キツとこちらをにらんだ。

「ふざけてる場合じゃないでしょ?」

かなり怒らせたようだ。

「いいから、ちょっとやってみろ。」

俺の言い方で、何か感じたのかレイは怒りをおさめた。
ためらいがちに、スズキに顔を近づける。

「・・・うん、じゃ、えと・・・やって、みるよ?」

俺はうなずいた。

ゆるくウエーブのかかったレイの髪が、スズキの顔にかかる。
俺の方からは見えづらいが、頬にしたのだということとはわかる。

「おーい、そこじゃないだろ？」

振り返ったレイの顔が、少し赤い。

「あつてるもんつ、友達なんだからつ。」

必死なのが面白い。

俺はわざと何でもない口調で、さらにからかう。

「前にもしただろ、もう一回くらいサービスしてやれよ。緊急事態なんだから。」

スズキが俺をたきつけようとして、目の前でそんなことをしてくれた過去がある。

きゅうつとレイの眉尻が下がり、困惑全開の表情になる。

「ちつがーうもんつ、あの時はギリギリで止めてくれたのー！お芝居だよ、知らなかったの？」

知らなかった。

俺、カツコ悪くないか？今。

・・・そういう時は、ゴマカすに限る。

俺は全く動揺などしていないフリで、視線をスズキにうつした。ちょうどよく、変化が現れていた。

「見る、レイ。」

「え？」

黒ずんでいたスズキの顔が、部分的にだが やや青みの残る肌色にまで戻っていた。

「ウソ、なにこれ、どーゆーこと？」

軽くパニックっているレイに、俺はさっきまで仮説でしかなかった自分の考えを話した。

「コイツらにとって、同情はエネルギーになる。コイツとお前はオトモダチで、その結びつきの分大きなエネルギーが期待できる上に、お前はコイツにとつちや“好きな相手”で、その力は特別なものだろう。だから、コイツの世話は、お前が適任なんだ。今見たようにな。」

そんなことを言われて、急に信じるのが難しいのかレイはぼかん

としている。

「そう、なの？」

(続)

続き

「だいたい合ってるよ。」

答えたのはスズキの声だった。

「遅いお目覚めで。なんでそんな風になったか、覚えてるか？」

腕がないと起き上がるのも難しらしく、スズキは勢いをつけて腹筋だけで体を起した。

「はつきり、ってワケじゃないけどね。・・・とりあえず、ごめん。」

表情は暗い。

「え？何で？何でケガした方が謝るの？」

レイにはワケがわからない。

「なんでもいいだろう。」

過ぎたことだった。

殺そうとした、のは俺の記憶がそうさせたせいで、肝心のその理由は“思い出して”いない。

思い出したくない気がする。

俺が流そうとした質問に、スズキが答える。

「僕がいけなかったんだ。僕が、彼を殺そうとしたから。」

「え」

レイは不可解そうな顔をする。

ふだんのスズキを知っていれば、信じられるはずがない。

「正確にはお前じゃない、俺の“影”だ。」

うつむいていたスズキが、さっと俺の方を見る。

「違う！影なんかじゃない、あれは、記憶だよ。・・・大切な、だけど・・・。」

強く打ち消したのは一瞬で、だんだんと声に力がなくなっていく、それから遠慮がちに、ほんのわずか寂しげに、笑った。

「まだ、思い出せない？」

「ああ。」

「そつ、か。」

残念そうに、それでいてわかっていたようにいうと、スズキの力
ラダ全体が淡く光った。

身体を復元しているのだろう。
だが。

「じゃ、僕は失礼するね。」

と、出て行こうとするスズキに、とりあえず俺はわかりやすいと
ころから指摘をしてやった。

「おい、お前 透けてるぞ。」

復元するにも、材料が絶対的に足りていないのだ。

腕も翼も、パーツとしてはデカく、俺に比べれば大した力をもつ
わけでもないスズキの存在の3／4割は食ってしまう。

それを景気よく空気の中へ放ってしまった上に、もう一度、腕だ
か翼だかよくわからないモノを生やし、それも失っている。

記憶がはつきりしないだけあって、ダメージの計算ができていな
かったのだろう。

それで、“元通り”に戻ろうとしたものだから、結果として半透
明になってしまった。

「ええっ？ウソッ！」

驚いて声をあげるスズキに、俺はさらにツツコまねばならなかつ
た。

「なんで胸かくすんだ、バカ。それから、鏡見ろ。」

レイの使っている卓上ミラーを差し出す。

「うわぁナニこの顔！何、って、手エー！」

顔も、腕も、俺が治した部分には、黒々とアザがグロテスク極ま
りない模様を描いている。

「お前がああなつてたから、俺の力でも応急処置くらいはできた
が、相性が悪かったみたいだな。それで外に出る気か？少なくとも
しばらく店には出れんぞ。」

さつきから俺たちのやりとりを、心配そうに見守っていたレイがそこに入り込んでくる。

「あのね、ウチ、いてもいいですよ？」

笑った彼女から、スズキは腕で顔を隠した。

「み、見ないでっ！ああ、僕どうしよう、あー、あーもお・・・」
その悩み方が、うつとうしかった。

俺は面倒になり、レイに説得を任せることにした。

目が合うと、レイはバカなりに空気を読んだ。

「もう遅いですーう、しっかり見ちゃったし。ね、元に戻るまで、ウチにいましょ、スズキさん。ね？」

自然に、スズキの奇妙な模様のついた手にレイが手をのばす。
つきぬけた。

「え?!」

「あつ。」

驚くレイとスズキ。

「人間がさわるには密度がたりないんだ。わかったら戻れ、腕が無い方がケガ人らしい。」

あきれた俺がそう言っていると、レイがフォローのつもりなのか、スズキに言葉をかける。

「あのっ、大丈夫です、あたしスズキさんなら怖くないですよ！」
別に死んでるわけじゃないから、怖いはずもないのだが、バカなりのケナゲなセリフにスズキは少し笑って、また光った。

「って、あれ？何か・・・」

そこに現れたのは、腕のないスズキではなく、模様が浮かんだ腕を持ったまま、少年の姿に変わったスズキだった。

俺は

「不正解。」

と言って鏡を差し出した。

「わあっなにこれ！なんでえ？」

「俺と同じだ。」

足りない力の分、縮んだということだ。

「あそつか、そうだよね。」

「やーん、スズキさんかわいーっ。」

顔、腕の変色をモノともせず、レイが金髪の美少年に食いついた。スズキはスズキで、舞い上がってだらしなくニヤける。

「え？えへ。じゃこのままでもいっかな。」

俺は素早く反対意見をはさむ。

「いいわけないだろう、それじゃロクに同情を引けんぞ。」

いつまでも弱ったまま、ここに居られても困る。

というよりも、それでは みつともない姿をレイの前でイジリ倒して楽しむことができない。

スズキがムツとした顔をする。

「同情じゃないもん。思いやりだもん。慈愛だもん。」

“可愛い” スズキを、レイが甘やかす。

「このままでいいよー、かわいいし、それに黒くなってるって、充分カワイソウだよ？」

少し考えて、スズキは気づいてしまった。

「ねえ、君もしかして、ケガした僕をからかって遊ぼうとか思っ
てない？」

レイも

「あ。」

と言った後、非難のこもったまなざしで俺を見てきた。

（続）

続き 2

俺は、この瞬間に決意した。

この俺の全力の演技で、悪魔としてのプライドをかけて奴らと勝負すること。

タダでスズキにいい思いをさせるのは、絶対にガマンならなかった。

素直になれないけれど、失いかけてはじめて気付いた友の大切さ。それが俺の演技プランだ。行くぞ。

まず、スズキはこちらの心が読める。探りを入れられる前に、強い自責にかられた自分、をしっかりとイメージして、そこに入り込む。

実際にスズキを傷つけたことで自分を責めるのは、俺には難しい。今まで食ってきた人間たちの感情から、それらしいものを思い出し、分析して自分なりに再現する。

ここ数百年は出した覚えが無い本気の集中力で、そのシチュエーションに入り込んだ。

とにかく大事なのは悲しみと、“しでかした感”だ。わざとらしくならないよう気をつけながら、わずかに目をふせる。「そう思われても、仕方ないな。」

レイとスズキが、視線を合わせる気配。

恐らく、信用していいのか迷っているのだろう。

スズキが、口を開く。

「・・・僕のため、なんだよね？」

よりによってこの俺に、やさしさを期待した質問。どこまでバカなんだ…と、こんな考えはダメだな。俺は今“反省中”なんだ。

ナンテ コトヲ シテシマッタ ノ ダロウ

心の中で“反省の呪文”を唱える。

その上で口にする言葉を選ぶ。

「それでも、腕がなければ自分では何もできない。みじめな思いを強いることは……。レイの言うとおり、黒くなっちまってるだけでも、“充分カワイソウ”だしな。」

「あ……。」

スズキは、その変色の原因を思い出す。

そうさせた本人の言葉は、自責に聞こえたはずだ。

しかもそれは治そうとして、つまり善意からの行動が裏目に出たものだ。

当然、実際の俺は助けてやったのだから反省などしていない。

遠まわしに恩を思い出させた上で着せてやっているわけだが、スズキは致命的に甘いヤツだった。

すっかりカワイソウなモノを見る目になって、変にやわらかい声を出す。

「零くん、やっぱり僕、君の言うとおりにしてみるよ。面倒かけちゃうかもしれないけど、甘えさせてもらおう。」

カントンすぎるが、それでこそ“天使”だ。

「そうか、お前がそのつもりなら、俺もできるだけ協力する。」
どうせ面倒を見るのはレイだ。

話がまとまったのに、スズキは困り顔を浮かべた。

「でも僕、変身苦手でさ。こんななっちゃったし、うまくあの状態に戻るかどうか……。」

想像力が足りないんじゃないか、とバカにしたいのをガマンして俺は誘導してやることにした。

「手伝ってやる。目は閉じた方が集中できるだろう。」

スズキは、黙って素直に目を閉じた。

「まずは、元の自分を思い出せ。これは、さっきもできたな？」
「うん。」

そんな俺たちを、レイは珍しいモノを見る顔で、だが黙って見守

る。

俺は、スズキの両肩に手を置く。

「あの時、俺はここからお前の腕を…落とした!」

軽く叩くと、急にその部分の感触がなくなる。

腕が消えた。

「できたじゃないか、ああっ?!」

褒めてやったのも束の間、出血が大サービスなことになっていた。腕が落ちた瞬間を思い描いたスズキは、盛大に血をまき散らし始めた。

本人も気付き、動揺する。

「うわっ、うわあっ、どうしょ、うわあーっ!」

レイの悲鳴がかぶさる。

「いやああーっ!」

まるで事故現場だ。

血と悲鳴には慣れているが、ここは収拾しなければ何もできない。俺はそれらに勝る大声を張り上げた。

「うるせえっ!!」

すかさずスズキの傷口に、両側から手を当てる。

「血は俺が止めた!」

スズキはそれで正気を取り戻す。

「あ、あれっ? そうだ、そうだよな。」

血は消え、淡い光となってスズキの体に戻っていく。

“ なかったハズの ” 出血だからだろう。

そうして、血が消えると元の変色した傷口が両肩に現れた。

「まったく…」

面倒なヤツだ、といいかけて慌てて口をつぐむ。

もう少し長くない人の芝居を続けなければ、ウソがバレてしまいそうだからだ。

「ありがと、零くん。」

スズキが微笑み、俺は二つの意味で胸をなでおろした。

それでね、とスズキが俺の後ろを指差した。

「レイちゃん、倒れちゃったみたいなんだけど。」

今度はエンリヨなく言わせてもらう。

「めんどくせえヤツ。」

他者と関わることは、本当にいつも面倒ばかり運んでくる。

・・・そうだ、面倒なんだ、僕を生かすのは。なのに、それでも

“君”は、殺さない…

あのと時のスズキの言葉が、不意によみがえる。

俺は、“忘れた”過去が気になっていた。

だから、それを知っているスズキを殺さなかった。

だけど今は、絶対に思い出すべきじゃない、とも思っている。

思い出すべきでないなら、スズキは、いない。

なのに、それでも俺は、殺さない。

気絶しているレイの顔をながめながら、俺は言った。

「面倒だ、放っておこう。」

（続）

続き 3

同日、夕食時。

「食ったほうが治りも早いぞ、スズキ。」

困り顔のスズキを見ながら、俺は愉快さに任せて微笑んだ。

「だからって、でもお。」

スズキは弱った声を出して、俺を見る。

俺は揺るがない。

「優しくしてもらうと、それも治りがいいんだろう?」

レイもハシでつまんだオカズを差し出して言う。

「エンリヨしちゃダメだよー、はいアーン。」

「手伝おうか?」

俺は言って後ろにまわり、スズキの顔をつかむと口をムリヤリあけさせた。

その後のある日。

「やっぱり、直接触ったほうがいいだろう。」

「いやー、零さん、あたしそれはちょっと・・・」

「ぼ、僕も困る!」

「いいから脱げっ!」

腕がない体にはひっかかりもなく、スズキの上半身はカンタンにムくことができた。

「ふっ、別にいやらしいコトをさせようってワケじゃない。ただのマッサージだよ、マッサージ。」

肩の傷跡だけでなく、翼があるハズの背中もなでてやれば治りが早くなるだろう、というのは当然イイワケだ。

レイが抗議の声をあげた。

「零さん今 超 悪人顔してるんだけど!」

「そおんなことないだろう、ほらこうだ、こう。」

俺はレイの手をとってスズキの背に当てた。

スズキの体がびくんと跳ね上がった。

「く、く、く、く。」

笑いをこらえきれず、このイヤガラセは一度きりで失敗に終わった。

別の日。

「ほらー、スズキさん照れないでー。」

レイに化けてスズキにキスを迫ってみる。

俺の変身は、スズキと違って完璧だ。

「やだー！ばかー！やーめーてー！！」

「本人が留守の今がチャンスだぞ？夢を叶えてやる、こっち向けよ。」

「声っ、声だけ元に戻さないでキモチワルイ！君だってわかってするわけないだろ！変態っ最低っっっ！」

「はははは！冗談だ、ただのタイクツしのぎだ、はははははは！」
久々に死ぬほど笑った。

からかい倒して、それでもまだ足りないのに、残念なことに変色はすぐ元に戻り、腕もすっかり実体のあるものが出来上がってしまった。

これからはこちらからブレイブにでもいくか、子供“で”遊ぶしかない。

スズキがきて以来、しばらくユウたちとは会っていなかった。
レイはにこやかに声をかけた。

「もう大丈夫だね、スズキさん。退院オメデトウ。」
スズキも笑う。

「あは、ありがと、院長さん。」

鳴神医院、という設定らしい。

玄関に立つスズキは、本当にすっかり元通りだった。

「ねえ、零くんちよっと。」

部屋にいた俺を、スズキが呼ぶ。

「なんだよ。」

顔をむけると、手招きされた。

「呼んでるんだから、こっち来てよ。」

スズキがいうと、レイも賛同した。

「お見送り、しょ？」

俺は、渋々立ち上がる。

めんどくせえ。

「治ったんならさっさとでてけ。」

目の前のマヌケに声をかけてやると、ヤツは珍しく不敵な笑みを浮かべた。

「こら。君の目的くらい、僕は最初から気付いてたんだからな？」

俺は少し驚き、目を見張った。

レイが俺を見る。

じゃあ、わかっててレイとの接触を楽しんでたのか？

コイツはそんなに器用だったか？

そんなことより結果的に

俺、カツコ悪くないか？

一気に色んな考えがアタマにあふれた。

スズキが、微笑む。

「確かに、何されるかまではわからなかったし、僕のリアクシヨンは演技じゃないよ。君のイタズラ自体は失敗してない。」

なぜそんなことでスズキが俺をなぐさめるのがちょっとわからないが、少しほっとする。

「じゃ、どういうことだ？」

訊いた俺に、スズキがおおいかぶさった。

「ん?!」

驚いて、声が出た。

やわらかく、スズキに抱かれていた。

けっこう、きもちわるい。

「おい、キモチワルイ。それから、レイ、なんだその優しい目は友情とか思ってるんだろう。勘違いだからな!」

「そうだね」

スズキが言った。

同意するとは、意外だ。

だが続きがあった。

「これは僕の一方的な気持ちなんだろうね。でもね、ありがとう、零。」

腕に力がこもる。

「放せ、本気でキモチワルイ。」

俺がスズキの胸を押し、ひきはがそうとすると、案外カントンに離れた。

それでもスズキは笑っている。

「反省したフリしても、いいこと言っても、そんなカントンに君が変わるワケない。でもね、言葉じゃない。僕は、君を信じたんだ。これからも、信じる。もう迷わない。」

ちよつと意味がわからない部分がある。

だが、それで一つだけわかった。

俺を信じられなくなつて、その迷いが影を呼び寄せたということだろう。

「信じるな、“悪魔”なんか。」

俺はスズキのバカさ加減に嫌気が差し、吐き捨てた。

スズキは、笑ったままで目を伏せ、ゆっくり首を左右に振った。

「“悪魔”かどうかなんて、どうでもいいことだよ。君は君、“零”だ。」

俺がその意味を考えているうちに、スズキはレイに小さく手を振

り、またね、と言って出て行った。

閉まったドアに鍵をかけて、レイがつぶやく。

「片思いなんかじゃないと思うな、あたし。」

「あ？」

俺が聞き返すと、レイは俺の表情をうかがうそぶりを見せた。

「さっきの話、友情。あたしと違ってちゃんと両想いになってると思うよ、零さんたち。」

微笑むその頬を、本気で引きちぎれるくらい力いっぱいユビでつまんで引っ張った。

「いぎやーーーーっつっ！」

「二度と言うな、気色悪い！」

はつきりした不快感と同時に、どこか落ち着かない感覚。

それらも、これからもつと馴れ馴れしくなりそうなスズキのこと、レイのおかしな誤解も全てはこの一言に尽きる。

「めんどくせえ。」

そうだ、面倒なんだ

それでも 君は・・・

13 じゃ なくなつて

「おい待て、今手前からとつたる。賞味期限は見たんだろうな？」
短髪にメガネの“彼氏”スタイルの零に注意されて、レイがごまかし笑いをうかべる。

「あ。えへへ……」

零の持つ買い物かごの中の牛乳と、商品棚に並んでいるものを見比べ、そのまま戻す。

「大丈夫だったよ。」

機嫌よくレイは笑った。

二人一緒にスーパーで買い物をしているのは、夕食の献立を考えるのに飽きた零の思い付きだった。

ランコントロールに顔を出し、レイにちよっかいを出そうとする男がいないかチェックして、ついでに買い物、というコース。

レイはその行動の意味するところをなんとなく感じてはしやぎ、零はそれを全く意識していなかった。

確かめれば、共有しようとすれば消えてしまつたろう幸せを、とりあえずレイは自分の中だけで楽しんでいた。

そして、こういう出来事は後日ランコントロールのウェイトレス達や、スズキに垂れ流される。

ウェイトレス仲間は正直さやかすぎる幸せを、いっぱいに噛みしめるレイを理解できないと思いながらも、まあわりと暖かく見守っていた。

スズキは零を知っているだけに、レイに負けなくらいそういう話を喜んで聞いてくれていた。

零はそれを、せいぜい誤解させておけ、と笑うのだった。

清算をすませると、店の名前がプリントされている大きなビニール袋に品物をつめこみ、零がそれを持つ。

片手に荷物、もう片方は空いている。

店を出ながら、チラツとそれを見たレイに、零が気付く。

「ん。」

空いた手を、差し出す。

意外な展開に、店の出入り口でレイは立ち止まってしまう。

差し出されていた手は、そのままレイの手をつかんで引っ張った。

「そこに立つてると邪魔だ、行くぞ。」

手をつないだまま、歩き出す。

レイは戸惑う。

嬉しいことは嬉しいはずなのだが、出来事に気持ちが追いつかない。

「なんで？ 零さん。」

呼ばれて、零はレイに顔を向け軽く笑った。

「このナリン時は、“彼氏”だ。」

一瞬、あっけに取られるレイ。

すぐに思いつき手を振り解いた。

これには零が驚き、目を大きくして薄く口を開いている。

レイは零をにらんで、思いつき頬をふくらませた。

「手なんかつないであげない！」

自然な気持ちからでないことが、少し寂しくて。

スネてしまった彼女に、零は呆れを隠そうともしない。

「自分で物欲しそうな顔しておいて、何だ？」

「それはー、そう、なったらいいな、って。思うだけなら自由でしょ？」

早足でレイは歩き出し、歩幅の違いから零はそれに続いてゆったりとした歩調で歩く。

「だから、そうしてやったんじゃねえか。」

レイが勢いよく振り返る。

「“やった”ってナニ？ そういうところがムカつくんですーう！」

語尾を嫌みったらしく、レイが言う。

ケンカがしたいのではない。

言い合いのカタチでじゃれるコミュニケーションだ。

呆れたり、少しの苛立ちを見せることはあっても、こういうことで零が本当に怒ってしまうケースは　まずない。

レイは確信犯で、わざと零に食ってかかっていた。

甘噛み、といったところ。

零とは、今のところこういう会話が、一番距離を感じずにいられるのかもしれない。

少しずつ縮めればいいんだから、と言い聞かせて、切なさから目をそらす。

そして零の反論タイム。

「ですーう、ってのもム力つくがな。だいたい、こっちはお前が喜ぶと思ってやってやったのに、何だその態度は。え？」

割とまともな内容で言い返してくる零を、心の中でちよっとオモシロイと思いながら言い返そうとして、レイは気付いた。

「え、まって。喜ぶ、と、思ってた？」

零は無然として答える。

「ああ。」

そうはいつでも、その喜んでいるのをひそかに笑うだけなのかもしれない。

ただ喜ばせたい、というのは零の場合考えづらい。

でも、考えづらくてもレイとしてはそれを期待し、信じたいと思っただ。

確かめたら消えてしまいそうな、幸せの可能性。

そうであってほしい、と祈りをこめて告白する。

「いっしゅん、うれしかったよ？」

零の瞳の中、彼の考えを探る。

見つからないまま、再び差し出される手。

「ん。」

だるそうな音に、それでもレイは微笑み、手をにぎった。

零がこのとき、レイと同じような気持ちであった可能性は、実は

少なくない。

なぜなら、後ろから忍び寄る怪しい影に全く気付かなかったからだ。

「れーいー。」

急に声をかけられ、レイは悲鳴に近い声をあげた。

「きゃっ」

反射的に素早くレイの手を自分の方にひきよせてから、声のほうに振り向いた零の動きはゆっくりとしすぎていて、“彼氏”の時特有の優しげな印象が邪魔をしなければウンザリしているのが誰の目にもあきらかだった。

そこには、不機嫌な御雷がいた。

（続）

続き

「新しい彼氏できたらお兄ちゃんに言えって、いつも言ってるだろ？」

これに対してレイが言い返す。

「言ったら邪魔にくるでしょー？てか零さんは、あっ！」
報告などすれば、すぐブチ壊しにくる兄だった。

もちろん、女装で。

それを途中まで指摘して、レイは零がすでに襲われていた事を思い出したらしく、言葉につまる。

零と御雷は、ずっと以前零がまだ“元の姿”だった頃に一度会っていた。

それはランコントロールのみんなと同じだったが、あちらではレイの知らないところで記憶の修正がなされていた。

御雷にも同じことができれば、何の問題もない。

しかし、彼に対してそういった“操作”をする事はレイが固く禁じていた。

御雷が気付く。

「れ、い？れいって、あの零？」

御雷の言う“あの零”と今の姿は、かなり離れていた。

名前の事は、どちらも零がつくのだという事にして兄弟とでも言いはるテもあるのだが、それでは両方とつきあったことになってしまふ。

それはレイの人格から言って、話にムリがあった。

ここは同一人物で通すしかない。

レイの兄なら、バカさ加減も似ているはずだ、似ててくれ。
零はそう思った。

「あ、お兄さん、お久しぶりです。」

にこりとした零に、御雷が笑顔を見せることはなかった。

不快感もあらわに、零を観察している。

「いや、ぜってー、違うだろ。何だ？弟かナンかか？」

零は動じず、ごり押しする。

「いえ？俺ですよ。確かにかなり雰囲気変わりましたけどね。」

同意を求めるため、自然にレイに笑いかけると慌てて彼女も同調した。

「あつ、うん、そーだよ、すっごいイメチェンしたんだよね！」

不自然にニコニコと笑うレイ。

御雷の目が陰しさを増した。

「冗談ならこのへんでやめとけ。面白くねえ。どう考えたって別人だろ、イメチェンで背が縮むかよ。前会ったヤツは確実にもつとデカかった。」

それでもまだ零は笑っていた。

顔色一つ変えずに。

「ああ、あの頃は威圧感あるって言われてましたから。気のせいですよ。」

御雷は、ふざけやがって、と低くつぶやくとレイに視線を移した。

「レイ、お兄ちゃん送ってやるから、今すぐ実家帰れ。俺にウソついてまでこんな怪しいヤツらと付き合うなんて、いくらなんでもおかしいわ、お前。」

御雷は本気だった。

レイが逆らう。

「ヤツらってナニ？零さんは一人だよ。」

御雷の表情がさらに不機嫌に傾く。

「お前まで、まだ言い張るか？言いたくなかったけどな…こんなこと。じゃ言うわ。兄弟両方とデキちゃっただけの話だろ？それをヘツタくそなウソでゴマかし切れると思ったんだよね？」

そっちな！

零は心の中でツツコミ半分に思った。

レイの人格を無視して自分の基準で状況を判断するとは、少なくともバカだという部分だけにおいては零の予想通りだった。

思えばバカを相手にするのに、変にヒネリを加えることもなかった、と零は少し悔やんだ。

後の祭りだった。

御雷の表情は、怒りだけでない暗さをただよわせていた。

彼は妹が大好きだったから。

おかしいな意味合いにおいても、そうでない意味でも。

これにレイが思いつきりキレた。

「なっとなに何言ってるのぉ?!」

興奮してうまく言葉が出てこない。

顔も赤い。

「お兄ちゃんと一緒にしないでよ!」

憤怒のあまり、ストレートなのしりが兄を直撃した。

御雷はひるまない。

ののしられ慣れている彼は、打たれ強かった。

「うるせえっ、お前の言ってる通りならソイツ人間じゃねえだろが!それとも急に背が縮むアヤしい病気か?どっちにする“そんなモン”と一緒にほっぽつとけるか!」

「人間じゃなくなつて」

レイが真実を口にしかけ、零が素早くそれを片手で制する。

つないだ手が、はなれた。

「レイ、それじゃ俺がバケモノみたいだろ?」

零は、ありえない冗談を聞いてしまったという顔で軽く笑う。

レイは一応黙ったが、まだ何かいいたそうにしていた。

そのレイの腕をつかんで、御雷は自分の方へひっぱった。

「お兄ちゃん?」

呼ばれても御雷はレイでなく、零のほうをみていた。

「手え切れ。な?どっちもだ。」

兄弟どちらも、ということだろう。

零は困惑した表情を作る。

「誤解です、お兄さん。……でも俺、今日はこれで失礼しますね。」
片手に持ったスーパールの袋を、レイの方へ差し出した。

「レイ、悪いけどこれ、持てるか？」

「え？うん、でも零さん」

あの部屋のほかに、どこへ帰るのが気になるのだろう。

だが、このまま話を続けても今の零と冷静でない御雷では、うまくまとめるのは難しい。

「じゃ。」

短く言って、御雷に軽く頭を下げると、零はレイの部屋とは違う方向へ走り出した。

追いかけようとするレイの腕は、御雷にしっかりとつかまれていた。

「え、零さん、零さん！」

（続）

続き 2

とにかく、当分必要な荷物だけでもまとめろ、と一旦レイは御雷につれられ部屋へ帰った。

頭の中は零のことばかり、不安でうなだれるレイが部屋の鍵をあけようすると、中からドアがあいた。

「おかえり。ん？零は、どうした？」

白い小さな顔を見て、レイは安心する。

「れ・なゆくんっ！えと、零さん、は…なんか帰っちゃった、お兄ちゃんのせいで。」

レイは横にいる兄を、不満げににらみつけた。

レイの視線をものともせず、御雷はいう。

「いたのか。なゆ太も帰ろう、お兄ちゃん車呼んでやるから。」

御雷が取り出したケイタイを、レイがパツと取り上げる。

「大くん呼ぶ気でしょ？タクシーじゃないんだからやめなよ！」

大、とはレイと御雷の幼馴染でランコントロールにいる翔の兄だ。

レイは、御雷にたびたびタクシーがわりにされる彼にたしかに同情も感じていたが、今はどちらかといえば実家に連れ戻されることへの抵抗で彼をかばっていた。

「じゃ本物のタクシー呼んでやる、返せ。」

御雷は特にイイワケもせず、マジメな顔で言った。

こういう時の御雷には逆らえないと、レイは知っていた。

レイが嫌がっても、怒っても、泣いても、憎まれようと、兄は自分の思ったようにしかない。

それが、本気の御雷だ。

もうこの生活も終わりかもしれない、とレイが観念する。

不意に、なゆた が話しかけてきた。

「レイ、御雷はどうしたんだ。何で急に俺は追い出されるんだ？」

何も知らないふうを装っている。

彼の意図が読めたわけでもなく、ほぼ反射的にレイは答える。

「えーっと、何か、大きい零さんとちっちゃ、普通くらい零さんが両方あたしとデキてて、ってなんかお兄ちゃんが勝手に怒ってねえそんなことないよね？なゆくん。」

最終的に、助けを求めていた。

そこへ御雷がかぶせ気味に口をはさむ。

「そういうことなんだ。フタマタはいけない事だから、オヤジとかあさんに叱ってもらおう。その間ここは誰もいなくなるから、なゆ太も一回家に帰れ。」

と、普段平気で二股三股する男は、子供にもわかりやすく説明した。

それを聞いた なゆた は急にうつむいた。

レイはピンときた。

御雷は心配する。

「どした、帰りたくないのか？それともレイの事心配してくれたのか？」

なゆた は、零はそんな可愛らしさなど みじん も持ち合わせ ていなかった。

ただ単に、芝居の幕が上がっただけだ。

レイは、なんとなくそれに気付いていた。

零は言う。

「…違うんだ、御雷。」

げんな顔の御雷に、言いにくそうに零が言う。

長い身の上話、というフィクションが始まる。

「レイは二股してるワケじゃない。その二人は本当にどちらも零なんだ。」

本当のことを話すのか、とレイは心配する。

御雷は難しい顔だ。

零は二人を見ようともしせず続ける。

「メガネは、レイと…付き合ってる方で間違いない。」

違う表現を使ったかったのか、単にそれを言いたくないのか、零は“付き合ってる”という部分を少しためらった。

それでも、レイの表情はだらしなくゆるんだ。

零の話は続く。

「あつちは、俺の叔父にあたる。」

レイは目をむき、御雷もピクリと眉を動かした。

そこから本当に長かった。

デカくて髪の毛の長い方は、自分の父だと彼は言った。

彼らは兄弟であり、兄の方が生まれたとき両親は何かの理由で経済的に追い詰められていた。

そこで、いろいろ考えた挙句、泣く泣く施設にあずけたというのだ。

その後数年して、弟が生まれた頃には余裕もできて、弟は親元で育つこととなった。

憎くて手放したのではない長男を、両親はできればひきとりたかったが、そのときには兄はどこかに養子として貰われており、取り戻すことはできなかった。

それでもその子を忘れられず、両親は弟に兄と同じ名前をつけ、大切に育てた。

大人になった二人が偶然再会したのは、ほんの数年前。

弟の方は、兄の話を聞かされていたから自分とよく似た男の名前を聞いて、それとわかったという…。

（続）

続き 3

昔のドラマみたいだったが、子供の作り話にしては出来過ぎたそれに、御雷は揺り動かされた。

少し考えてから、彼はたずねた。

「でもな、俺が前に会ったのは、そのアニキの方なんだ。なのに弟が“おひさしぶり”って、アニキのフリをした。これは、なんでだ？」

「名前が同じだから、あっちも勘違いしたんじゃないか？つきあってる零なら自分のことだから、話あわせたんだろ。途中で気付いたろうが、修正しようにもアンタは怒っちまってるし。」

見てきたような（実際そうである）物言いだが、御雷はそれに気付くよりも話に納得していた。

「そ…か。なるほど、な。じゃ、ついでもっときいてもいいか？」

零は良いとも嫌とも言わず、黙っている。

御雷は、なゆた についてずっと気になっていた事を口にした。

「あのさ、なゆたん なんていつも居るんだ？家、帰ってないだろ？あのオヤジが意地悪だからか？」

前回会ったとき、元の姿だった頃の零は御雷の都合の悪い内面を丸裸にしていまい、印象は最悪だった。

零はまたうつむいてみせる。

レイはハラハラして見守る。

「いや…母親のほうに、ギャクタイ、されてて。」

兄妹はのけぞった。

それぞれ違う意味で。

御雷は優しくはないが“可愛いモノ”に弱く、なゆた の見た目は、間違いなく可愛かった。

御雷は解決策と一緒に考えようとする。

「オヤジは何もしてくれないのか？弟の家にひきとってもらうとか。」

なゆた、零は弱々しく首を横に振った。

「父親は、精神的にオカシくなつた母親の相手で精一杯なんだ。弟の方の零も、ばあさんが3年

前から入院して、そのせいで じいさんも参つてて世話をしなくちゃならなくて、だから、レイが。」

ここで零がレイに視線をやる。

あわせろ、という合図。

レイはうなずいた。

「そ、そうなの！零さんタイヘンだから、あたしがね？でもれ、じゃない、なゆくんイイ子だから全然手がかからなくて、返って助かつてるくらいだね、ねー？」

零の話は何もかもが、テレビの中のようだった。

あとでレイが何気なくたずねてみたところ、事実テレビドラマとニュースなんかを参考にでっちあげたということだった。

それでも、全く信じられないということもなく、というより結果的に御雷は全て信じた。

「そっか、タイヘンだったんだな、なゆ太…。」

そつと御雷に抱きしめられた零のすごく迷惑そうな顔が、レイからは丸見えだった。

「あは、あはは、そうなの。だから、今までどおりでいいでしょう？お兄ちゃん。」

やや乾いた笑いと共に、レイが言うと、御雷は冷たい顔で答えた。

「ああ、その弟くんを認めるかどうかは別の話としてな。」

「じよっ、女装はやめてよね！もうバレてるんだから…あの、お兄さんから聞いているし。」

本当は、同一人物だから知っているだけのことだが、レイなりに気をつかう。

兄はさらに言う。

「じゃ面接な。ぜってー不合格、うん、ウソとかついたし。」

「話あわせた、って言ったでしょ？だいたい最初から不合格じゃ意味ないじゃん！」

レイは不満を口にし、零は何も言わなかった。

結局、零が二人に増えてしまい変にフクザツになったが、おかげで、どの零がレイの周りをうるついても不自然ではなくなった。

もちろん、なゆたの父親である“大きいほうの零”も。

その日はそのまま、御雷は零が戻ってこないようにとか何とか言っ
て泊り込み、“可愛いなゆた”と風呂に入って彼のヘソを曲げさせた。

（続）

続き 4

翌日、御雷のいなくなった夕方に、レイは

「はあ、どうなることかと思ったけど、なんかなくてよかったね、零さん。」

と笑った。

表情もなく、ああ、と答えた零は昨日のことを考えていた。

人間じゃない、と言った御雷。

人間じゃなくなつて、と言ったレイ。

御雷は兄弟どちらとも付き合っている、という乱れた関係を心配したらしいが、真実はそうではない。

が、そうでないからいい、という状態とは言えない。

まず、本当に“人間じゃない”こと。

そしてその上、人を殺すこともある悪魔だということ。

妹を溺愛する御雷が、いや、彼でなくとも兄であれば、家族であれば、“そんなモン”とレイと一緒に暮らすこと、どこるか近づくことすら許しはしないだろう。

許されない。

それが自分たちの“今”ではないか？

そう考える一方で、許すも許さないもない、と零は思う。

自分の好きにするだけで、誰がどう思おうが関係ない、俺はそう思っている、と。

俺、は。

知らぬうち、レイをじっと見つめてしまっていた。

照れた顔が、こちらを見つめ返している。

「なに？」

「…二股できるツラか、って思ったただけだ。」

たちまち悔しがる顔になり、レイは文句を言う。

「えーヒドーイ！それ絶対けなしてるよねー？」

自分がからかって、レイが振り回される。

“今まで通り”の会話に、ほんの少しだけとはいえ、不本意ながら零は安心を感じていた・・・。

14 オマジナイ

「なゆ なゆ、見てえ。」

ご機嫌のユウちゃんが なゆ、こと子供の姿の零の目の前にぶら下げているのは、ピンク色のクマのストラップ。

小さなそのヌイグルミは、胸の部分にさらに小さな、真っ赤な色をしたハートがついていた。

零はそれを見て、むき出しの心臓に見えるな、という感想を持った。

もちろんそれがユウちゃんとは違う見方と予想できるから、口には出さない。

「可愛いでしょー？ パパとデートしてあげて買ってもらったの。」

「ヌイグルミに興味はない。」

零が話を切り上げようとすると、ユウちゃんのことを気になっているミッチーは彼女の話題に反応した。

「あーっ、ユウちゃん “オマジナイ ベア” 買って貰ったの？ スゴイ！ それ、効くんだよねー！」

零だけがそれを知らなかった。

「オマジナイベア？」

疑問を含んだ声に、ミッチーが説明でこたえる。

「そう。これさ、背中があくようになってソコに願い事をかいていれておくと叶うんだ。ユウちゃんのベアはピンクだから、恋が叶う “ラブリーベア” 。」

「ふうん。」

説明を聞きながら零は、心臓むき出しで背中がパツクリ開いてて “可愛い” とはいい趣味だ、と思った。

そんな彼の前で、ユウちゃんとミッチーがじゃれはじめる。

「ね、ユウちゃん誰の名前書いたの？ 教えて。」

とミッチーが言い、

「ないしょー、きやはは！」

ユウちゃんは楽しそうに笑う。

零には答えがわかつている。

だから必死でそれを知りたがりつつ、“必死さ”は隠そうとするミッチーを見ているのが面白い。

零の教育が良いおかげで、ユウちゃんもこの状況を楽しんでいた。必死なのはミッチーひとりだ。

ミッチーのもやもやする気持ちを、もっと楽しみたいとも思ったが零の手には荷物がある。

特売のタマゴ他、今日の食卓に乗る予定のモノだ。

買い物帰りに呼び止められただけの彼は、さらに子供達の遊びに付き合う気はなかった。

「じゃあな。」

「えー、行っちゃうのお？」

引きとめようとするユウちゃんを、いつもと同じように

「俺は忙しいんだ。」

という一言で撃退すると、さっさと背をむけて歩き出した。

(続)

続き

軽快なメロディーが部屋に鳴り響く。

レイのケイタイからだ。

充電中だったそれを手に取り、レイは話し始める。

「もしもし。…え？あ、うんうん…。」

楽しげに話すレイの顔の横で揺れているのは、ピンクのクマのストラップ。

20分ほど話してやっとレイが電話を置くと、零はそれを手に取り、ストラップをしげしげと眺めた。

「零さん、それ知ってる？」

レイが言ったそばから、零はクマの背中をあけようとする。

レイは慌てた。

「あつ、ちょ、ダメだよー！」

零は彼女に冷めた目をむける。

「どうせ俺の名前書いて入れたんだろ？お前、マジナイって漢字で書けるか？」

零からケイタイを取り返ししながら、レイはそれに答える。

「知らない。もー。零さん以外の名前かもしれないじゃん。勝手に見ないでよ。」

「ふふん、なら俺もせいせいする…まじない、つてのはな、“呪い”って書くんだ。」

レイが意外そうな顔をする。

「え、そうなの？えー、同じ字なんだあ…えー…」

残念がる声をだすレイに、零は無表情に言う。

「だから、お前は俺にノロイをかけてることになる。」

レイは動揺する。

「ええっ？そんな、そんなことないよー！」

「くくつ、やっぱり俺なんじゃねえか。」

あう、と小さくつぶやいてレイが下を向く。

「…俺に呪いはきかない。“悪魔”ってのはな、憎しみだとか恨みだとか、そういうノロイの元になるモンでできてるんだ。」

「違うよ?」

少し顔を上げたレイは、悲しそうでいて、だけどちょっとだけスネた表情をしていた。

「零さんに、かけてるんじゃないもん。あたしが、もっと勇気を持てるように、クマさんに応援してもらうんだもん。」

「は?」

「それにー、このオマジナイは、憎しみとかうらみなんで、全然関係ないじゃん。」

視線に少々のおれをこめ、零は呪いの仕組みをさらに説明してやる。

「最初はな。だが、好きな相手がいつまでも振り向かなければ…変わってくるもんなんだ。自分を見てください。憎んでみたり、相手の恋人を恨んでみたり。本当にそんなもんが効くとしたら、その時だろうよ。」

零はピンクのクマを指差した。

レイはハッキリ不機嫌な顔をしている。

「そんなことないもん。あたしは、零さんを憎んだりしないし、もし…零さんに好きな人いるなら、応援するもん。その人だって仲良くするよ。」

天使の好みそうな言葉は、零をいつも苛立たせる。

たとえそれを口にしたのが、気に入った相手であっても。

「いい人のつもりか?それじゃ欲しい物は全部誰かにとられてオシマイだ。ほんつとにバカだなお前は。」

レイがシヨックを受けた顔をしているのは、零の表情と声音が最早冗談を言っている時のそれではないからだ。

子供であっても ゆうな(ユウちゃん)の方が余程賢い、と零

には思える。

彼女と零の相性は悪くなかった。

あいつなら、ノロイを利用して俺を手に入れようとするだろう。他の女がいたなら消そうとする。

ためらわないはずだ。

ゆうな　と主従契約を結びなおしたいと言ったら、応援するといったコイツはそれを許すだろうか。

本気だと言えば、もしかしたら。

零のアタマの中だけで行われた、レイを捨てるシミュレーション。さっきの言葉のせいでうつむいている彼女は、それを知っているかに見えた。

（続）

続き 2

小さく、つぶやく。

「零さんには、わかんないよ。あたしの気持ちなんて。」

その言葉どおりなら、自分が感じはじめた重苦しさは一体何なのだろう。

わかっている。

わかっている、それが愚かさからくるものだとも知っている。

共感など到底できない、それだけのことだ。

「説明してみろよ。」

レイの手が、ピンクのクマをきゅっと握るのが見える。

顔をあげたレイは、もういつもの明るい目をしていた。

「だからね、これはノロイじゃなくてオマジナイなの。零さんにイジワルされても、クマさんがガンバレガンバレ、って。そして頑張ったあたしは、もっと可愛くなって、零さんの気持ちもわかるようになって、二人は末永く幸せにくらして、めでたし！わかった？零さん。」

バカだからこりない。

そう思ってしまうこともできる。

さっきまでのうつむいていた姿を忘れて。

クマを握った指の、かすかな震えも無視して。

その彼女を忘れることも、無視することもできない零には今、レイがただ強がっているのだとわかる。

零への想いをこめたオマジナイを、その当人に否定され、気持ちまで否定されたと感じているはずの彼女。

たった今も、きつとくじけそうなのだろう。

強がって、無理をするためのオマジナイ。

無駄な努力。

何も得られなくても、自分ひとりが損をしても、きつとレイは誰

かのために笑っている。

愚かで、哀れな我が主に、零は腹が立った。

今の零なら命令一つで、何でも彼女のために手に入れてくることができるのに、彼女は何も望まない。

欲しいはずの零の気持ちさえ、ただ自然に自分に向くのを待っている。

命令なんかできない、したくない。

いつか彼女はそう言っていた。

零は、はつきりと覚えている。

実際、本当に困らせたりしないかぎり彼女はそんなものを持ち出さない。

そうしてくれた方がお互いに、どんなに楽か知れないのに。

零は何も考えず、“彼氏”の演技をしていればいい。

レイはただ、その幸せにひたつていればいいだけ。

悩まなくて済む。

苦しまなくて済む。

それは優しい嘘。

嘘で、いいのではないか？

厳しい真実よりも、優しい嘘のほうが・・・。

嫌がるだろう事は予測できていても、零はそれが正解だと思えた。

「わかんねえよ、回りくどすぎる。命令すれば今すぐにだって、俺は“彼氏”になってやれるのに。」

それが、

大嫌いだ

と聞こえた顔を、レイはしていた。

その顔で、零は全てが嫌になった。

アタマの中から、腹の奥から湧き出てくる、気持ちの悪い熱さ。原因のわからない息苦しさ。

もう何度となく自分を刻んだ、冷たい刃が光る気配。
少し やりとり を間違うたび、こんな目にあわされ続けるのか。
こういう時の居心地の悪さも、凍える痛みも、そばにいるだけ大
きくなっていく。

最近では、からかってもいつも面白いという訳でもない。

笑いかけてくるから、悲しい顔が気になる。

ちかくにいきすぎるから、離れて行くのを感じる。

ならもう、笑ってくれなくていい。

無理をさせるくらいなら、いつそこちらが離れればいいのだ。

気持ちも、笑顔も届かない距離に。

考えがここに至った瞬間、おかしい感覚がおとずれた。

たとえるなら、デジャヴ。

くりかえす くりかえす くりかえす

頭の中で、自分自身の声がこだまする。

くりかえす？何を？

響き続ける意味のわからない警報を、零は無視する。

「俺は、お前の使い魔だと言っただろう。」

零は“彼氏”に変わり、レイに近寄る。

レイの表情が硬くなった。

「命令すればいいだけなんだよ、お前は。」

顔を近づける。

至近距離の瞳には、一面の拒絶がうつっている。

予測済みの反応。

かといって何も感じないわけではなかった。

それでも後戻りする気はない。

(続)

続き 3

「どんなタイプがいい？優しくも、冷たくもなれるぞ、俺は。」
優しく髪をなでてやり、微笑んでみせると、レイの顔が悲しげに歪んだ。

凍りつく痛みと、全身を貫く衝撃。

何を叩きつけられればこうなるだろうか。

一瞬、自分に何が起こったのかわからなくなる。

体が冷えていく気がして、感覚が戻ってくると外側には何も起こっていないことを思い出す。

嫌われた、そう思っただけ。

一番嫌がる事を今言っていると、知っているだけだ。

彼女にふれていた指先は、いつのまにか少し引いた位置で宙に浮いている。

どこよりも一番、冷たいこの手は永遠に宙をさまようんじゃないか？

不意にそんな考えがよぎり、それがたとえようもない暗さをもった不安に変わる。

二度と、触れられない。

だって、そうだろう？

彼女が望んでいるのは、愛だ。

それがないから、拒絶された。

だが、俺は知っている。

愛などどこにもないと。

その正体は幻想、愛はエゴの呼び名の一つでしかない。

自分を“愛して”くれるから、“愛され”たいから、“愛する”。

全て結局は自分のためでしかない。

だからこそ、自分が愛など持たない、持つことができない事も、俺は知っている。

永遠に彼女に、この人に、あなたに触れる資格などない悪魔。心がカラになる気がした。

せめて同じ幻想の中に居たなら。

アタマをよぎる仮想は無意味だ。

それでも表面上はさつきと何も変わらない顔をした零と、泣きそうなレイ。

数秒見つめあったあと、レイがつぶやく。

「そういうの、イヤなの・・・。」

彼女が押し殺しているのは、怒りではない。

今この瞬間、誰かが自分を殺してくれれば内側で暴れるこの苦痛から逃げられるのに。

零はそう考えながら、ウンザリした表情を作ってみせる。

「知ってて、言ってる。」

嘘には自信があっても、今だけは不安が残った。

レイのまぶたが閉じる。

彼女の頬を、光が駆け降りた。

あれは、キケンなものだ。

零はぼんやりとそう思った。

触れればきつと、自分は焼き尽くされて何も残らない。

それを手でぬぐうレイの姿は、子供と変わりがなかった。

すっかり涙声になりながら、レイは今の状況自体を否定しはじめた。

うけいれがたい現実を。

「ねえ零さん。やりすぎ、でしょ？ からかってるつもり、でしょ？ でも、泣く…まで、やったら、シャレンなんないよ。」

話す間にも、ぱたぱたと涙はこぼれる。

ひとしずくごとに、零の中の何かが、ぼろぼろになっていく。

触れてさえいないのに、壊されていく。

もう一度レイの言葉を突っぱねるのには、少々の気力を要した。少し離れれば、つらくない、ハズだ。

「からかつてなどいない。現実的に考えろってことだ。どうせ俺は、逆らえない。」

レイが目を見開く。

まつ毛には、小さな光が幾つも、いくつも。

すぐに力いっぱい目を閉じると、顔が赤くなっていき、下を向く。さつきよりも速度と数を増して、光る珠が落ちる。

凍てつき、次の瞬間には燃え上がり、零の体の中を獣が暴れまわる。

だんだんと大きく身体を揺さぶるそれは、鼓動に似ていた。

焼かれても、凍り付いても、零は平気な顔で見えいられると思っていた。

肩を震わせて黙って泣くレイを。

泣き顔を見せず、声を殺す彼女を。

（続）

続き 4

しかしそれは、いつまでも続かなかった。

「・・・きゆう・・・」

押さえきれない声が、細く漏れた。

子犬の鳴き声そっくりな、か細いそれは零の中でぼろぼろになっていたモノを、完全に壊した。

「泣くならフツーに泣け。“そういうの”がイヤなんだ、俺は。」
レイがわずかに顔を上げた。

かろうじて、零を見ているのがわかる。

彼女が何を言うのか、が怖くて、零は言葉を重ねる。

「隠し事だとかガマンだとか。見えみえなんだ、俺からすりゃ、だから」

文句をいいながら、零は唐突に気付いた。

この後自分がどうするか、どうしたいのか。

らしくない表情をうかべそうな顔を、呆れを装って片手でおさえ、隠した。

かすかな熱を感じた。

それでも、そうまでしても止められない自分。

「だから、この件はナシだ。無かった、ってことに...してくれ。」

レイは鼻をすんすん言わせるだけで、中々答えない。

大泣きしていたので、それがカンタンにはおさまらないのだ。

その沈黙が、零を焦らせる。

「・・・あ、泣かせたのは、悪かった。確かに、そこまですることとは、なかった、な。」

レイの反応が気になって、顔をおおっていた手を放す。

目が合った。

彼女は、信じられないことに出会った顔をしていた。

「謝って、くれんの？」

零は声を出すことがなぜかためらわれ、黙ってうなずいた。その瞬間、空気が軽くなった気がした。

ゆっくりと、レイの表情から悲しみが消えて行く。

「じゃあ、じゃあね、あのねっ…ホントは、ね？」

いいにくそうにするレイに、零はいつも通りのフリで言う。

「何だ。」

安心したせいか、うまくダルい声が出た。

レイの上目遣いがこちらをうかがっている。

「やっぱもっかい、さっきの。イイコ、して？」

許された安堵、与えられた資格。

微笑んでしまいそうな表情を、嘘だと思われたくなくて固める。

手を伸ばす。

濡れてしまった頬を、ぬぐう。

指が髪に触れる。

逃げないことに安心して、そつと撫でる。

レイが嬉しそうに微笑み、零は目の前が真っ白になった。

こうなるハズだった。

自分はこれを望んでいたのだ。

やっとそれに気付く。

レイの戸惑った声で、我に帰る。

「あ、あれ？零さん、だっこじゃないよ？イイコだよ？」

声は、腕の中から聞こえていた。

「これも、謝罪のうちだ。」

勘違いさせれば、また泣かせる。

そう思うと、まだ胸のうちは明かせない。

自分でもわかっていないのだから。

「…うん。」

背中にレイの手が回る。

彼女を撫でてやりながら、零は自分を苦しめ、時に喜びを与え、つかまえているものが何なのかを考えた。

一番思い当たる、“ありえない それ”以外の可能性を。

15 めざめるゆめ

「何百年たつても、俺は俺か。くり返すのは…もうゴメンだ。いかげん思い出せよ、“俺”…」

そう言つて諦め顔で笑い、俺の中の俺は消えた。

“夢”を見た。

前は、夢なんて時々しか見なかった。

どこか、明るい場所に俺はいた。

このところ、数日に一度のペースで夢を見る。

キラキラと陽に光る緑が、俺の視界の中で楽しそうに、踊るようにゆれている。

思い出せそうで思い出せない何かがひっかかっているような、もどかしい目覚め。

光、緑、空の青、・・・明るくあたたかい光景の中、けれどなぜか青とも緑ともつかない色が悲しみを運んできて、夢は終わる。

美しい色彩と断片的なイメージを残すその夢の、肝心な内容は、あまりよく覚えていない。

けれど、思い出さなければいけない気がする。

もどかしさが不快で、それでいてなんだか懐かしいあの夢。

やがてその夢を見る頻度はだんだんと高くなってゆき、起きた後に残る夢の印象や、映像の切れ端も多くなっていった。

そしてそれは毎晩のように訪れるようになり、夢の内容も少しはわかるようになった。

楽しそうに語りかけてくる、少女の夢。

あの緑色は、深い森。

黒々と茂り、そびえる木々の間を見上げると、その隙間に、高く青い空。

紅茶色の髪をした少女が、すぐそばで俺に笑いかけてくる。

まるで、レイの笑う顔みたいに、不快感もなく自然にそれは俺の心に入り込んで……。

見続けるうちに、俺は気づいた。

これは、記憶だ。

忘れ去った遠い記憶、封じ込められていた、俺にとって不利益な記憶が目覚めようとしている。

思い出すのは危険だと、本能が告げる、けれど平和な、タイクツそのものの風景。

木漏れ日の差す美しい、深い森。

笑う少女。

レイに似た、その笑いかた。

なぜ、忘れていたのだろう。

俺は、その笑顔がもたらすもの、”それ”を知っている。

それ？

って、何だ？

その男の声は、いつもやわらかに響く。

「ねえ、聞かせて」

今はわからなくなってしまうっている何か。
思い出してはいけない何か。

「君は」

優しい男の、その瞳は、さわやかでいて、けれど忘れていた悲しみを呼び起こすような色。

腕の中に彼女がいる。

閉じたまぶたは、もう二度と開くことはない。

「おまえは、・・・を！」

涙をためた瞳で、けれど怒りの形相で俺を責めているのはスズキ・
・いや、こいつはスズキなんて名じゃない。

このときまだコイツは人間で、俺たちのような“名を持たないもの”ですらなく、本当の名前があったはずだ。

その記憶も、また夢の中。

お前は、本当は誰だ？

いつから俺を知ってるんだ？

お前と俺は、偶然出会ったのではなかったのか？

なぜかお前と戦う気にならないのは、お前が悪魔の俺に何もしないのは、この記憶に関係があるのか？

夢としてよみがえる記憶の断片は、だんだんと増えながらも全てはそろわず、全体像までは把握できない。

「僕は、ずっとそれを待ってた。自分で思い出してごらん、もう少しだ。すべて思い出したら、君にききたいことがある。答えは、
・もうわかってるけど、どうしても君自身から聞きたい。」
この記憶は何なんだ？

そう訊いた俺に、複雑な表情でスズキは笑いかけた。

痛みを抱えているような、懐かしむような、愛しいものを見るような、それは分類しがたい、どんな表現もあてはまらないような顔だった。

もう少し、そういわれても俺には夢しかない。

夢が与えてくる情報以外、自分では何も思い出せそうになかった。

「君は、・・・・・・・・てた？」

ああ、そうだ、その通り。

それは、遠い遠い記憶。(続)

続き

森の奥深くには悪魔が住み着いていて、生贄をささげれば願いをかなえてくれる。

村の近くの森にはそんなうわさがあつた。

黒々と茂る大きな森は、どこまで続くのかわからないくらいに広く、大人でもあまり深くまで足をふみいれることはなかった。

薄暗い森のところどころ、光でできた柱のように木漏れ日が、太く、細く差している。

しずかなその風景に、子供たちの声が響く。

少女は、友達と甘い木の実をつみにきていた。

そこへ足を踏み入れるのは禁じられていたものの、そういう場所ほど魅力的なものが隠されている。

森でとれる木の実、どこのものよりも甘く、大きかった。

子供たちだけが知っている秘密のその場所へゆくと、思った以上にたくさんの実がなっており、彼女たちはきやあきやあと歓声をあげながらそれを夢中でつんだ。

そうするうち、だんだんと森の奥までできてしまっていた彼女は、いつのまにかそばにいた友達が、一人も見当たらなくなっているのに気づいた。

呼べばすぐ返事してくれるよね、と彼女はそれを気にしなかった。かなりの時間がたち、かごいっぱい木の実がとれて、満足した彼女は、大きな声でみんなを呼んでみる。

「リジー、ノエル、みんなどこ？」

耳をすましても、しんと静まり返った森からは、返事はおろか物音すら聞こえてこない。

「みんなー？どこおー？」

自分がきたであろう方角へ、数歩踏み出す。

なんの気配も、人影もない。

時折、どこかから鳥の鳴く声と、高いところで木の葉同士がこすれあう音だけが聞こえた。

木漏れ日が、その角度と色をゆっくりと変えてゆく。

みんなを、知っている風景を探して、闇雲に歩き回ってみるが、いつこうに状況はよくならなかった。

いつのまにか、日は沈みかけている。

どうしよう、もうかえれない。

こわいあくまがでてきたら、どうしようどうしようどうしよう。

「うう、ぐすつ・・・ふうつ・・・え」

泣きながら、それでもとぼとぼと彼女は歩く。

けれど、もうどこに向かって歩いていいのか見当もつかない。

「・・・かえ、りたい、ようつ・・・ぐすつ。」

涙でぐしゃぐしゃの顔を、手でこする。

視界がふさがり、

「うわあっ！」

それでも歩き続けていた彼女は、木の根に足をとられて転んだ。

寂しくて、不安で、もう立ち上がる元気もなく、少女はそのまま本格的に泣き出す。

「うるさい。」

すぐそばで、低く恐ろしい声が聞こえた。

彼女の体の下にあった、木の根と思えたものが動く。

薄暗い森で、木によりかかりながら地面に座っているその人の顔は、あまりに白く、ほんのりと発光しているように見えた。

「・・・あ、・・・あくま！」

黒い衣服に身を包み、青白い顔のその男は、長い黒髪を振り乱し、人間の姿をしてはいたがひどく不気味だった。

「だったら、なんだ？食ってやろうか。」

彼が伸ばしていた脚を折り曲げると、彼の足の上に倒れこんでいた彼女は引き寄せられる形になった。

「いつ・・・ひい、やだよぉ・・・」

驚いて涙も引つ込んでいた彼女だが、また泣き出しそうになる。

おおきな手が彼女の頭部をつかむと、上を向かせる。

男の目がぼんやりと光っているのが見えた。

食べられる、食べられるのはやだっ！

そう思った彼女は、身代わりを思いついた。

「これっこれあげるっ！食べるならこっち！」

さっきたくさんつんだ甘い木の実だ。

赤くつやつやした、かごいっぱいのそれを、悪魔に見せる。

だめかもしれないけど、神様お願い！

彼女は目をぎゅっと閉じて、悪魔が何か言うのを待った。

・・・ぶちゅっ。

水気を含んだ音がして、おそろおそろ目を開けると、悪魔が木の実をぱくついているところだった。

長い髪の間からのぞく顔に、表情はない。

うつすらと発光する目が、彼女にその視線をよこす。

「お前・・・」

悪魔が恐ろしい声で話しかけてくる。

「いつまで俺の脚の上で寝てるんだ。」

「あっ！」

彼女はあわてて立ち上がった。

ぶちゅ、ぶちゅ・・・。

悪魔は次々とかごの中の実を食べてしまう。

全部食べ終わったらあたしの番かもしれない、そう思い、彼女は音を立てないようにして、そっと悪魔から離れようとした。

（続）

続き 2

「どっちへ行くつもりだ。」

「・・・！」

言いながらも悪魔の視線はかこの中の木の実に注がれていて、こちらを見てはいない。

彼女が凍りつくように突っ立っている横で、見る見るうちにかこの半分くらいを悪魔は食べてしまった。

満足したのか、指についた汁をなめ取っている。

「で？」

と、彼は言った。

「で？」

意味がわからず、彼女は問い返した。

「なんか俺に願うことはないのか？たとえば・・・どっちへ行けば帰れるのか、とか。」

また、あの光る目で彼女を見ると、かすかに口元だけで悪魔が笑った。

「え・・・でも、イケニエ・・・」

悪魔は願いをかなえるときに、イケニエを必要とする。

その『イケニエ』の意味は幼い彼女でも知っていた。

「別にイケニエじゃなくても、俺を満足させる代価があれば願いはかなえてやるさ。森から出してやるくらいなら、この木の実でもかまわない。」

かごには、まだ半分木の実が残っているが、悪魔はもうそれに興味はないようだった。

森から生きて帰れるとわかったとたん、彼女は元気をとりもどし、そのかごをしっかりと手に持った。

「あの、ありがとう！」

同時に、彼女をここから出してくれる、という悪魔への恐れもだ

いぶなくなり、彼女は笑みすらうかべていた。

「・・・」

答えずに立ち上がった悪魔は、彼女が今まで見たこともないくらい大きな体をしていた。

声を失い、彼女は再び恐怖で凍りついた。

固まってしまった彼女を、悪魔は体のわりに細い、長い腕でひよいと抱えると、どこにかくしていたのか、恐ろしく大きいコウモリのような黒い翼を羽ばたかせた。

森の入り口までは、ほんの一瞬でついたように感じた。

もうすっかり日は沈み、あたりの景色はすべて夜の顔をしていた。地上に降ろしてもらうと、彼女はさつと悪魔から距離をとる。

黒い森を背景にして黒衣の悪魔が立つ様子は、白い顔だけが闇に浮かんでいるようにも見えた。

もうここからなら帰れる、と彼女は安心した。

不意に白い顔が消える。

悪魔が森へ帰ろうと、背を向けたのだ。

少し気持ちが落ち着いた彼女は、怖いけれど、帰れることがうれしくて、もう一度悪魔にお礼が言いたくなった。

「ねえ！」

表情のない、白い顔がふたたび現れる。

かごの中から、ひときわ大きな実をいくつか取り出すと、彼女は悪魔に近づく。

「ありがとう！これあとで食べて！」

差し出されたそれを、悪魔は大きな手で受け取ってくれた。

声も、見た目も、確かに恐ろしいが、彼女にとって悪魔は恩人だった。

「じゃあね！またね！」

別れ際、そんな言葉をかけてしまっくらいに。

その後、どんなに森の奥深くへ分け入っても、彼女は悪魔に出会うことはなかった。

なぜだか、迷うことも。

（続）

続き 3

時がたち、少女はもうすぐに泣いてしまふ小さな子供ではなくなっていた。

もうそろそろ、大人に近づく年齢だ。

けれど、彼女は泣いていた。

「母さん・・・」

彼女は、もう何日も床にいたまま、今ではほとんど意識のない母のそばで家族とともに泣いていた。

原因のわからない病気で、ある日突然母は倒れた。

家族がかわるがわるに一日中そばについて看病しつづけたが、だんだんと眠っている時間が増えていった。

村医者もとうに、さじを投げていた。

彼女のうちは貧しい村の一般家庭で、高名な医者と呼ぶ余裕などあろうはずもなく、家族さえ母のことはもうあきらめていた。

けれど、彼女はあきらめられなかった。

今まで育ててくれた母、たくさん思い出、母がいなくなることなど考えたくもなかった。

父や、兄弟たちの悲しむ顔も見たくない。

そのためなら、自分の命をひきかえにしても。

彼女は、森へ向かった。

今こそ、悪魔に命を差し出すときだ。

会えなくても、何日でも探す気だった。

そんな覚悟をし、森に入っていくらも歩かないうちに、彼女は転んだ。

「いたっ！」

体をおこして、自分がつまづいたものを確認すると・・・いつかのように、あの悪魔がいた。

昼間の、まだ明るい森の中、そこだけに夜が広がる。

黒い服と黒い長い髪に囲まれて、青白い月のような顔があった。
あの時と同じく、木によりかかって座っている彼が伸ばした足に、
彼女はつまづいたらしかった。

黒い髪の間から禍々しいほどに鮮やかな紅色をした唇が、うつすらと笑っているのが見える。

わざと足をかけたのかもしれない。

「何すんの！」

彼女が強気なのは、大きくなったせいもあるが、面識があるため、
必要以上に悪魔を恐れていないせいでもある。

「・・・くくつ。知ってるぞ。」

それでも、その低く耳にまとわりつく声はやはり少し恐ろしかった。

「何を！」

ひっこみがつかず、勢いだけで彼女は言い返す。

「・・・さつきまで、泣いていた。」

なぜ知っているのか。

これも、悪魔の力なのだろうか。

「お前の、母親かあ。命までとるような願いじゃないな。」

彼女がその命をささげる気で来たことも、彼はわかつているようだった。

「あれはなあ、よわーい、魔だ。俺が食ってやろう。」

「え・・・じゃ、じゃあ、あたしは、どうしたらいいの？」

命までとらない、とは言われたものの、それをささげる気で来た
彼女は、代わりのものなど何も持っていない。

悪魔が白い手でゆっくりと髪をかき上げた。

さえぎるものが何もなく、明るい日の下で見る彼の顔は、病的な
印象ではあったが、恐ろしいというほどのものでもなかった。

逆に、その不思議な色の瞳、何の感情も読み取れない目つきが彼
女の気を引いた。

視線が交わると、なんだか彼女は少しだけ鼓動が早くなるのを感じ

じた。

怖くなどないつもりでいた、けれど、あたしは、やっぱり怖がっているのだろうか、と思う。

あの時、森から帰してもらったときに見た、黒い巨大な翼を思い出していた。

「あの赤い実。かごにいっぱい。」

彼女は拍子抜けした。

「そんなことでいいの？」

あの実の季節はちょうどいまごろ。

難しいことではないが、覚悟してここまで来た自分はいつだってうなるのだ。

「夕方までにここへ持って来い。」

そういい残すと、悪魔は立ち上がり、木陰へ消えた。

文字通り、一瞬で、あとかたもなく。

彼女は言いつけどおりに木の実をつむと、悪魔と会った場所で彼を待った。

すっかり日がくれ、夜になっても彼が現れないので、彼女は木の実だけを置いて、母の様子を見に家へと戻った。

母は夕食を用意し、家族とともに元気な姿で彼女を待っていた。

彼女は、次の日も森へ足を運んだ。

まだちゃんとお礼を言っていない。

どうしても、もう一度、会いたい。

「悪魔ーっいるんでしょ？ねえ、あーくーまーっ！ああーくーくうーーまあああああー！」

森の奥深くで、彼女は声を限りに何度も叫ぶ。

鳥や、小動物がその声におびえ、がさがさと散り散りにどこかへ逃げていった。

「くーらーっあくまーっでてこーい！あーー！くまーっ！」

「うるさい。熊に出てきてほしいのか、お前は。」
背後から、低い声でだるそうなツツコミが入った。
どうやら悪魔は騒がしいのが嫌いなようである。

（続）

続き 4

振り返り、見上げる。

むかし見た彼が、異様に大きく感じたのは自分が小さいからだと思っていたが、成長した今見ても、やはり彼は十分すぎるほど大きかった。

けれど、その体は大ききのわりに妙に細く、

「枯れ木みたい……」

そんな感想を彼女は持ち、同時に口に出していた。

「……」

長い黒い髪の間からわずかにのぞく顔を見ると、その感想は明らかに悪魔の機嫌をそこねていた。

「あああつ、ごめんね！ 違うの、今日はお礼いいにきたのに……」

ぱたぱたと手を振り、失言を取り消す動作をすると彼女は慌ててそう言った。

悪魔の表情から不機嫌さが消え、なんの表情も浮かんでいない状態に戻った。

いくらのぞいても、冷たい石のようなその瞳には、一かけらの感情もみあたらない。

その肌は、死人のように青白く、紅い唇は、固まりかけた傷口のように不吉な色。

振り乱した長い黒髪、人並みはずれた大きさの、やせすぎた体を覆う服は上から下まで黒一色。

彼の姿は、たしかに異様だ。

けれど、もう二度も、彼に助けられた。

それに、なんの感情も読み取れないその瞳は、なにかを失くした、喪失感そのものの色に見えた。

涙が枯れて、それが血に変わって、それすらも体中からぜんぶ絞

り出してしまったそのあのような、そんな底知れない空虚さがそこにある。

その目を見ていると恐ろしさよりも、何かしてあげたい、その瞳に少しでも明るさを取り戻したいという気持ちがあった。

改めて彼に向き合い、彼女は確信した。

自分の胸にある、彼に対する感謝と、少しの恐れ、そして、それ以外の別の感情を。

「礼ならもらった。」

「違うよ、ちゃんと、ありがとう、っていいかったの。」

彼の目を見て、彼女が笑った。

悪魔は、表情を動かすことなくただ彼女を見ていた。

「ねえ、あのね、あたし、なんかもつとできることないかな？」

「・・・」

彼女の言っている意味がわからないのか、悪魔は何も答えない。

「あなたの目、不思議な色だね。」

答えを待つ間ずっと見ていた彼の目は、見れば見るほどフシギで、淡いグレイにも紫色にも見えた。

「何が言いたい？」

確かに彼の言うとおり、今は目の話をしていただけではない。

「たとえば、・・・たとえばね？あなたの身の回りの世話とか、

あたしがしてあげようか？ご飯作ったり、掃除したりさ。ずっと・

ずっとそばにいて、さ。」

「いらん。どうしても何かしたいなら、・・・そうだな、あの実がなる場所。教える。」

「え」

恥ずかしさを押しての告白を、速攻で拒絶された彼女は、落胆と驚きのまじった声をあげた。

案内してやると、その場で悪魔は実をもいで、一つ口にふくんだ。赤い実が、彼の紅い唇の中に消えてゆくのを彼女は目で追う。

「で？」

悪魔は、いつかのようにそう言った。

「で？」

意味がわからず、彼女も、いつかのように繰り返した。

「俺の世話はいらない。それ以外に用は？」

面と向かって二度もハッキリ拒絶されると、気分が悪いのも通り越し、彼女は開き直った。

「あんた、あたしのこと嫌いなのか？」

スネた言葉は、一応質問の形をとってはいたが、なんとなく嫌われているのではない気がしていた。

嫌いななら、多分相手はしない。

この悪魔は、突然現れたり消えたりできるくらいだから、そうしようと思えば彼女に見つからず、もっと静かな森の奥で呼び出しを無視することもできるはずだ。

それが、こうして出てきて話に応じてくれる、ということは少なくとも自分を嫌ってはいないだろう、と彼女は考えていた。

果たして彼の答えはこうだ。

「別に」

無表情なまま吐き出されたその答えを、だいたい予想はしていたものの、彼女には淡い期待もあった。

もしかしたら、少しくらいは気に入ってくれてたりするんじゃないかと。

その期待は裏切られてしまったが、とにかく嫌われていないなら、まだ望みはある。

「じゃあ、うーん・・・またあんたに会いたい時は、どうしたらいいか教えて？うるさいの、やなんですよ？」

楽しそうにそう言って彼女は悪魔の顔をのぞき込んだが、同時にゆったりと、ごく自然な動きで横を向かれてしまった。

顔のほとんどを不気味に垂れ下がる前髪に隠され、鼻と口の一部しか見えなくなってしまった彼の表情は、よくわからない。

「呼べ、ここで。」

「それだけ？なんて、呼べばいい？あんたの名前、教えてよ。」

「悪魔、でいい。」

「悪魔って、だってそれ名前じゃないでしょ？」

「俺に名前はない。ただの、悪魔だ。」

個の名前がない、というのはちよつと人間では考えられない。

けど、悪魔ってそういうものなのかも、と彼女は考え、なんとなく納得した。

「わかった、悪魔って呼べば、来てくれるんだよね？」

肯定の意味なのか、彼は答えない。

「絶対来てよ？あたしはね、レイアっていうんだ。」

何も言わず、どこを見ているのかもよくわからない悪魔に向かって明るく笑う彼女は、彼に惹かれ始めている自分を自然に受け入れていた。

（続）

続き 5

だが、彼女、レイアのまわりはそうではなかった。

仕事の合間をみつけては、毎日のように一人で森へ消えるレイアを、あるとき女の友人がこっそりと追いかけた。

きつと恋人とでも会っているのだろう、顔を見てやれ。

そんなイタズラめいた気持ちで後をつけた友人は、その光景を見て自分の行動を悔いることになる。

黒く細長い影に寄り添うレイアは、その異様に大きな影を、こう呼んでいた。

「ねえ、悪魔？」

逢瀬の相手は、悪魔。

自分の友人が悪魔に魅入られてしまったなんて！

そつとその場を離れると、友人は村へと帰り、一人悩んだ。

その彼女に、声をかけるものがいた。

「どうしたの？ そんなところで一人していると、寂しいでしょ？」

「ラファエル・・・」

天使の名をもつその青年は、彼女たちの共通の友人の一人だった。いつでも明るく笑っていて、誰よりも優しく誠実で、整った容姿をした、まるで神に愛されているかのように出来すぎた彼は、村の人々から、老若男女を問わず好かれていた。

彼女もその一人だった。

彼になら、話してもいいかもしれない、と彼女は思う。

優しい彼なら、きつとみんなには黙ったままで力になってくれるだろう。

一緒にレイアを説得して、悪魔からとりもどすのだ。

「んー、それはちょっとまって。」

彼女が見てきたことをひととおり話し、一緒に説得を頼むと、ラ

ファエルはそう言った。

「え・・・なんで？だってこのままじゃレイアが悪魔に」

異様に背の高い体に、上から下まで黒い衣服をまとった妙に細い、気味の悪いシルエット。

あれは、あの恐ろしい姿は本物だ。

なにより、悪魔と呼ばれていた。

救わなければ、彼女たちの友人、レイアは殺されてしまう。

「怖かったのはわかるけど、何もしてないんだからそれが、その人が本物の悪魔かどうかわからないでしょ・・・別にレイアだって何ともないし。」

そうなのだ。

ちよくちよく森にでかけるレイアに気づいてからもう数週間はたっていて、けれどレイアに前と変わったところは何も無い。

元気な姿は、命を吸い取られているようにも傷つけられているようにも見えない。

いつでもはつきり自己主張する彼女は、操られているようにも見えなかった。

それに、そう呼ばれているだけでホンモノの悪魔がいる、などとはすぐに信じられることではない。

なにかの目的で、悪魔を名乗っているただの人間かもしれない。

とはいえ、相手が本当に悪魔なら、放っておいていいはずがない。

「でも・・・」

なおも何かいおうとする彼女を制して、ラファエルは言う。

「僕が確かめてくる。」

黒々と茂る森。

木々の間から、細く差す陽の光。

時折、鳥の声と、どこかで動物がたてる葉音がかすかに聞こえてくる以外は静かなその場所で、男女の話し声とする。

「・・・で、結局何の用だ。」

「会いたかったんだもん。」

「うつとうしい・・・食うぞ。」

「悪魔は、そんなことしないよ。アハハ。」

わかりきったことだ、というように笑う少女の声。

脅すような口調で話していた低い声は、あきらめたように黙り込んだ。

かさり、と、彼女たちから少し離れたところで茂みが揺れる。

悪魔がそちらに目をくれた様子は、その長い髪に隠されて見えな

い。
「ねえ、悪魔。」

レイアが悪魔の髪に手を触れる。

悪魔はされるがまま、動かない。

彼女の手が優しくそつと髪をかき分けると、彼の白い顔があらわになる。

「・・・あたし、あんたが好き。」

ゆっくりと顔を近づけ、彼にくちづけようとしてみる。

かささ・・・またどこかで葉音が聞こえた。

もう少しで唇が触れる距離、けれど微動だにしない悪魔。

その表情は、何も感じていないかのように動かない。

無反応なその姿に、レイアは逆に恥ずかしくなった。

相手にされていない気がして。

さつと体を離すと、もう顔をみているのも恥ずかしくて横をむく。

「・・・いやならいやっていいだよ。」

「別に。」

ヤじゃないってこと、は。

パツと悪魔のほうに向き直る。

「そつ、なの？ヤじゃないの？」

悪魔は黙っている。

嫌じゃないなら、と一人で舞い上がったレイアは、彼に顔を近づけてそつと目を閉じる。

「じゃ、悪魔がして。」

「したら何かくれるのか？」

やはり無機質なその声と、まったく空気を読まない問いに、ムツとし、言い返そうとレイアは閉じていた目をあけた。

「！」

すぐ目の前に、悪魔の目があった。

灰色か、淡い紫色か、どちらともつかない薄い色の瞳。

長いまつげと、くつきりとした二重。

ほんのわずか、うつとりしているような、眠たげにも見えるその目つきが優しく感じられる。

もつと見ていたいけれど、彼女は目を閉じる。

こんなに近づいて初めて、かすかに彼から感じる、花のようない香り。

唇が、触れて・・・、離れる。

「これでいいか？」

さっきの優しい目つきが幻だったかのように、悪魔の表情には何の変化も見られない。

一方レイアは、胸に広がる幸せをこぼれんばかりに抱きしめて微笑んでいた。

悪魔の腕を両手で軽く抱くと、そこに額を押し付けるようにして小さくうなずく。

「何をくれるんだ？」

興味もなさそうに悪魔が訊く。

「なんでも、あげる。あたしが持つてるものなら、何でも、命でも。」

甘えた声で、レイアは小さくささやいた。

「こんなことで命まで取るか。どうせたいしたものなど持ってないだろう、おまえは。」

彼の腕にくっついたままの彼女の方を見ることもなく、けれど特に振り払いもせず悪魔が言った。

人の心の暗い側面から生まれた彼と、そんな彼を愛することをもためらわず受け入れる、暗さなど持たぬかのような、光そのものような彼女。

正反対であるがゆえに、光と影のように、二人が共にあることこそが真理だともいうように、“悪魔と人間”という特殊な関係ながら、一緒にすごす時間は彼らにとってごく自然だった。

（続）

続き 6

ただの幸せカップルじゃないか、もう！

レイアが悪魔に顔を近づけたあたりで見えていられなくなったラファエルは一人、心の中でぶつぶつと文句を言いながら帰っていく。あの“悪魔”と呼ばれていた男が本当に悪魔なのだとは思えないし、何者であるにしても、彼女になにかしそうには見えなかった。それに、裕福な家庭に育ったわけでもない彼女を口説き落としたところで、その心以外に奪えるようなものなどない。

彼にくちづけようとしたレイアの、今まで見たことのないような女性らしい表情。

くやしいけど、見守るしかないかな。

ひっそりとレイアに想いを寄せていた彼はそう思った。

幸せそうな、彼女の笑顔。

大好きなきみの笑顔。

僕の想いは叶わなくても、きみの笑顔だけは守りたい。

だから今は、まず二人でいられる時間を守ってあげないと。

彼は、村へ戻ると、レイアの友人に、彼は悪魔ではない、と告げた。

彼女を勇気付けるように微笑んで。

けれど、本当に大切だったから。

見過ごすことなどできなかった。

友人は、レイアのいないあいだに、こっそりと彼女の家族に会いに行った。

「レイアは、森の悪魔に魅入られてるんです、本当なんです！」
家族も最初は信じず、笑って彼女を帰した。

心配してくれるのはありがたいけれど、めったなことを言うものじゃない、と。

けれどある日、レイアの兄が一人で森へ入っていく妹を見てしまった。

何の用もないはずの森へ、一人で入っていく妹。

「レイア！どこへ行くんだ？」

「おにいちゃん！」

森へ入るのを止めようとする兄に、レイアは悪魔が自分を救ったこと、母の病気を治してくれたことを懸命に訴えた。

けれど、兄にとって、彼女の家族にとって悪魔は悪魔でしかなかった。

結局、無理やり家に連れ戻され、一人でいることは許してもらえなくなった。

いつも家族が、友人がそばにいて彼女を見張った。

「ごめんね、レイア、ごめんね。」

外で仕事をしているとき、彼女を見張る友人はそう言って謝ったが、レイアは力なく笑うだけで答えなかった。

明るく快活だった彼女は、ほとんどしゃべらなくなり、その笑顔は失われていった。

そんな彼女の様子に、家族や友人は心を痛めたが、それでも悪魔などにレイアを渡すよりはましだと考えていた。

友人の中には、あのラファエルも当然含まれており、彼だけが皆と違うことを思っていた。

“悪魔”といったときの彼女、今の彼女。

生き生きとしていたのは、どちらか。

本来の彼女の姿は。

彼には、どうすべきかがわかっていた。

それでも、いつでも見張られているレイアを、ラファエルはどうしてやることもできなかった。

会いに行かせれば、彼女はもう戻らないかもしれない。

それは、家族にとっては彼女の死を意味する。

二度と会えない、というのは彼にとっても辛すぎて、その手伝いをする決心はどうしてもつかなかった。

彼女の笑顔を守ると決めたのに、そうすることがどうしてもできなかった。

もしもこれが彼の罪となるならば、それはあまりに厳しい。
けれど運命はそう告げ、彼を責め立てた。

（続）

続き 7

木々の間から、月の光が射す。

ふらふらとした足取りで、深い森の中をレイアが歩いてくる。

家族も、友人も、帰るべき村も何もいらない。

ただ、会いたい、そばにいたい、ううん、いてほしい。

魅入られているのかもしれない、魔物でもいい。

死んじやうかもしれないなんて、もうずっと昔に覚悟したことだもの。

彼女は、家族が寝静まったところをそっと出てきたのだった。

二度と戻らないつもりで。

大切な家族たちと、少しだけ心が通い始めた悪魔と。

選べなくて、迷い続けて、疲れ果てて、それでも、虚無感を抱いたその瞳が、一瞬だけ優しく見えた瞬間が忘れられなくて。

暗い森を彼女は歩く。

さよなら、母さん、父さん、おにいちゃん、村のみんな。

みんなは、あたしがいなくても大丈夫。

けど、悪魔は・・・あたしは、悪魔と一緒にいたい。

つかれきった顔に、置いてきたもの全ての重みをたたえた涙が光った。

ふわりと、花のような、なんだかいい香りがする。

そう感じた瞬間、体の自由が奪われた。

まだ呼んでもいないのに、悪魔が柔らかに彼女を抱いていた。

「泣くな。不快だ。」

冷たい言葉とは裏腹に、大きな薄い手のひらが、ぎこちなく彼女の髪をなでる。

「う、ふっ、うええええん！」

その、ほんの少しの優しさは、彼女の涙をとめどなくあふれさせ

た。

「うるさい。」

優しい声で、悪魔は腕の中の彼女にそう言った。

長い時間、彼女は泣き続けたが、深い森がその声をすべて呑み込んだ。

いつの間に眠り込んだのだろう、あれは夢だったのか、彼女は自分のベッドで目を覚ました。

悪魔は、見当たらない。

彼のいない、どんよりとした、よどみの中をただような毎日、ため息をついて身を起こした彼女は、あきらめと絶望に満ちたそこへ戻っていった。

深い緑。

暗い森の奥、空気は重く沈み、動物たちさえそこにはいない。

その、森の奥にただよう空気そのものが彼だった。

昨晚、泣き疲れて眠ったレイアを家まで送り届けた彼は今、人の形をほどいて、霧のように森に漂いながら休んでいた。

人間であれば、眠っている状態。

けれど彼は、完璧には眠っていないかった。

まどろみの中で考え事をしているが、そうしたくてそうしているでもない。

すべて忘れて、眠ってしまいたいのに、聞こえてくるのだ。

泣いているような、震える彼女の声、彼を呼ぶ声が。

だから、当然考えているのは、その彼女のこと。

腕の中で泣いていた彼女、彼女の涙が流れるたびに襲ってくる、氷よりも冷たい手ではらわたをかきまわされる不快感。

心は幾度もとがった爪をつきたてられ、いまにもバラバラになりそうだ。

その涙が、なぜこんなにも不快なのか。

彼女の笑っていた顔ばかりが、心によみがえってくるのはなぜなのだろう。

その涙をすべてこの胸にうけとめてやりたい、できるものならすぐにでも笑顔に変えてやりたいと、強く思った。

なぜ泣いているのか、あのとき彼は彼女の心を探った。

彼女が今考えていることも、記憶も、魔物である彼には目の前でおきたことのように理解できた。

そして、彼女が泣いているのは、ほかの何より自分のせいなのだと知った。

ならば、自分が消えれば、彼女はもう泣かずにすむ。

それは、彼女の心を探るのと同じく、魔物の彼にはなんでもないことだ。

彼女の記憶を消し、二度と姿をあらわさなければいいだけ。

意識しなくともその熱を肌で感じるほど、彼女が彼に寄せる想いは強かった。

けれど、その想いも、共にすごした短い日々の思い出も、初めから無かったように綺麗に消してしまうことが、彼にはできる。

できるはずだった。

そうしなければ、どうなるかは分かりきっている。

悪魔と人間の恋など、不毛だ。

何も生み出さない。

生み出すどころか、壊し続けるだけだろう。

彼女がどんなに求めているようと、悪魔は悪魔、人に害をなすもの。ほかのなにかに変わることでできない。

それゆえに、待っているのはきっと、想像もつかないくらいの悲劇。

それでもそうしなかった、いや、できなかった。

それが自分にとってのタブーであるかのように、彼女の中の自分を消してしまうことで、自分自身が消えてしまおうとも言つように。それでも、そうしておくべきだった。

悪魔・・・ねえ悪魔。

彼女の声がきこえる。

やはりそうしておくべきだった、でもできなかった、それでも・・・。

思考は堂々巡りを繰り返す。

けれど、人は忘れることができるから。

きつと、今のこの時を、何ヶ月か、もしかしたら何年間か、やりすごしてしまえば、彼女は、レイアはいつか俺を忘れる。

そしてこの声もいつか聞こえなくなる。

この声を聞くことは、呼びかけを無視し続け、耐えることは自分に課せられた罰なのだと、彼は思う。

いつか聞こえなくなるであろう声。

彼女の意識がある間、絶え間なく聞こえてくるそれは彼を休ませてはくれなかったが、けれどそれは彼女の想いそのもの。

聞こえなくなるときを思うと、神経がすり減っていくこの責め苦さえ、なにか大切なもののような気がした。

ねえ、悪魔。

聞こえ続ける彼女の声は、今にも泣き出しそうで、いつかのような愉しげな響きは、どこにもない。

どこにも。

広い空間を霧のように漂っていた彼は、人の姿を取り一箇所にとまると、みずからの肩を抱き、うずくまった。

泣いている小さな子供のように。

涙は、流れていない。

きつくつかんだその肩が震えることもない。

石のようにぴくりとも動かず、ただ、かすれた声で一度だけ、彼女の名を呼んだ。

「・・・レイア」

そうして自分自身を抱きしめていなければ、散り散りになったまま消えてしまう気がしていた。

(続)

続き 8

満たされない愛しさは、狂気を呼び、心を壊す。

このままじゃ、あたしは壊れてしまう。

どうせ壊れてしまうなら、もう何もいらない。

痛いだけの心も、あんたのいない時間も、何もかも。

一度は戻ったものの、その後何度も、彼女は夜中に家を抜け出し、森の奥深くで座り込んで泣き続けた。

そのたびに悪魔は姿をあらわすことなく、気づかれぬように、その力で彼女を眠らせてはそつと部屋に帰した。

そうするうち、家族が彼女の奇行に気づいた。

恐ろしい悪魔が、とうとうその本性をあらわしたのだ。

いよいよ彼女をイケニエにするつもりなのだ。

そう思い彼女の身を案じた家族たちは、夜になると、ドアと窓に外から力ギをかけた。

自力で外に出られなくなった彼女は、窓にすがって毎晩弱々しい声で泣いた。

確かに彼は、魔物なのだと、泣きながら彼女は思う。

もうずっと会っていないのに、それでも自分をこんなにも惹きつける。

あの瞳、うつろな瞳で今も彼はあの森にいる。

そばにいて、笑って、いつかその瞳にいろんな表情を見る日がくると思っていた。

笑う顔が見たかった。

自分が、彼と一緒にいて幸せだったように、笑っていたように。なにかを無くしたようなその瞳、とりもどしてあげることができないなら、満たしてあげたかった。

はかなげな花を思わせる、ほんのかすかな彼の香り、夜空から降りる月の光をまとったような、熱を感じさせない肌の色、夜そのもののような、柔らかな黒髪。

彼といた、あの森、深い緑。

薄暗いそこに射す、木漏れ日の輝き。

何を思い出しても、涙があふれた。

その泣き声は遠く、森の奥の悪魔に直接届き、人の苦しみや悲しみを糧にしているはずの彼を毎晩さいなんでいた。

彼女の頬をつたう涙の一粒一粒、その感触までわかる。

忘れる・・・忘れてくれ。

彼自身が出向いて彼女の記憶を処理してしまえば、こんな苦しみはもうやってこない。

一瞬で、すべてがなかったことになる。

けれど、彼にはわかっていた。

あの時でしかなかったことが、今できるはずがないと。

彼女の狂おしい叫び、一秒たりともとぎれずにつながったままの、かなわぬ想いで千にも裂かれる心。

お互いの心は相手を求めるばかりで、今彼女の前行けば、きっと彼は彼女を森へ連れ去ってしまう。

けれどそれは、彼女から人の暮らしを奪い、いままでの人生に別れを告げさせることになる。

人としての生き方を、人の幸せを彼女は永遠に失う。

だから、いまを、この時を乗り切りさえすれば、どんなに辛くともきつと、時間が優しく記憶を薄れさせ、荒れ狂う思いを鎮めてくれる。

その考え方はまるで人間のようだったが、元はといえば彼は、人間の想いからできた怪物、人間の心そのものなのだ。

けれど、長い時間人を見てきた、その感情を糧とし触れてきた彼は、本当は知っていたはずだった。

人間たちがたどった、数々の悲恋の結末を。

その思いが強く、純粹なほどに、結ばれなかった恋人たちが迎える最後が残酷であることを。

薄暗い昼の森で、久しぶりに見るその姿は、見る影もなくやつれ、ふらふらとした足取りは失った心を探してさまよっているようだった。

すぐにでも姿をあらわし、はかなげにやせ細ってしまった彼女を、レイアを抱きしめてやりたい、と悪魔は思う。

けれど、それはできない。

彼女のために。

本当は、そうではなかった。

抱きしめてやればよかったのだ。

今まで彼は、幾度も間違えた。

けれど、まだやり直せた。

これは、最後のチャンスだった。

（続）

続き 9

「ねえ、悪魔・・・」

いつも届く、泣きそうな声とは違う落ち着いた響き。

ああ、おまえの声はこんなに心地よく耳に響くものだったんだな。
おだやかな気持ちだが、彼によみがえってくる。

彼女の声が、癒しを与えてくれていた。

「あんたが、好きだよ。だから、あたしを・・・あげる。」

愛しいものに語りかける、優しい声が、悪魔の心を満たした。

何もいらない。

おまえさえも。

その声、今のその言葉だけでいい。

痛みも、悲しみも、愛しさも、すべてたった今報われた。

お前の中から消えてやろう、だから、俺を忘れて笑え。

いつかみたいに。

やっと決心した彼が、彼女の記憶を操作しようとした、その瞬間、
彼女の手の中の何かが木漏れ日に反射した。

彼女がゆつくりと、前にむかって倒れていく。

彼は急いで人の姿に変わると、彼女を抱きとめようとした。

一瞬。

一瞬だけ、遅れた。

最後の瞬間まで迷い続けた彼の指の、ほんの数ミリ先をかすめて、
彼女は地面に倒れこんだ。

赤い色が、広がっていく。

突然世界が奪われた。

何も見えない。

何も聞こえない。

きつと、おまえの声が聞こえないからだ。

笑いながら、またおまえが俺を呼んでくれれば、きつと世界は戻ってくる。

違う。

お前は二度と俺を呼ばない。

動かない、笑わない。

なぜなら目の前でどんどん真っ赤に染まっていくこれがお前だから。

ああ、そうだ、ちゃんと、見えている。

抱き起こす俺の腕の中で、どんどんどんどん真っ赤になるお前。ちゃんと聞こえている。

徐々に小さく、弱くなっていく苦しそうな呼吸。

おまえは見えるか、この俺が。

ごぼり。

血の泡をふいているレイアの口元が、かすかに、ほころぶ。

おまえは聞こえているのか、俺の声が。

「レイア！レイア！！なぜっ？！だめだ死なせないぞ！！」

胸にささっている刃物をぬいて、傷口をふさいで、少し俺の力を分ければ。

死んでしまう前なら。

彼女が、死にたくないと思ってさえくれれば。

けれど、彼女はただ死だけを望んでいた。

取り乱す彼を前にしても。

彼の気づかぬうちに、彼女は自分を苦しめるだけの正気など、とうに手放していた。

傷口からは血があふれ続け、彼がそそぐ力は、彼女の中に受け入れられず、薄暗い森の空気に、淡い影となり薄れ、溶けていく。

「聞けっ！俺が、俺が間違ってた！もう離れない！そばにいるから！だから生きてくれ！頼むから・・・っ」

怒鳴る彼の声は、ところどころ悲鳴にも聞こえた。

「・・・」

レイアが、何か言おうとするのに気づき、彼は怒鳴るのをやめ、ささやきより小さなその声を、きつと最後になる声を聞き取ることに集中する。

「・・・え、あくま・・・だいすき・・・あたしのいのち・・・もら・・・て？」

血だらけの彼女を、自らも血にまみれながら彼は強く抱いた。

（続）

昼間であること、従って人の目がある、ということに油断していた。

彼女が姿を消したことに、家族はしばらくして気づいた。
が、同時に台所のナイフが一本消えたことまでは、誰も気がまわらなかった。

気づいたとしても、まず彼女を見つけなければどうにもできない。
彼女の母が、あわてた様子で走っていくのを見て、ラファエルは
彼女が逃げたのか、とすぐに思い当たった。

なんとなく、いやな予感がした。

見つかりやすい昼間に逃げ出す、後のことを考えていないその行動。

そして、会いに行く相手は、悪魔。

ここで心配していても何にもならない。

とにかく森に行くしかない。

彼は仕事を放り出し、全速力で森へ走った。

前にレイアと悪魔が会っていたあたりをめざして。

小さな彼女の肩に顔を押し付けていた。

抱きしめた彼女の呼吸が、耳元で聞こえる。

もう止まってしまいそうな、弱々しいその音。

とまる瞬間が、怖い。

目の前にある現実を、この世界すべてを拒絶するように目をきつく閉じて、彼は彼女を抱きしめ続ける。

まるで、そうしていれば彼女が死なないと、信じてでもいるように。

もつすぐきつと止まってしまふなら、本当は聞いていたくない。

けれど、生きている彼女の音を、最後まで聞いていたい。

血の二オイがする。

血の二オイしかない。

まだあたたかい、やわらかなカラダは、もうだらんとしてほとんど動かない。

もうすぐ確実にやってくる、彼女が自分から永遠に奪われる瞬間。かすかに、余韻のように残っていた呼吸が、完全になくなった。彼は閉じていた目をあけ、顔をあげた。

ぼうぜんとした彼の表情は、見ようによつては無表情にもとれる。彼女の命が、そのカラダを離れ、彼は唐突に幸せな気持ちで自分を満たすのを感じた。

苦痛だとか、悲しみだとか、言葉では言い表せない、彼を支配していたすべてを押しつけてしまふ、大きな波。

一番近くで見た、あの瞳を、笑顔を出す。

これは、彼女だ。

彼女が自分の中に入ってくる。

これで、ずっと一緒にいられるんだ。

一つになる意識を通して、最後に彼女がそう思っていたのがわかる。

そして、彼女の命が完全に彼に吸収されてしまふと、幸せな気持ちには幻だったかのように消え、彼はまたもとの又ヶガラに戻った。

本当はあるとき、俺はお前を綺麗だと感じていた。

一番幸せそうに見えた彼女の笑顔が、胸によみがえる。

そのときを再現してみるように、血でぬれた彼女の唇に、唇を重ねた。

なんだか別のもののように感じる。

なまぐさい血の二オイも、塩気をふくんだその味も気にならなかった。

ただ、笑顔がそこにある事だけが彼をさらに打ちのめした。
力なく、けれど手を放すこともできずに、だんだんと暖かさを失
う彼女の体を抱いていた。

すがりついていた。

彼の耳に、遠い足音が聞こえる。

うずくまる黒い影がみえた。

あれは、悪魔だ。

抱いているのは、レイアだろう。

怪我でもしたのだろうか。

苦しい息をガマンして、ラファエルはさらに走る。

近づく、彼女は動いておらず、あたりは赤く。

血だらけの彼女を、無表情で悪魔が抱いていた。

ついに悪魔が彼女の命を奪った、だれが見てもそういうことだっ
た。

「・・・！おまえは、レイアを！」

悪魔に対する恐れよりも、レイアを殺された怒りが先に立った。

悪魔が血の付いた顔をあげ、感情のない声で言う。

「食った」

口元にも血がついている。

彼女の血をすすってでもいたのか。

「返せ・・・レイアを返せ！」

その亡骸だけでもいいから。

その叫びは、悪魔を責めるように。

「いやだ」

悪魔が死体を抱く腕に、少し力をこめたように見える。

「なぜ、・・・殺した？！」

理由を聞いても彼女は生き返らない。

けれど、理由がなければ、彼女が哀れすぎた。

愛していたのに、殺されるだなんて。

「こいつが望んだ。」

うそだ、とすぐに言い返せない。

確かに、森に行けなくなつてからのレイアの様子は、そんなことを考えかねないものだった。

それでも、言うことはまだある。

「だったら殺すのか！レイアはお前を、お前なんかを信じて、愛してたんだぞ！」

「あい？そんなものはない・・・どこにもだ！ありもしないものをふりかざすな、人間。」

レイアの死体を抱いたままの悪魔が、光る瞳でにらんでくる。

ラファエルは、負けじとにらみかえした。

「そうか・・・こいつが好きだったのか。ならお前も、俺に食われる。俺のなかでこの女と結ばれる、幸せだろう？」

あの光る瞳で、心をのぞかれたらしかった。

悪魔の力を見せ付けられ、じわり、と恐怖がわいたが、すでにケンを売ってしまったている。

どちらにしろ死ぬなら、ここで引き下がるのは馬鹿馬鹿しい。

死ぬのは言いたいことを言ってからだ、とラファエルは覚悟を決めた。

じゃなきゃレイアがかわいそうだと。

「お前は、・・・レイアを、どう思ってたんだ？」

無表情だった悪魔の顔が、ピクリと反応した気がした。

悪魔が何を思ったかはわからない。

けれど、少しは後悔すればいい、してほしい。

彼女の気持ちが届けば、とラファエルはたたみかける。

「なぜいままで食わなかった？僕は、見たんだぞ！あんなに親しそうにしてたじゃないか！僕は・・・僕は、だから・・・信じてたんだ！あの子はお前を悪魔と呼んだ、けどおかしくなることもなかった、すぐ殺されることもなかった、だから・・・お前は本当は悪魔じゃないんじゃないかって・・・お前もレイアを・・・」

かすかに、悪魔が眉を動かす。

「うるさい！・・・悪魔が、人を？愛・・・なんてない、ありもしないものをふりかざすなど、いつているだろう?!」

声を荒げた悪魔の顔は、怒りよりも、嘆きを感じさせた。

ラファエルはなおも言葉を続ける。

「じゃあ、なぜずっと彼女を抱いてるんだ？なぜそんなに苦しもうなんだ！なぜ・・・なぜ・・・泣いてるんだ・・・」

（続）

頬を伝う感触。

なぜ・・・？なぜ・・・それは・・・

おまえが いない。

はつきり意識した瞬間に感じた、自分が内側から裂かれる感覚。
硬く、冷たい骸はもう、彼女ではない。

彼女は死んだ、永遠に失われたのだ。

その、二度と戻らぬ彼女を、自分がどう思っていたか。
叫んだ。

そして記憶は途切れた。

「お前は、ラファエル、なのか？」

そう言った零に、微笑んで、スズキは、ラファエルはゆっくりと
うなずくと、問いかける。

「じゃ、きかせてもらおうか。ずっとききたかったこと・・・
ねえ、君は、・・・君は彼女を愛してた？」

ラファエルの青とも緑ともつかない、不思議な深さを抱いた瞳が、
零をまっすぐみつめてくる。

零は無表情なまま、ゆっくりと答えた。

「わかってるんだろ。」

肯定するように、ラファエルが笑顔を浮かべた。
愛していた。

悪魔でありながら、人を。

そして、愛されていた。

俺はずっと前から、知っていたのだ、
愛を。

その感情が、本当に存在していることを。

それは確かにエゴでできていて、錯覚を呼ぶもので、その概念は妄想めいている。

それでも、それが二人をつないでいるなら、共有しているその想いが、ほとんど一つになっているなら、相手を自分自身よりも大切に思えたなら、それは愛と呼んで間違いないのだ。

「じゃあさ、えへへ」

嬉しそうな笑顔をラファエルは浮かべ、言葉を切る。

「今は・・・レイちゃんのことはどうなのっ？ねえっ！どーーなのー！」

続く言葉は、さっきまでとうって変わって、軽いノリでレイへの気持ちを問う。

すっかり普段どおりの“スズキ”だ。

どうなんだろう？

あいつは、レイアじゃない。

似ているけれど、同じじゃない。

レイのために、俺はあんなふうに泣けるだろうか。

認めるのは少しシヤクだが、心は、通い始めている、けれど。

答えは、出そうもなかった。

とりあえず、考え込む俺をしたり顔で見つめていたラファエルの頬を、色が変わるまでつねりあげてやる。

「いたたたいたいたいー！きぎゃう（気軽）におーりよく（暴力）ふるわにやいでっ！」

本当に痛いらしく、目には涙がにじんでいるが、口元は笑っている。

なぜ、笑えるのだろう。

あの時こいつはまだ、ただの人間だったクセに俺に向かってきた。俺が喰ったレイアを、コイツも愛していたからだ。

愛するものを奪われて憎いはずの、その相手になぜ。

「なぜお前は、そんな顔ができるんだ？」

何百年も前だから？

時間が、想いをうやむやにしてしまったのか？

人が悪魔に立ち向かうなら、きっとそれは死を覚悟している。

目の前で一人死んでいるのだから、なおさら強い意志が必要だったはずだ。

そんな強い想いも、時間とともに風化するのだろうか。

あんなに俺たちを苦しめた、愛とは、そんなものか。

考え込むあまり、ラファエルの頬をつねっていた手の力が少しゆるむ。（が、放すことはなく。）

「僕、そんな変な顔？」

どう聞こえたのか、ショックをうけたようにラファエルが返す。

「俺が、憎くないのか？」

零は、彼の言葉にかまわず自分の疑問だけをぶつける。

「ああ、・・・そのことか。ん・・・まあ、ちよつとは、憎らしいかな？」

言葉とは裏腹に、やはり笑顔（涙目）のまま。

「でもねえ、君、あるとき泣いただろ？悪魔の、くせにさ。おまけに倒れこんで動かなくなっちゃってさ、死んじやったかと思つたよ。でも、だから、気持ちは、彼女の気持ちは届いてたんだって、ちゃんとわかつたんだ。なら仕方ないじゃない？そしたら直接手にかけた、とはちよつと思えないし、そうだとしても、君は彼女の願いをかなえただけ。そして、彼女にとつては、好きな人とひとつになるほうが、残りの、君のいない人生よりも大事だったんだもの。・
・あの子が好きになった君を、悪魔のクセに人を愛せる君を、僕は信じてみたい。彼女の愛した君は、僕にとつても大事なんだ。今は・・・とても。」

よどみなく言い切る。

想いは、消えたわけでも、うやむやになったわけでもなく、変わらずそこにある。

何百年という時を経ても、ずっと生き続けていた。

そうだ、それは、ここにも。

「ねー、そろそろ手えはなしてよーほったのびちゃうよー・・・あれ？君・・・」

零は、あのときの涙の続きを流していた。

音もなく泣き続ける彼は今、あの森にいるのだろう。

まだ人間だったあの時、ラファエルは確かに、あんな結末をもたらした悪魔を残酷だと感じた。

死を選ばせるくらいなら、そして少しでも彼女を想っていたなら、どこか、家族の手の届かない場所へ連れて行ってくればよかったのだ、と思った。

一瞬だが、憎みもした。

けれど、その後長い長い時間をかけて、彼の考えは変わっていった。

変わったその考えは、零を見守るうち、だんだんと確信めいたものになる。

そして今、声ひとつあげずただ涙を流し続ける彼を見て、レイアの願いこそが残酷だったのではないかと思うのだ。

なぜなら、あのときすでに悪魔は、その身を滅ぼしかねないほどに彼女を愛していたのだから。

愛していたから、人間としての彼女の人生を奪ってしまうことができなかつた。

人間である彼女を、モノのように、奪ってしまうことができなかつたのだ。

けれど、その愛が彼に負わせた傷は、記憶を封じてしまうほどに深かつた。

そうしなければ、生きていけないほどに。

あの時彼があげた叫び声は、今でも耳に残っている。

生きたまま体を裂かれているような、聞くだけで身がすくむ叫び。自分の気持ちと、その行き場が永遠になくなったことに気づいた

あの瞬間、彼は、自分で自分を殺そうとしたのかもしれない。

まるで後を追うように。

けれど、それはかなわず、ただ記憶だけが、開くことのない扉の奥へ閉じこめられて。

それをこじ開けたカギは、きっと・・・。

「だいじょうぶ、今度は、今度こそ何があっても僕が守るよ、キミも、あの子も。」

ラファエル、大いなる天使の名を持つ彼は、涙を流し続ける悪魔のそばで、自分に言い聞かせるようにそうつぶやいた。

「零さんオネガイ。チャンネルかえて。」

ベッドの上から、フトンでできた芋虫が俺に指図した。

時刻は夜11時半を少しすぎたところ。

すでに部屋は暗く、TVを見ている俺を放置しレイは明日の仕事にそなえて寝る所だ。

ボリウムは抑えてあるが、やはり悲鳴と不安をあおるBGMが気になるのだろう。

「お前も一緒に見ればいいじゃないか“いけにえの味”」

少し古いホラー映画だ。

チープな作りだが、その分ダイナミックすぎる効果が俺的にはストレートに笑える。

レイが無視して寝れるならそれでもよかった。

気になるというのなら隣で一緒に見させるつもりで、あえてイヤホンをつけたり録画に回したりはしなかった。

少々遅くはなるだろうが、別に朝まで寝かせないというつもりはない。

俺は遠慮なくレイに声をかけた。

彼女の答えにも遠慮はない。

「イヤに決まってるでしょ？他のみなよー。」

眠たげな声は、甘えているようにも聞こえる。

「俺はどうしてもコレが見たい。」

音だけ聞こえる方が怖いんじゃないか？

実際はそんなにキツくない、来いよ。」

なんて、俺の言うことを信じて素直に……でもないが隣に座るのがレイのバカな所で、可愛いところだ。

思っても、言わない。

今までそう思っていた。

ふと思った。

言えない、なのかもしれないと。

何度ダメされても引つかかるのは、疑いながらもまた信じようとするのは、それが願いだからだ。

悪魔の俺なんかを、レイは信じたいんだ。

自分が何者であるかなんて捨てて、それに応えたい。

今の俺は、その考えを否定しない。

だが、行動する勇気もない。

失った笑顔が胸によみがえりかけ、もう失くしたくないと恐怖し・

・動けない。

判断がつかない。

何もしなければ、少なくとも今までと変わらないでいられる。

ここに、いられる。

居たい、などと本当は言えない。

そんな立場じゃない。

なぜなら俺は、今 彼女が目を閉じ怯え否定しようとしている“

モノ”なのだから。

人殺し、バケモノ、悪魔。

だけど同時に俺は、レイのそばにいる零だ。

そのレイは、せつかくベッドから降りてきたのに俺にしがみつき、身体をこわばらせ目を固く閉じている。

TVの音に反応し、震えたり、時折ちいさく泣き言を漏らす。

「・・・ムリー」

あまりに情けないその声に、俺はふきだした。

「ふっ・・・おいおい、それじゃ寝てても同じだ。

ちゃんと目をあけて見ろよ。」

「だから、ムリー・・・」

TV画面の中、悪魔は血しぶきをあげて哀れなイケニエをむさばっている。

俺はレイにしがみつかれていない方の手でそっとリモコンを取る

と、さらにポリウムを落とした。

「ほら、もう大丈夫だから少しはつきあえ。」

「・・・う、うん？」

おそろおそろ、レイが目を開けた瞬間ポリウムを元に戻す。

ギヤアアアアッ！

グチャッボギメギベリッ ブヂュッ

びしゃああああ・・・

画面は半分くらい赤系統の色で埋め尽くされている。

「~~~~~！」

悲鳴を上げかけたレイだが、時間は忘れていなかったらしく、口を必死で押さえて声が出ないようにしていた。

別人に見えるくらい力オスな表情が面白い。

恐怖も充分濃く流れ込んでくる。

他の何にも代えがたいその味わいは、映画がほとんど終わるまで

続いた。

「ふう、楽しかった。な？」

声をかけると

「そ。よかったね。」

少しスネた涙声が答えた。

「怒ってんのか？」

「怒ってないけど・・・怖かったし。」

思えばいつもこうだった。

一方的にガマンさせて、放つたらかし。

少しぐらいの見返りを求める権利が、レイにはあるハズだ。

こんなふうと思うのは、つまり、逆に俺が彼女に何かしてやりたいのだろう。

悪魔らしくはないが、もし俺がただの男ならそう考えても何も不思議じゃない。

今だけ、ただの男でありたかった。

自分が何者であるか忘れない、たまに忘れる瞬間があってもいい。

それで自分が無くなるわけでもないだろう。

誰にしているのかわからない言い訳を一瞬のうちに巡らせながら、
きっと俺はその時 勇気を出したんだと思う。

（続）

続き

「なあレイ」

何気ないそぶり

「ん？」

耳に心地よい響きは、あと半歩踏み出すだけで抱きしめられそうな距離感。

俺は、踏み出そうとする。

「最後まで付き合ったゴホウビに、キスしてやろうか？」

「え？」

半分笑いかけたフクザツな表情で、レイが固まる。

こういう からかい方をする、本当に怒らせてしまう事がある。それは今までの経験からわかっている。

だが俺は今 彼女をからかってはいない。

その気持ちは、伝わっていない。

それも、今までの事を思えば当然だ。

胸の内すべてを吐き出してしまえば、俺の望みは叶う。

迷いながら、彼女の頬にキスをする。

踏み出しきれずに。

レイはそれに驚いて小さく声をあげた。

「ひゃ」

「オツカレさん。また つきあえよ。」

他意はない、と軽く笑って見せる。

安心した笑みがレイの顔に広がる。

「ええっ？やだもー、えへへ、えへえ・・・」

それが仮面とも知らずに。

嘘だよ、これも嘘。

俺は結局悪魔で、彼女の笑顔を引き出すには嘘をつくしかない。その目の前で、いくつか悪魔らしい行動を見せたことはある。

それでも、俺が人を殺すところも、ふだんの契約のありかたも、契約した人間が俺をなじる場面も、レイは本当の俺らしい俺を何一つ知らない。

愛想の悪い同居人ぐらいにしか思っていない。

「じゃ、そろそろ寝るか。」

“仮面”がしゃべる。

「うん・・・ふぁ、ふう。」

レイが眠そうにあくびをする。

“仮面”を“子供”から“彼氏”に変えて、レイを抱き上げてベッドに寝かせてみる。

「ふぁっ?」

レイの驚く声。

フトンをかけてやろうとすると、こちらを見つめている。

「何だ?」

「ううん、・・・じゃ、なくて、あのね?」

俺はその先を黙って待つ。

何か気付かれたのだろうか。

「零さんって、悪魔なんだよね?」

「ああ。」

レイの表情が少し困ったように変わる。

「・・・イケニエ、やっぱ食べたりのことある?」

俺は、あきれた。

「だったら出会った時点でお前は喰われてる。」

「あ。そか、そーだよな? あは、あは。零さんがそんなことするわけないよね。」

別にイケニエとしてではなく、なら人を殺すし、喰うがな。

俺は子供の姿に戻らないまま、TVを消しながらレイの隣にもぐりこんだ。

「そうだったとして」

「そうだったとして?」

疑問形で俺の言ったことをくりかえしたレイの肩をかく抱く。

「え？え？」

戸惑うレイに、俺は意地悪く笑った。

「お前を最初の犠牲者にすることもできる。」

鼻先で柔らかく甘い香りのする髪をかき分けて、耳に噛み付く。

甘噛みに、笑いの混じった悲鳴が上がる。

「きゃあっは、あはは！くすぐった、いたつきゃっ、きゃははは
！」

ふざけているフリで、抱きしめる。

「逃・げ・る・な。本気だったらどうする？」

喰われて、くれるか？

「えー、だからあ、そんなこと思ってないクセにい、あはは！信
じてるもん、零さんのこと！」

抱きしめていたい衝動と、苛立ち。

俺のことなど、ろくに知りもしないで。

全てを知られたとき、レイは自分から離れて行ってしまいかもし
れない。

誰だって、死にたくはない。

駆け抜けて行く動揺を、一瞬目を閉じてやりすごす。

彼女を放してやり、あえて笑う。

皮肉たっぷりに聞こえるよう、俺は言った。

「だと、いいな？」

そうだとしたら、どんなにいいか。

イケニエでなくとも、自分か奪った命は数知れないという事実。
目の前の笑顔は、それを知らない。

17 終

頬には土のざらざらした感触があった。

手に触れているのは、たぶん草だ。

地面に倒れていることに気づき、俺はゆっくりと身体を起した。

木漏れ日のさす森にいた。

遠くで鳥が鳴く。

他の音はほとんどない、静かな森。

そうだ・・・俺は血だまりの中で目をさまして、・・・逃げなければ。

この血が何だったか思い出せば、逃げなければ俺は死ぬ。

なぜかはわからないのに、それが事実だということだけはわかっていた。

いいや、“今”はわかる。

なぜか。

あれは全て、彼女のものだからだ。

身体は、ラファエルが連れ帰ってくれたのだろう。

だから、ここにはない。

あつたはずのそれを思い出す前に、記憶が混乱しているうちに逃げなければ。

違う、・・・違う違う違う。おかしい。

混乱などしていないじゃないか。

そうだ、俺は全てちゃんと覚えている。

もう思い出してしまったんだ。

あれは過去だと、“今”の俺は思い出して、知っている。

その証拠に、ここに血だまりはない。

あの時の血だまり、あれは俺が殺したレイアのものだ。

そこから逃げてまで、俺は自分を守った。

自分なんかを。

本当は俺が代わりに死ぬべきだったのに。

俺が全てを捧げ彼女に代わり、それで彼女がよみがえればどんなによかったか。

忌まわしい・・・俺の記憶を全て失って、何も知らない彼女が目を覚ます。

そうなれば、そうすれば誰も苦しまなかった。

彼女のそばにはラファエルがいた。

きっと俺よりもずっとよく彼女を守り、誰より幸せにしたはずだ。なのに、俺が生きていて、彼女がいない。

あれから何百年が経ったのか。

俺はレイと出会い、愛され、自分も彼女を愛そうとしている。しょうこりも無く。

不幸にするかも知れないのに。

いいや、そうなるにきまっている。

俺は、悪魔なんだ。

レイアを殺して、レイも不幸になるとわかっていながら自分のものにしようとしているんだ。

「そうなの？」

不意に隣から声が聞こえた。

その顔を見たとき、俺は自分の胸のなかに何かがあふれるのを感じた。

あたたかい、なのに痛い、優しい、甘い、苦い・・・。

「レイア。」

手を伸ばすと、かわされた。

許していないのか。

あたりまえだ。

わかっていても辛い。

そのまま硬直した俺に、レイアは微笑んだ。

「ねえ悪魔、あたしが確かめてきてあげるよ。」

（続）

続き

誰かに呼ばれている気がして、レイは目をさました。

「ん・・・零さん？」

まだ室内は闇とっていいほどに暗い。

おかしいな、と思う寝ぼけた視界に、さらにおかしなモノがうつる。

ひゅあつ。

自分のノドが息を飲む音がした。

女の幽霊がいた。

それが外国人だとかろうじてわかったのと同時に、レイは気を失った。

次に目を開けたときも、部屋は暗かった。

浮かび上がる白い女の顔。

まだいる。

もう一度 気絶してしまいたい。

レイの願いは叶わず、幽霊はこちらの顔をじっと見ている。
につ、と笑う。

幽霊なのに、陽気な笑顔だった。

怯えていたハズが、拍子抜けする。

「£ § ¢ ¸

幽霊が話しかけてくるが、どうやら外国語でレイには理解できない。
い。

「え？え？」

首をかしげていると、

「¶
##*??」

さらに何か言ってくる。

「わ、かんないよ・・・ノーイングリッシュ、オケー？」

英語かどうかもわからないが、とりあえず話せないことを伝えてみる。

幽霊は少し困った顔をした後、固く目を閉じた。集中しているように見える。

突然、レイのアタマの中に大きな声が響いた。

“きこえるー?! ”

「きゃっ」

レイは思わず短い悲鳴をもらした。

隣で寝ている零は、幸い起きなかった。

彼らしくもないが、かなり熟睡しているのか。

また、声がする。

“あ、ご、ごめんね？集中しすぎたみたい。”

幽霊は言葉が通じないとわかり、テレパシーを使うことにしたらしい。

できることはできるが、慣れていないのだろう。

「だ、ダイジョブだいじょぶ。」

レイが笑って見せると、こちらの言いたいことはわかるのか、幽

霊もへろりと人の良さそうな顔で笑った。

怖い幽霊ではなさそうだ、と思うとレイは少しずつ落ち着きを取り戻すことができた。

幽霊が、おもむろに寝ている零へ視線を落とす。

“ねえあんた、これと付き合ってるんだよね？”

レイは大人で、隣に眠る零は子供だ。

しかし、子供なのは外見だけ。

幽霊はそれを知っているのだろうか。

「え？いや？えっと、どうなんだろ。」

それにしても、関係を問われるとそこはどう表現していいか迷う。付き合っている彼女、だとするならもっと大事にされるはずだろう。

その答えをどうとったのか、幽霊は話し続ける。

“これが、何なのか・・・知ってるよね？”

「人間じゃない、ってこと？」

さつきから零をさして幽霊が、“彼”や“この人”でなく“これ”と表現しているのは、そのせいに違いなかった。

“そうだよ。こいつは悪魔なんだ。そしてあたしはその犠牲者。”

「犠牲・・・？零さん、の？」

“零、か。あたしにとっちゃ、ただの・・・悪魔。”

幽霊はもう一度、ゆっくりと彼の名を呼んで透き通った手をその頬に重ねた。

言い分は恨み言そのもののなのに、悲しげな瞳にはいとおしさが見えたと気がした。

その瞳が、レイの瞳をのぞきこむ。

“教えてあげる、こいつのしたこと。隠してる全部。”

レイの頭の中を、幽霊の記憶がイメージとなって駆け抜ける。

自分の記憶でもあるかのように、胸いっぱい感情があふれはじけ流れた。

深く暗い森、幼い自分、大きな悪魔の大きな手。

悪魔は自分を助けてくれた。

恐れるべき存在ではない。

木漏れ日の下で見る悪魔の瞳、そこに受け入れられたような感覚。

お互いの気持ちが変わった瞬間、会うことを禁じられた。

心は渴き、枯れゆく。

枯れて、完全に朽ちてしまう前に、駆け出す。

束の間、夜の闇に愛しい影を見る。

幻と思える一瞬だけで、気づけばまた渴きのただ中に戻されている。

何度会いに行っても。

苦しい・・・狂おしい。

会いに行くだけではだめなら、一緒にいられないのなら一つになればいい。

魂を捧げよう、悪魔に。

願いは、一つになること。

離れなくてすむのなら、他にはなにも。

胸に突き立てたのは、自由の鍵だ。

痛くなんかないはず、一つになるだけ。

倒れこめば鍵は深く突き刺さり、大きな手が伸びてくる。

迎えに。

“あたしは、そうして死んだ。

あいつは、あたしの魂を食った。

もしかしたら最初からそのつもりで、少しだけ優しくしたのかも
しない。

自分から魂を捧げるようにするためにね。

それでも、あいつが好き？そばにいたい？”

真顔で恨めしげな言葉を吐き捨てる幽霊は、少し恐ろしい感じが
した。

（続）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3362s/>

居候日記

2011年12月21日19時56分発行